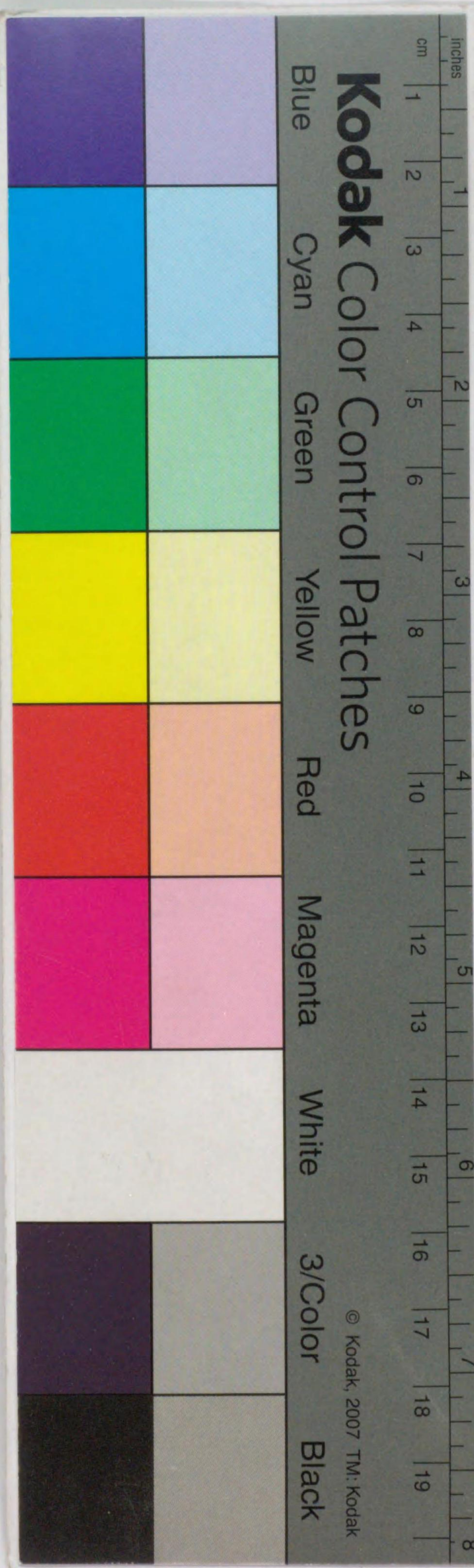
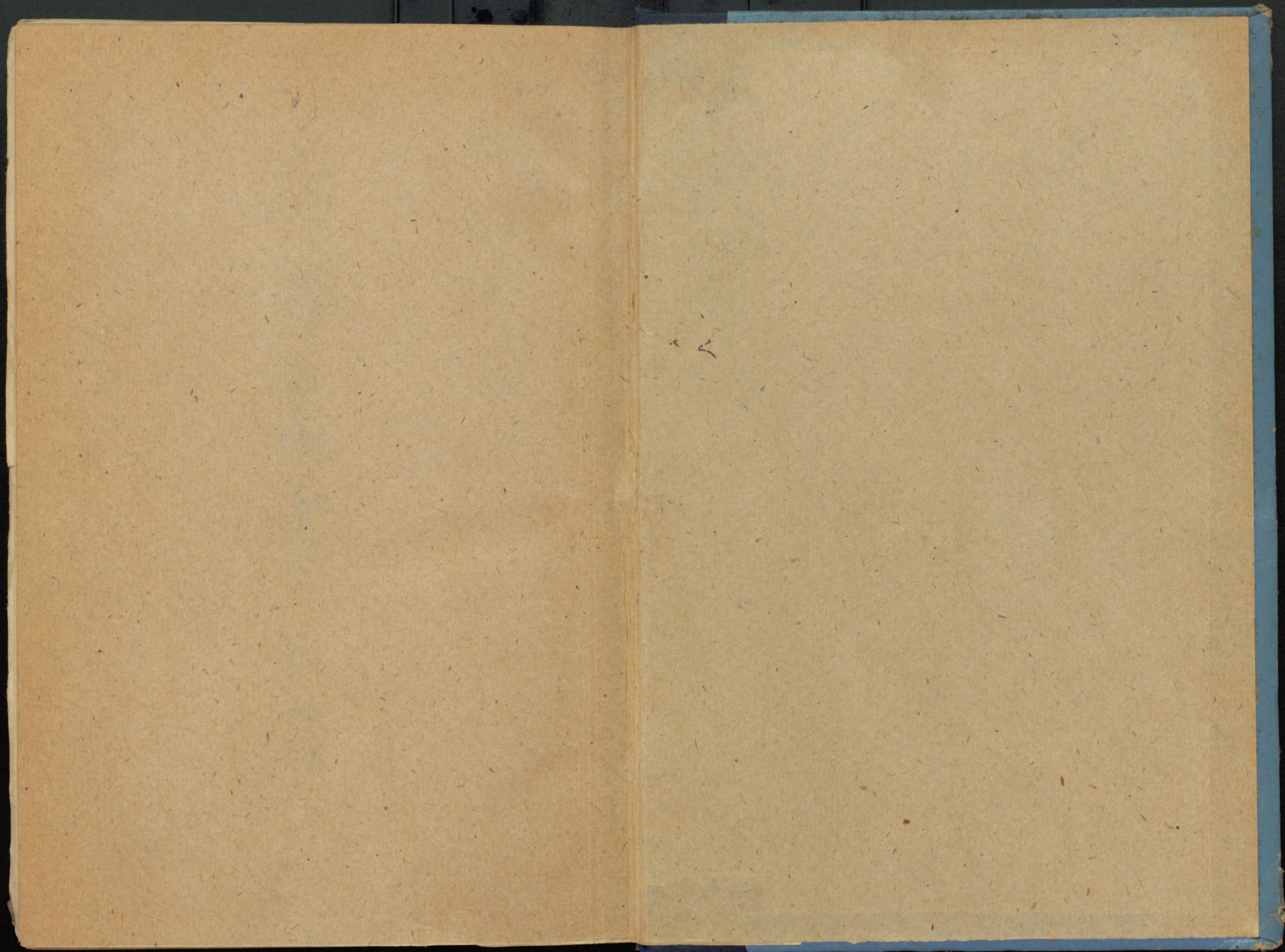


574-7
1200501519314

574
7

〇 複写





2-3500
あ



南部叢書

第六冊



574-7

ORL
1148
(6)

80
7.9

11

11c

7

~~574~~

南部叢書第六册目次

眞澄遊覽記——(一—四五)
けふのせはのゝ——(九—四六)
はしわのわか葉——(四七—一〇六)
委波底廻夜麿——(一〇七—一五〇)
牧の冬かれ——(一五一—二〇二)
於久の宇良宇良——(二〇三—二六〇)
まきのあさ露——(二六一—三二〇)
をふちのまき——(三二一—三六〇)
奥の手風俗——(三六一—四一〇)
遊遇濃冬隠——(四二—四三三)

眞澄遊覽記

梧樓日記	歸雁	宮古紀行	東北遊	奥の紀行	奥州紀行	盛岡紀行	八戸紀行	十曲の湖
——(五七七—五九〇)	——(五六九—五七六)	——(五六三—五六八)	——(五三九—五六二)	——(五二七—五三八)	——(四八一—五二六)	——(四六九—四八〇)	——(四五七—四六八)	——(四三三—四五六)

解題

菅江眞澄の紀行所謂眞澄遊覽記のうち、こゝには「けふのせはの」はしわのわか葉「い委波底て廼夜塵」ま牧の冬かれ「あ於久の宇良宇良」ままきのあさ露「をふちのまき」奥の手風俗「遊遇濃冬隠」干曲の湖の十冊を採録することゝした。これは舊南部藩領内に關係する紀行であるからであり、従つてこの十篇を通じて見るに、寛政元年より同四年に至る間の紀行が欠けて居るのは即ち眞澄が南部領内を離れて、津輕領及び松前領の旅路に在つたからである。

「けふのせはの」は天明五年八月松前へ渡らんとして初めて津輕の地を踏んだ眞澄が、天明の飢饉の慘狀に驚き、且は三年後にせよとの神託に依つて津輕から引き返し、九月の末北秋田から鹿角に入り、二戸岩手和賀の諸郡を過ぎて、江刺郡片岡村に着くまでの紀行であつて、鹿角の錦木塚の昔などを仔細に尋ねて居る。

「はしわの若葉」の配志和は、式社磐井郡鎮座配志和神社の神名から採つたもので、天明八年六月二十九日の自序には、四月初から六月末迄の中尊寺附近に於ける遊覽日

記と云うて居る。大原といふ村に在つて筆を起し、達谷窟の悪路王、中尊寺の榮華の昔から、平泉の初午祭、田樂祭、その他見聞するくさくさの物語を記して居る。

「委波底廼夜廼」は、自序に「寛政八年の夏のころみちのおくのくに膽澤の郡をたちて松前に行のみち行ふり也」とあるが、寛政八年は明かに天明八年といふべきであつて、文中にも天明八とせの夏みな月のなからばかりと書いてある。この年六月十六日から北進の用意をし、十八日出立して居るが、天明八年六月廿九日迄大原に滞在したことが「はしわの若葉」に見え、又この書の文中にも、「二とせ三とせをこゝろになつさひたる」里とあれば、若しくは天明九年では無いかとも思はれる。猶後考を俟つべきものであらう。南部路を北に進んで盛岡を過ぎ、十和田の傳説、千曳村坪の石文の昔を辿つて南部と津輕の領界馬門の關所を越えるまでを記してある。

「牧の冬かれ津輕半島の尖端宇鐵から潮路を松前へ渡つた眞澄は、久しき蝦夷地滞在の後、寛政四年十月七日福山を出帆し、八日に下北半嶋の奥戸オキツに上陸して再び南部領を踏む事となつた。即ち十月朔日から十二月末までの紀行であつて、奥の牧大畑田名部、さては宇會禮山に詣でたこと等を極めて微細に記して居る。

「奥の浦々寛政五年四月から六月までの下北半嶋に於ける日記である。佐井牛瀧脇野澤の奇勝と説話とを探り更に宇會利山にも登つて居る。

「まきの朝露」奥の浦々に續く寛政五年七月から九月までの日記である。寂々たる海邊の路を大畑下風呂、易國間と辿つて大間の牧奥戸の牧にも逍遙した。大畑に於けるねぶた流しの行事、さては九月の初め幕吏石川忠房村上義禮等のこの半嶋に來泊した時の村々の動靜などを見聞して仔細に筆録して居る。

「をふちのまき」寛政五年十月から十二月までの前書につゞく日記である。十月廿一日大畑を立ち田名部から横濱白糠出戸を過ぎて古歌に有名な尾駁の牧を尋ねんとしたが降り積む雪に深くも果さず、泊砂子又を通つて又田名部へ歸つたまでの紀行である。

「奥の手風俗」年明けて寛政六年正月から三月までの日記であつて、主として田名部に在つて見聞したこの土地の風俗を記し、春の初めのさいとりかばかせぎとり、自名の獅子舞やらくさ萩すりなどの行事から、杣山賤の山家に冬籠りして、とし繩を結んで大小日月の蝕を知るならはし、さてはこれらの牒面とする手板や食物のことや、山

の神を祭る行事万人堂の万人牒に記された奇妙なる人の名、老狐の怪談など、微細な観察を以て土俗傳説を記したるまことに「奥の手振り」の書名にふさはしき一篇である。三月廿三日には三度目の宇曾禮山詣でをして居る。

「奥の冬ごもり」寛政七年十月から十二月まで田名部に在つてこの冬を送つた日記である。十月の初には石持の石神に詣でて長歌を奉り、或は小赤川の瀧見などをした。この土地を去らんとしたが例年よりも烈しい寒雪と春をまちてと引き留められた人々の深い情とで冬ごもりしたと書いて居る。

「十曲の湖鹿角の毛馬内大湯を経て十和田遊覽の紀行である。『葉月のこよひいつこにふしまちの月を見てむ十和田やまにかねてのぼらまくおもひしかば』とあり、なにか月の朔のあした云々とばかりあつて、いつの年かは明記して居らぬ。恐らく享和二年以後秋田領の人となつてからのものであらうと思はれる。十和田湖の傳譚鹿角に榮えた長者物語などを記し、繪も亦従つて多い。但し南部路からの十和田道へは遂に廻らなかつたやうである。

以上十冊のうち「けふのせはの」は「はしわのわか葉」遊遇濃冬隠「十曲の湖」の四冊を

除き、内閣文庫所蔵本を底本としてこれに秋田図書館蔵本を對比して校勘訂正したものである。「けふのせはの」は「はしわのわか葉」は秋田図書館本「十曲の湖」の原本は秋田縣仙北郡西明寺村齋藤高英氏の所蔵であるが、明治四十三年七月、石川理紀之助氏と、同氏の孫石川太郎氏とが平鹿郡横手町で謄寫したものを更に中道等氏の寫藏したものに據つたのである。

秋田図書館本は誤謬極めて多く、内閣文庫本と對校して一冊のうち三四十ヶ所も訂正を要するところがある程であつた。又内閣文庫本も秋田図書館本に據つて二三訂正した個所がある。冊中には句讀點の有るものと無いものと區々であるが、こゝでは讀解を容易ならしめる爲めに悉く句讀點を施すことゝした、但しあまりに煩しきものは便宜上省略したのである。

假名遣ひも亦多いが意味の通ずるものは原書の體を重んずるところからその儘にし、又全くの假名書きでその意味の通じ難いところには蛇足ながら右方に括弧を施して漢字を註記した。後考の一助ともならばとの婆心に外ならぬのである。

眞澄は本名を白井英二秀雄といひ、菅江眞澄は其の雅號であつたらしい。三河國

渥美郡の出生で父を秀眞ひでまことと申したといふことで、天明二年二十九歳の時郷閭を立ち、文政十二年七月十九日に卒する迄再び故里に還らなかつた一切の事情等は明詳でない、これは恐らく後日の考覈に俟つべきものであらう。

眞澄は秋田縣角館町の神官の家で病歿し、骸を南秋田郡寺内村に運んで葬つたといふことである。墓碑は寺内村の鎌田と申す神官の墓地に建てられ、眞澄と交友厚かつた明德館國學方鳥屋長秋がその碑文の筆を揮つて居る。碑には文政十二乙丑七月十九日卒年七十六とあるが、仙北郡六郷町高橋軍平氏所藏加藤月篷の眞澄傳には卒年を七十六と書いてあれば、七十六が確であらう、さすれば逆算して寶曆五年の出生といふ事が分明するのである。

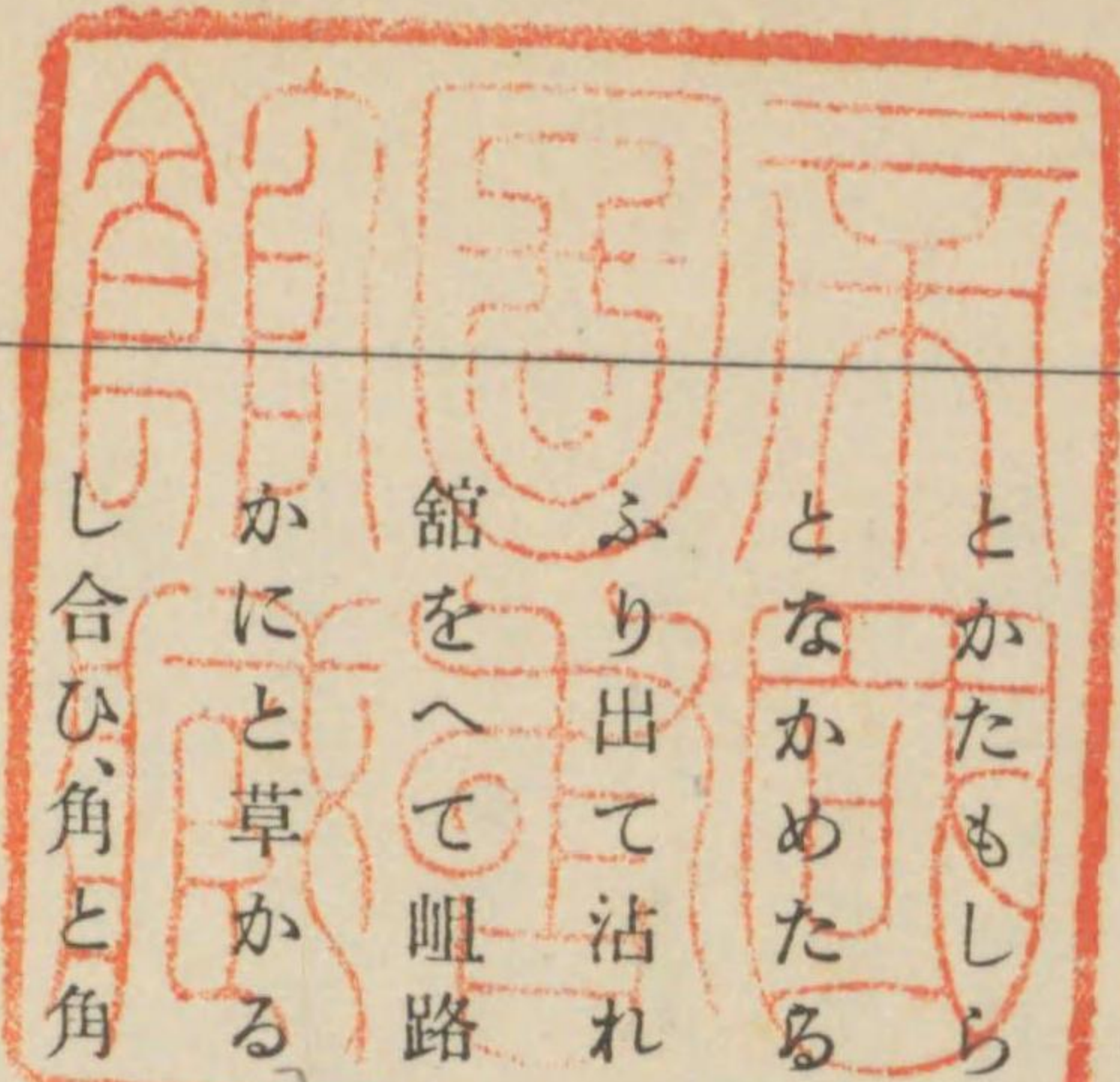
天明四年初めて秋田の地に歩を印してから文政十二年秋田の領土に歿するまで、いかなる運命であつたか、奥羽兩州松前の天地に多く逍遙の旅を續け、到る處に多くの人と因縁を結び、仔細に見聞の筆を動かして、豊潤なる紀行をこの世に残した、即ち眞澄遊覽記と稱へられるものであつて、北方國土の人々にとつては遂に忘却することの出来ぬ一人とはなつたのである。

秋田ではすでに眞澄の八十年祭が営まれたことがある。而も昭和三年は一百年忌に相當する處から、この不遇にして而も博識なりし翁の清靈を慰めんとする祭が執り行はれんとして居るのである。百年の星霜を回顧して、再び索ねて來らざる一旅人の、この國土を踏んだ懐しい追憶を、長へに記念せんとして本叢書に採録したものである。

天明五年の秋、つかるちをへて南部の鹿角郡になりて錦木のむかしを尋ね、岩手郡和賀郡をへて仙臺路にかゝり、江刺郡の片岡村に宿りたるまでかいのせたり。其言葉みしかういひもたらされは、けふのせばのゝと名つく。

けふのせはのゝ

葉月廿六日。あしたのま雨ふりてほとなう晴れ遠近の山のけしきだくうかたなう
見やりつゝ行は遠う行ならん雁の聲のみしてしはしのうちに霧ふかうこめてそこ
とかたもしらされはいつこにかさして行らん山たかみあさゐる雲に消るかりかね
となかめたるいにしへ人の心まておもひ出られてあはれいとふかく過れば又村雨
ふり出て沾れつゝ來ればみちのくの南部鹿角郡土深井トコフナといふ里を左に出て松山の
館をへて岨路わくれば木ふかう茂る山陰にはらくと鳴る音のうちしきるはい
かにと草かるあけまきたとへは鹿のなづきおしとて雄鹿としのぬかとぬかとお
し合ひ角と角とを打たゝかはしけるその音といふいつこにやとうかゝへは雄鹿ふ
たつ木立よりいて、奥山に去ぬ。これなん伊夜彦の神の麓にけふらもか鹿の伏ら
ん皮のききぬきて角つきなからとあるを此こゝろにもいはひてんか。わきてこの
山路は鹿のいと多しといへはこのわらは聞て名さへ鹿角にてとうちわらふに、



いつれをかかつの郡の名もしるくおしかあらすふ秋の山かけ
ゆくくも又おなしう、

つれなしと待やわふらん角つきに雄鹿つまとふわさもわすれて

新田神田ともいふ邑につきたり。川水ふかくいてまさりて、舟わたさねはこゝに泊る
夜更てかさ戸の鳴るに寝さめて、

萩の葉の音せぬ夜半も身にそしむたひねの床に通ふ秋風

廿七日。水あせ行たれば舟渡しぬ。此河を毛布の渡といふか。

夢にさへふる里人にあひかたきけふの渡に袖ぬれにけり

古川といふ村につきて、錦木塚と聞しやあると尋れば、稻かる女田の中にたちて、かり
あけたる田の面を行て、犬杉の生ひたるあなたと鎌さしてそこをしふたり。とし
なる楢のもとにぬるての木櫻の梢かへてなとずこしもみちたる木々生ひましりた
る中に、土小高くつきあけて犬のふせるかとき石をすへたり。これやそのかみ赤
森の郷の邊に、月毎に市たちて家居あまたにとみてにきはしき處ありてけり。其近
となりの里に、柴田原といふにすむ、としたかき翁、いつこよりかをさなき女子ひとり
をやしなひ來りて、あかほとけとはく、みたて、この女ひと、なりてかたちきよら
かに、心なをくあいきやうつきて、あけくれのわさには白鳥のにこ毛をよせて、はたは
りせはき布ををりてその市にもて出てうるを見る人ことにこの女にけさうし、又毛
布のめてたさとてわれくとひこゝろひあらかひてかふ。廣河原といへる里に男
ありて、世を渡るわさには楓の木まきの木まゆみの木ならんか鬼醜の木勝木のかは
さくら苦木あふちの葉に似て葉さ、やかに長く星この五もとの木の枝を三尺あま
りにして、一束ににいひなかどう木といひてけるは、仲人木といふ言葉にてやあらん。
世にいふ錦木とはこの木ともわきて色よく紅葉すれはうへいふにやあらん。むか
しよりことくにいへといかゝあらんか。ひろ河原の男、なかどう木を市路にもて
行てあきなふを、人々かひてわかおもふ女ある門のとなつれば、女見てわかすへき
男とおもへは此木を夜のまにとり入るを、おやは其ことゝしりてあはせたりといへ
り。千束といふも、此木をひとつかふたつかといふ木にてもしるへし。此にしき木
うり毛布あきなふ女のみめことからよきに戀て、あさからす契りて夜毎に人しらす
通ひ今は人めは、からぬかたらひもしてんと、錦木のたかやかなるをその女の門に

たつれば、女うれしうとり入なんとせりけるを、翁とゝめてこの男なせそよなくあまたして立るなかうど木の中にまだよき男やあらんいかにも智あらん男をこそむこかねともなさめと、錦木うる男をおとしめそねみてければ、すへなう翁のこゝろにまかせたり。日毎に重るいくつかの錦木はそのまゝに朽ぬ。此こゝちをやけふの細布胸あはさなることに世にはいひなしぬ。女おもへともそのかひなう、男くれともえあはて物こしにしひあからさまに夜なくない別ぬ。翁みそかに男の夜半にかたらふことをしりて、ひねもすひるはねてよるはいねす、此女をまもりていさゝかもとには出たさす布もうらせす、男いかゝしてか女を見てんと、翁のまろまんまにとつかゝへといとものかなしき聲に、けちかくふくろうのなけは、翁ねさめしてしはふきぬ。ある夜は來りて板戸さとあけていまはものいはんとおもふに、きつねの軒近く叫ふに、翁の夢おとろかいてほるとけさりき。このことをのちにいひつたふにや、いま梟か谷狐か崎といふ名あり。翁ともすれば、あかしぶとて、山ぶとうのかつらの皮を繩になひ、たへまつとして火ともし、うちふりくうちとを見めくれは、男くる夜もく逢かたく、こゝかしことあらぬかたに道ふみ迷ひ、廣河原にかへりぬ。

その行かひのすちを、奥の細みちけふの細道といひて、風張といふ處のしたつかたに中つとてあり。其通路に涙も露もいとふかう物うしとはらひしとて、其さゝ草の露むすふなしと、田に在る女ともいへるに、おもひついたり。

白露のおくの細道ものうしとはらひし草やけふも結はし

鶴田村の邊になみた河といふめるは、あはぬ夜毎くを恨みなかるゝなみたの顔をあらひたるより、川の名におへり(と)も、又いつまで世にすみありつとも、あかおもふ女を見ることこそかたからめとやおもひけん、深き林に入て此男くひれ死けり。又その川に身をなけたるゆへ、なみた川といふともいへり。女もたゝ此男をのみ戀ひ思ひやみて、身はやせて、いたはり重り、湯水のまれすつゐに身まかりぬ。翁うちおとろきふしまろひて、かくはかりふかくせちに契りしなりと夢にもしりせはあはせけんにとてくひなけく、いふかひなくせんすへもなけれは、親ともなくく、男も女も塚の中に男の立つる千束の錦木とともにこめつきて、其邊に寺を建て錦木山観音寺といひしとなん。此男女の塚のもとにたゝすみて、なきたまに手向はやと、五もとの木の枝のすこしもみちたるを折て、葎の上にさし紙に引むすひて、

錦木の朽しむかしを思ひ出て佛にたつはしの紅葉

細布の胸のあはさりしいにしへをとへははたをる蟲ぞ鳴なる

といふふたくさの歌をかいつけて、もとの田つらをつたひあせみちをくれは、かの田の面に女休らひてといふまゝ、しはしとて芝生に在てものかたりを聞は、中むかしの頃まで、ふん月のなかはつかのうちにはたをる音の聞へ、物見坂といふよりみれは、かたちうつくしけなる女の、はたものにむかひ居て機をるを、ある士のあやしみて、此ふる塚の中に女あらん、ほり見てんと、こゝらの人に仰て鋤鋤立てほりこほちてのちは、まほろしに見へたりつるつかの佛もさをなくる音もたへはてにき。さる頃より毛布をるわさはもはら絶うせたりけるといひ捨て、又鎌とりおりたち蒞ぬうへ、今はよに在もまれなる奥布のもちひられしはむかし也といふふるき歌思ひあはしたり。この古川の村長、黒澤兵之丞といふものゝ家に傳て、今もをるといへは、それか宿を尋て、あるしものかたりを聞て、いまはさらに鳥の毛ませてをることはえし侍らしをりとして君に奉ることあるに、そのころは家のうちと清らかに注連引はへて奉る、その織る女も湯あひいもゐしてうみそつくりてをりいとなむとなん。はたはりのい

とせはきゆへ、衣にぬひてはむねあらはるゝよりいふにや今も南部布とて村々よりせはき布をり出しぬ、此たくひにこそあらめ。いにしへのみつきものにはきよらかに織て奉るならん、此黒澤かやにそのかみよりをりつたへたるもゆへやあらん。

道奥のけふのせはのゝほとせはみ胸あひかたき戀もするかな

おもへたゝ毛布のさぬのゝ麻衣きても逢見ぬむねのくるしさ

となかめおけるも、みな此毛布郡のこの宿にをる布のむかしをよみし歌のこゝろ也。やをらこゝを出て、松の木村といふをくるに、石のおはしかたをならへたる祠あり、しなの。越後・いてはわきて陸奥にいと多し、冠田村をへて涙川を渉る。

おほえにわたる衛のわれならはけふのわたりをいかになかまし

とよめるは、この流とも、又古川と神田のあはひのわたりをいふとも、たれしれる人なし。鶴田を過て村の名をとへは、鐵砲とことくしういらへたるとき、たはれうたつくる。

羽よはき鶴田のひなは心よせ鐵砲村の近くありつゝ

花輪の里に出たり。わかことひとりありとやはきくとありけるは、こと處にておな

し名のこゝにもあるにもあるにこそあらめ。此里をはしめ、此あたりのわさとて紫染るいとなひあり。これを染るにかならずにしこほりてふ木の灰をさすといふ。なにくれとこの字のみ付て物いふを聞ておなしう。

野に出てひかしこにしこほりためて染るとそきくかつの紫

かちまる飾摩の里にひとしく、筑紫むらさいの野の外に、かく名の世に聞へたり。こゝを離て木の下に休らひ、

たけくまにあらぬ花曲の松陰もひとり行身のたつきとそなる

大里村にいたりて、作山誰とかいふ宿にとまる。

廿八日。うらふれて同じ旅館に居る遠かたの山の尾、ごとく(じ)に雲のいつこにやと見ゆるは、銅ふくけふりなりけるとか。その山より来るわらは、あちかのこときものに茸あまた入て、馬の齒つぶれてふくさの實を、ひたにくひく行たりけるを見て、あなうまのはつふりくらふ童かなとうちたはれたり。

廿九日。夜邊よりの雨、つれくと晴行、けちめも見へねは、家にをるに菊池某といふ村の長とひ来てかたる。

なか月一日。いまたあまもよの空なり。川水やふかからんとて、家のぬしせちにとめれば、けふもおなし宿に在て、近きあたりを出ありくに、福用山大徳寺に遊ひて、惠音といふ僧としはしうちものかたらひ、此かへさやのをさなき童のあるにとらせはやと、物あきなふやに入て、くだもんかはんとかくらは、年高き翁ふみどもやりてつゝらこあるははこやうのものをしぶのりもてぞはりける。なさけふかゝらんふみもやとうかゝひ見る中に、錦木山観音寺由来記としるして、黒うせづける冊子あり。それしはしといへは翁ゆるしぬ。ひらきみればこはいかに、そのすちくは正しからされと、大化のむかしに、惠正法師のかい残せるに遠きいにしへを忍ひてこゝにのすとかいたり。からふみのまねひふかゝらぬ人のはなう(や)作なせるもんしやうなから、そのことはつはらにしるく、遠き千とせのむかしまでそれと偲ふに足れり。

二日。朝たつをりしも、惠音ほつしとよりさしのそき、又いつかなといへるに、

昨日来てけふの細布たちさらはむねのあひかたき別ならまし
とて、やを出て小豆澤村になれは、いかめしき大日如來の堂あり。そのゆへはそのかみ田山の庄のうちに、平間田本といふ處に、男女すんで耕をわさにめおつねに出てう

ちかへし、鋤を枕にひるねしたりける男の鼻うり秋津むしのさゝやかなるか出て、岩のはさまをめぐり、莓の雫やなめたりけん、羽ぬれて飛かへりひたんのはなの穴に入ぬ。妻もひち枕してけるかおとろき男をおこしぬ、男おきあかりおもしろの夢みしといふとき女しかくくと語るを聞て、さらはその處はいつこいて行て見てんと、女のをしゆるかたをさして尋至り、苔よりつたふ泉をむすべは薫りみちたる酒也。あなうれし、あめのたすけにあへるものかなと、酒の泉のほとりに家たて、風の吹付るやうに日あらずとみうど、なり榮ふるを、かしこくも帝きこしめしてそか持たる子やあると問せ給ふに、かたちあづまうとににざるうつくしき女子うめるを、やかてうちにめし給ひて、御后にたゝせ給ふとなん。里人蜻蛉をだんびるといへは、そのころの人だんびる長者といひたりけるとなん。このたちに居るいくはくの人のくふよねかしく水のしろく流に、行水も眞白のふち瀬となりたるとて、米白川とよふ。此川鹿の角のやうにふり分てなかるゝとて、鹿角の庄といひ、郡は狭布といふへきを今はもはらかつの郡といひならはせり。長者身まかりてのち、この寺をたつへしの勅命ありて、養老の頃とかや、すなはち寺を養老山喜徳寺となん、三野の國瀧のむかし物語に

おなし。いつらや誠ならん、いとふるきみてらにや、運慶の作る五大尊あり、何の佛ならんくちたるみかたしろあまたをたてならへたり。前なる大杉に養老のむかしを忍ぶ、いまた河あさからねは、河岸のさかしき山を左に分ゆき、からくして此河に渡したるといへる、菱木橋はくちて、名のみかけたるそのもとに近う出たり。むかし此橋や天狗のわたしそめ給ひしとて、人ことに天狗橋といひ、又こと處に鈎木のみわたし、しのゝめになりぬるとて、そのまゝに有けるあり。そこを夜明島となん、いふとみち行友のしかかたりたり。

入逢のかねの音する山かけも鳥は夜明の名に聞へぬる

湯瀬といひて湯桁の三ならひたる處ありけるに、湯あひしてこよひはこゝに宿りぬ。やまうとにましりて、山かたな腰にさしたる翁は、万太幾とて狩人の名也。かれかいはく、われ若かりしときは、國々にはせありき、遠江三河などは分て久しうありつなと語るに、ごは何わさしてかとはは、ずほう偽をいへり。山とて露なきこかね出るとて、山てふ山をほりく、て、八のかねとりて安けにくらしつる盗人やうのもの也。そのむくひにや、今はかく夜さむのころさへ、あかつける布かたひらにあしきものくひてし、

ましをうちてはかなう世を渡るとむかしのおかしをくひ、又此むくひの末の子かけ
てなしかはよかるへきと思へと、わさなければとて煙ふき捨ていぬ。暮れは女とも
あまた芋笥かゝへてきあつまる、これを糸宿といへり。うみそするに左あるは右の
膝をあらはしそれなたよりによりぬ、ごは女の身もてあるへきさまともおほへね
と、里のならばしとて、露はかり人にはちらうけしきも見へず、夜ともによろつうちか
たらひて更たり。

麻原の長きよるくをとりめらか語るまとみや楽しかるらん

宿近きあら河の波音、こゝろなく虫の聲々あと枕にひゞき、老ならぬ身も寢覺かちに
さめては、いとゝこしかたのみおもひも捨すいねもつかれぬに、軒はの山ならん、鹿の
ゆくりなうないおとろかしたるに涙おちて、

ふる郷をおもひ出湯の山近くわきて物うき棹鹿の聲

三日。湯舟にいまた星の影あかうさしうつる頃起出て、人みな衣ふるふわさしてこ
ゝを出遠かる、人のいふ過來し小澤てふ南に、長牛といへる山より砂金なるといふは、
皇の御代榮へんとみちのくの山はいつこもくむかしよりこかねの花さきけるに

こそあらめと、齋田・兄畑・佐比内などをへて折壁といへる里あり。こゝのあら垣に關
手あらためて通しぬ。われ持たるいさゝかのこかねはやはしき世のよねのしろに
つかひはてゝ、椎の葉に盛らん料もなければ、ゆくゝうすきころもひとへをうりて
むとおもひつゝ、

いく千里きならし衣ぬきかへてあしをかりねの長き世にせん

となかめたるをかたれば、人さもとといひて又歌をわらふ、やをら田山といふ里に出た
り。乃村(この)にてはものかく人まれに、めくら曆とて、春より冬まで一とせの月日の數を
形にかいて、田植へ耕の時をしれり。世にことなれるためしなりけり、吉澤たれとい
ふかやにとまる。

四日。ようへより雨ふる。苗代澤村梨木峠を行に、牛をふ男けふはもゝさとを行て
宿からんにいそけとさきなる子らにいふ。道をとへは一塚といひ、あるは一里とい
ふ。六町を一里としひとつかとは七里を合てよそちふたまちをいふなりけり。この
國のならひ也半馬のゆきかひしけり、路は田の中のことにぬかりはきふかうさし入
て行なやめは、日たかう曲田まがたといふ邑に宿つきたり。夕附行ころ、雨は晴たるに露い

とふかう、外山の鹿の聲高くなければ、やのわらは窓にかしらをさしいたし、あの山にてかのしゝがさかぶことよといへは、男ら鹿は世におもしろきもの也、何かしの神の夜みやありつるに、こもりあかしたるあした、笛つゝみのこゑにうかれて、放ちたる野かひの馬にましりて、角ふりたてゝおとりくゝめくるを、この小童めかさかびしまゝ、木山の中にみなとひ入ぬ。われかや野にかくろひありて見しをりの楽しさとかたるを、ねふりくゝ聞みたる翁、あくひうちしてさるゆへ世中に在る獅子舞は鹿踊を見てはしめたりといふか誠ならんとかたる。鹿は聲のをやみもなうなけば枕とりつゝ、

さらてたにさひしき夜半の草枕なみたなそへそ小雄鹿の聲

五日。とのくらみ行は、女戸おし明て、こは水霜露をしかししろ霜ましりふりたりとて、眞柴折くへ物にるにあたりて出たつよそひす。けふは末の松山見にいかんとおもひて、どくくゝと出ぬ。梨木坂のこなたよりは二戸郡といへり。保登澤石神中齊駒ヶ嶽をへて浄法寺とて、椀おしきやうのものをつくり出すをわさとせり。むかし浄法寺なにかしといふ人しるよしゝて住給ひしなと語る。吉祥山福祥寺に入て活龍上人とかたらひて、こよひ此寺一夜をとありけれと、心せけはこの寺をまかんと、石

淵岡本なといふ村をも過るに、老たるほうし、しりよりゆくりなう聲をかけていはく、いつこにか旅人は行そとこたへて、世にありとあるかしこきところをこそたつね奉り侍れ。老ほうしさらはこゝにも桂清水とてたふときところあり。いてをしへ申へしとて、年ふる桂木の根より水細くわき出るにほくらをたてり、是なんむかし圓仁大師の夢のみさかありてもとめ給ひしとかたり、ばたみてらの觀世音は行基菩薩の作り給ひて、そのいにしへは聖武天皇の建給ひて、そのかみはいかめしき堂とも多かりつるなど、御前にぬかつきて語るを聞て水月の意を、

かしこしな幾世桂のかけそへてなかるゝ水の月やすむらん

山路はるくゝとわけ来て、金葛といふ村にやとかり、うすき衣をかたしきて、いとやすからぬあれたる板戸のひまより、夜半の秋風寒く吹入て、はたへをおかすに、いとふしもつかれ、丈風なひきそ衣重ねきてよとあと枕のかたくへマ、なとし給ひし父母のふかき情をいまはたおもひ出て、たゝなみたかちに夢もむすはす。

あなさむし衣をり縫ふ人もかなくすのかつらや糸によらなん

六日。筑館十日市中澤二戸のはつれよりしはしゆけは、をのかつま波こしつとや恨

むらんすして麓に至る。今は浪うち坂といひ波うち峠といふ。上れは土の中よりわれから波間かしはそなと小貝ほりてつとにとひろふ旅人あり。この山越れは福岡の郷に出るといふ、おもひとそ千島の奥をへたてねとありける壺の碑は、坪といふ村に埋れてあり。しほかせこして衛鳴玉川は閉伊郡也。徒膚の薦いつてふ處、外ヶ濱邊にもまた此あたりにも宮城野の邊にもありといふ、此末の松山を、仙臺路にも在けるは、夫木集にうつる色にや秋の越ぬらんみやきか原のすゑのまつ山といふ歌のあれはいふにや。しかはあれと本中末とそこにはあらじかし、この浪うちは近き邊に中山といふすくあり。是なん中の松本の松は、盛岡に在りとかたる人もありき。いつれやまめならん。ふたゝひ一戸にかへりくとて、多かる薄に風落ちわたるを、

風吹はこゆてふ浪と見ゆるまでなひく尾花か末の松山

栖穴村、白子坂、荷坂、宮口、小澤に來けり。こゝにこの夜をといふに、やのあるしの女、よねてふものをひとつぶも持ねは、やとすることかなうましとて、ゆるすべうもあらねば、ひと夜斗はものくはてもあらんかし、みち遠く足つかれたれはとひたにいへはざ

らはやとりねとて、やを粟の飯にしほつけの桃の實そへてくれたり。をのれらは粟のみくひぬ、ことしも又はたつものみのりよからす、わひしき世の中とうちなけきて、これも枕にとて米はかる榊とり出てふさしむ。いぬれは風はけしく吹に、ふる郷の夢もなこりなうやふれて、

露なみたますほの薄枕にてかりねの床の風そ身にしむ

ものゝ音したるに又めさめて聞は、とりもいまたなかぬに、やの翁火いたくたきて何ならん磨ぬ。枕もたきて見れば、爐のへたにをのまさかりを、ひのわれのやうにときならへたり。こはこの離家に在てわか命やほろひん、又おひやかしかねあらはとらんとやするか、衣やとらん、ざりければいかゝしてこゝを、はのかれんとためらひ、みしかきさひたちを身にそへ持たるに、たましみをこめてひそみたちてひかへたるをやしりたりけん。ひげかきなてゝ、くまゝに光る眼をとほせ、白髪ふりみたしたるは、ふりさへおそろしきに、とより人のけはひして、戸あらゝかに引あけて、あら男二人かしらは布につゝみ、はちまきして、けらといふみのきて、爐の中に足さし入て、寝たるは、たそ旅人といふ、ひとりかといひて、其こたへはあらて、夜あけぬまにといふに、いよゝ

心おちぬすおそろしさいはんかたなし。翁聲たかうみな來り兄なくとよはふさ
らにこたへねは春木樵木をなへて春に伐の大なるして板しきも通れと二うち三う
ち打て、兄おきよくといふに、おき出てこてさしはきまきしておなしさまによそひ、
門より歌うたひていさなはれ出行にあきれたり。ことしらはあやしみたりお
き出て人はいつこにととふ、こたへて山に行たり。また夜ふかしといひつゝふせは、
こはいかにそやかくはかり人はうたかふものかはあかこゝろより鬼も佛もをのつ
から作り出んはいとやすけなるものかとはちらひてふしぬ。

七日。飯いてたりおきよといふに、うちおとろけはよへの人々みならひて薄墨色の
飯をくひぬ。われもれいの女郎花を椎の葉の露はかりなめて雨ふるに出たつ。高
屋舗・笹目子・小繫・自行・中山のうまやに到る。

錦着て歸るとや見ん旅人のわくる紅葉の中のまつ山

摺糠馬羽松馬不食とむかといふ處あり。頼義のおほん馬の料の糠くちすたれてう
まのはまされば捨たる處の名なるとなん。御堂ミツツといふ村に來りこゝにをさめたる
觀世音ほさちは、うまやとの皇子のおき給ふともはた御堂は田村麻呂のたて給ふと

もいひつたふ。北上山と鶏栖に額あり御前にいさゝかの泉あり、これ北上河いにし
川と源也。ねかひある人は、この水にかうより打とて、紙をさきかうひねりをして水
の面になく、かなふべきはしつみ、うけたまはぬは浮きたよへるとそ。ふがねかは
らげなと行に旅人の云、こたひは戸のほとりは水あまれ(ふ)なかくのさはき也と。さ
れはこそ玉川みやしまの見んことをとめつれとかたりあひてくらミヤツに沼宮内
とてかまのはきまきつくりあきなふ里に宿とふ。雁の鳴たるに、

雲井路をゆきやわふらん思ひやるわれも夜寒の衣かりかね

八日。つとめて寺林川口をへて、卷堀といふ村に齋ふ、金勢大明神といふかん籬あり。
こは名にたかふ石の雄元の形あまた祠にをさめたるはいかにととふに、近きころ盜
人とりうせたるをもとめ、いたし奉りてのちは、此里のこと處のやにと人のこたふる
を聞て、其處にあないさすれは、一間の小高きところの机のうへに、黒かねのなゝきは
かりのおばしかたをふたつ、みなくさり付たるをいやし奉る。あるしにけへをとへ
は、むかし粟アヲ生の草ひきやる女のたぶさにさはるものあり、あやしの形なれはとり捨
たるに、ふたゝひしかせり。さりければとり持かへりて道祖神とはいはひたてまつ

りしかばしめといふ實方朝臣のみたまひしはこゝにや又こと處にや。澁民^{むかし}
といひし 處なり 邑に來けり。長根といふところに、千本杉とてひともの根よりいくもと
 も生ひたてる木のかれたるもつれなし。

生ひ初し松は一木をいくもとか過しちとせの數にたちけん

此したつかたにぞうりわらんつすへてななを(はな)もなきふみものを木の枝にかけたる
 は、わらはやめてとねきことしていゆれば、かくなん人ことにかくるといふ。女あま
 たうすつくをみれば、鍵錢とてせにみそ斗に鍵あまたを緒につらぬき腰に付たるか
 榊とるほうしに鳴りぬ。又聲をそろへて「はちのへの、とのごたちは、にちやうさへ
 た能さへた、おしもなたと、鎌にちやうさいた、能さいたな、十五七か澤をのほりに笛を
 ふく嶺の小松がみななひく」とうたふを聞て、

榮行みねの小松に笛竹のちよもこもれとうたふ一ふし

左に姫か嶽といふ山あり。右にいや高きねのありけるを、かんじゆさんといへたる
 はと(と)へは、名をいはての丘ともしるへきを奥の不盡とはこれをいはわしと、圓位上
 人もなかめ給ふと里の子らかあたしことにつたへき。巖^{カシ}鷲は岩^{カシ}手をかいあやまれ

るにやとおもへと、鷲の形したる岩ありなと、口なしの一人そめの薄梶いはての山は
 さそしくるらむといふ名たかきをなど、かままちくにはいふらん。かしこのあた
 りは「誰れをともしはての野邊の花薄招きに招く秋の夕暮」とにかくに人に磐手の
 野邊に來て千草の花をひとりみるかなといふふるき名ところにやあらん。此のみ
 ねに雲のをるもねたく、

紅葉するいろこそみへねかゝりてはそれといはての山の夕雲

磐手の郡あるは信夫の郡にも、此の山のありといふは「別路はけふをかきりのみちの
 くのいはてしのふに沾る袖かな」と師氏のなかめありけるよりしかいへるにや。そ
 のむかし岩木山に安壽姫をまつり、此たけには津志王丸をまつる。又いふ岩木ねは
 つし王のみたまをいはひ、此たけに安壽女のみたまをあかめまつれば、安壽山といは
 んをあやまれるなど、後の世の人のくさくにいふに心まとひぬ。まほなることや
 いかを知る人にとはまほし。此あたりたゝら山といふなるは「陸奥の吾田多良眞
 弓つるすけてひけはか人のわれを事をさん」とよみけるところにこそあらめ、夕霧に
 こめて見やられす。

森岡に出たり。とみうと軒をつらね里ひらうにきはし、北上川の邊に宿かりつ。船橋あり、かみ河のひろ瀬の面に舟をひしくとならへて、行かふ人も上弦の光にあらはれたり。

ふなはしの數もしられて行かひのあらはれ渡る月の夕影

九日。けふのいはひに菊のふみたるを折て朝とく出たつ。

いさけふの例にぬれんとしら露もはらはてかさす菊の一枝

はたつ斗も小舟をはや瀬にうかへ、中洲に柱たて、かなつなを引はへつなき板をしいて、うまも人もやすけにわたりぬ。此はしめは毛詩大明の篇に造舟爲梁となんありけり、晋の杜預とふ人富平津といへる水ひろきなかれに舟をならへて浮橋としけるを、武帝觴をあけてめてくつかへり給ひしとなん。佐埜のふなはしとりはなしとふるき言の葉にいひわたりあるは越の國にありとのみきけと、いまたふみも見されは、めつらしくたすみくわたる。このあたりの業にはなへてあかどころとて黄精をむしたさらかし、あるは膏のことにしてうるめり、いみしき藥なり。津輕町上野見前といふ處のあはは、

月花のたよりよからん泉郎のかまへてふ名こゝに在けり

やをら十日市町となんいふを過る。これより郡山といふ大槻の觀音と人のたふとめるは、聖武のみかとのおき奉り給ふといひ傳ふ。日詰といふ處あり、これなん清衡の四男樋爪太郎俊衡入道の館の址は、五郎沼のひんかし北に在といへは、處の名にもいふならん。路のかたはらの石ふみに志賀理和氣神社とかき、裏に赤石明神とえりたり。しかりわけの神は、斯波郡にひとつのかんかきといふは、此おほん神なればまうて奉る。又祠を北上の河の涯近くひんかしにそむけて立るは、此みな底に夜毎夜毎に光る石あるを神とは祭りしなん庵よりほうしたち出て語る。櫻町といふ村あり。

春も又こゝにはなん山さくら味ちて梢の紅葉をそみる

西なる吾妻峯といふ麓に、志和の稻荷といふ神あり。いにしへの鹿獵分の社こそ此神の瑞籬を申奉りけめとをしゆる人ありき。しかはあれと、行みちしれされはとめつこのおほん神や倭日向建日向八綱田命にておはしますときけはよみて奉る。

八束穂に秋の田の實やみのるらんこは鹿かりの神の恵に

かくて細きなれをたくな河とてわたれはゆふへになりぬ。

行水や海士のたく繩くり返すいとまも波にくる、秋の日

くれて石鳥谷といふ里に宿つきたり。

十日。大瀬川といふに土橋かけたるを渡る。この流は藤原朝臣盛方の「ほともなくなかれてとまる逢瀬河かはるこゝろやあせきなるらん」となかめ給ひしはこれともはらいへり。八幡を過て宮部(宮目)をくれは花巻といふうまやあり。むかしや牧のありけるやらんといふにさはこたへすむかしは河岸に花多くありてちりうく頃手水にうつまかれてたゆたふよりいひし名とこたふ。こゝに居る伊藤修といふくすしげふは止りてとひたにいへれば、日たかう宿もとめたり。夕暮ちかつくに旅人ふたりとふらひ来るは、五瀬の國より國々めくるとて、櫛正唯岩波良清とて歌よみはいかひする人也。

十一日。けふも人々とともにまとゐしてあかす旅の思ひも忘れたり。

十二日。この人たちことかたに出行を名残猶やらんかたなう、いつこにてめぐり逢んと契てたゝはやといふ。袖をひきて此日斗はとておなし宿に暮たり。

十三日。けふはとて共にものしたるをわれ斗せめてとて山田のひたに止められて、出たゝす。正唯ふてをとりて、

めぐり逢ふ月の例をかけておもひけふの別を夢いふな君

鳥か鳴東の奥はいとゝしく別れまたくそおもほゆるかも

といふふたくさの歌作てわれに見せける返し。

めぐりあふ月のためしはおもひともけふの細布たち別うき

別行ちまたもつらし鳥かなく東のおくをかなたこなたに

いはなみよしきよの句に、

見とゝけよ木々の錦のしたしつみ

となんありけるに、

ひとりほこはん霧のやまみち

とつけて里のしりまて人々と共に送り出て、歸るさにあふけは早地峰早地とて高きねに瀬織津比咩をまつると聞はぬかつきぬ。其近き邊に十握のみやといふありて、そこには日本武のみことのみいくさひきみ給ひしころのみかりやのあとゝいひつたふ

あり。この山より射はなち給ひしかぶらのひゞきにみなをそりわなゝきおさせる
 ゑみしら名残なうにけしのきたりとか其箭のとゝまりしみねを的場山といふとか
 たるを聞つゝ修の家に至る。くるれはこよひの月見んと人々も集ひ來るにとにあ
 ふきて、

明らけき月のこよひの初霜に手折わつらふ庵の白菊

十七日。この二三日は風おこりて日記もせずふしくらすに、戌の貝ふくころとに聲
 たかうよはふはいかにときは、すは火のこと也とよめきさはくに、はやちかとなり
 のやまてけふり立わたり、なにくれの調度ともてはこふにましりて、われもこゝら
 のふみともおひもち出であるしをたすけぬるほとに、枕とりしあたりもみな火かゝ
 りて一ときのうちにあまたのやは灰となりて夜なんあけはてぬ。いみしきわさは
 ひにあへりとおしなへてうれへなきさはきたり。

十八日。修はやのしりに(い)ぬくはところのよきやのあるにうつりて、われにしはしは
 かゝるさはきをな見捨そ、いましはしありてとやの人こそりていへは止りぬ。
 遠きさかひよりこゝにすみつきたる老たる女、布まへたれをし頭はつゝみにかくし

たるか來りて、あるしに藥たまへあか家のやまうどやいつか(マ、)よからん糸はねの
 一筋もなでねへしつゝれやつこもさゝねへし、垣(マ、)ねかいたま猫けた物(マ、)がもくりあり
 くに、又おやこまきはやけたれば此としいかゝくれんとうけてさりぬ。此物語きゝ
 もしられねは、いかゝそと罷る人にとふに、このあたり(マ、)てはたゝ麻苧の糸をのみ糸
 はねといひ引をなつるとはいへと、ごとくにゝはえしり侍らしとかたはらよりこた
 ふ。ふるきこと葉にやあらんときゝつゝ戯れうた作る。

糸なでは綴奴もさゝすきてあれにあれたる垣ねかいたま

このかりやに日數へぬ。村谷守中といへる人情ふかううすき旅衣して夜寒の秋風
 いかゝしのきてんと綿あつゝと入たる衣くれたりける。うれしさにもものたうひ
 し人にをくるてふことをもと末の上と下とにおいて六くさをつくる。

もみち葉の色こそ増れきのふけふ時雨にけりな峰はいくたひ

のち山路見しは物かは語りあひおもなれてこし里はいくさと

たちわかれ行(マ、)えもうしあすよりは獨たとらんしらぬ山路に

うらかくるあさちかや原ふみしたき野邊にやからん草の枕を

ひたすらにかけてをへ玉つさはをたへの橋の絶す久しく
しも、や、おくの細道ふみ分てけなんおもひは別とそしる
廿七日。くすしをさむのやを出たつに、あるし。

白雲のたちへた、れる遠方をよそにのみみて戀や渡らん
とよみてくれたりける返し。

ふた、ひと契りおきても白雲のよ所に隔る身をいか、せん
行々紅葉のおかしかりなんといひて。

草枕うき旅かけて故郷に梶の衣きつ、行らん
かくなんありける返し。 守 中

ふる里のつとに見なまし唐錦梶色そふ人の言の葉
月見しことな忘れ給ひそとて、 文 英

草枕むすふ旅ねの夢にても見し夜の月の影なわすれそ
と聞へし返し。

友に見し月の圓居のわすれしなしのひてもかな空にしのはん

ふたたひとて、

別れても心へたつななかめやる空ははるかのさかひなれとも 文 英
とそありけるに返し。

われかてはことこそたゆれ大空に通ふ心はへたてさりけり
又おなし人々の句に、

溪路あるし修を
溪路といふ

これよりや夢の浮はし時雨めり 買 絲

日うつりやかさしの笠に女蘿もみち 守 中

人遠し撮折はきにあきのかせ 至 岳

笠めせは君と秋との餘波かな 素 綾

幾久に名をこめてはおしき別れかな

この人々送り出てみちの左に鳥屋崎の城といふ。これなん琵琶の柵といひて安倍
頼時のつきそめ給ひしとかたり、又道のゆんでめてにとしふりたる槻と椋の生立る
を筆塚とて、頼朝のむかはせ給ひしころほひより生ひ立りし木にてありきなといふ
を、

治れる御世のしるしは毫塚にかきつもりにし年そしられぬ

四〇

送り來つる人々は豊澤川の橋をふみ過ぎて、こゝに扇堀とて人にふたゝひ逢んあふきてふ名のよければ、このきしべより稗貫和賀と郡はへたつなと處の人のをしへたり。きといへる細きなかれあるより稗貫和賀と郡はへたつなと處の人のをしへたり。成田村を過て岩田堂二子この二子にあやしのみたふちを八幡といはひたり。飛馳森といふなるは、天正十八年の春のころほ(ろ)ひたる和賀の主馬のかみと聞へたりし城あと也。此主馬の君の遠つおやは多田薩摩守頼春の末也。頼春の君は伊藤入道祐親の女滿幸の前のうめる(字が)祐親入道都より歸來て此ちこを見てこはたかぞ男やあらんととへるに、まんかうの前のまゝ母きみ見たまへ、此子は蛭か小島のお島もりかうませるおほん孫にてさふらふなり瓜なんふたつにはやしたらんかこと能似たりと、にくさけに足もてかいなてそなたにおもむけてけり。すけちなに頼朝か平氏への聞へ又つみんとたねといひたすくへうもあらしと、はらくろにのゝしり、水深き淵に捨へしとくゝといへれば、すへなううしなひ奉りしとこたへて、齋藤五齋藤六と曾我太郎祐信等とこゝろをあはしてこのをさなき君を人しら

すたすけまゐらせはぐゝみたて、頼朝あめかしたをまつりこち給ふのときをまち得て、君信濃の國善光寺にまうて給ふをりしもみちすからこのわか君のうへを申いつれは、頼朝公になうめてよろこひ給ひて、梶原をめしていつらの國にか二三万石のところやあらんとらせよとのたまふに、みちのくならてかきたる城もあらざるよしをけいすれば、それにとのたまひしかは住給ひしとなんいひ傳ふ。齋藤五齋藤六は、のちに小原八重樫となりて、此末今も南部にいと多しといふ。其城の址に夏と秋と再ひなる栗の樹も待ると村長か語るに、日影かたふき早地峰をむかふに風いと寒く見るく、

冬ちかみあらしの風もはやちねの山のあなたや時雨そめけん

黒澤尻といふまやにつきて昆といふ何かしかやに泊る。

廿八日。あるしにいさなはれて阿部のふる館のあと見にとて行ぬ。加志といふ處に黒澤尻四郎政任のありしいにしへを偲ふ。北上川をへたて、國見山のいとよく見やられたり。國見てふ名はところゝに聞へたり神武の帝八十梟を國見丘に撃給ふのとき、かん風のいせの海の大石にやいはひもとへる(は)したゝみのとなかめ給ひ

しことともありけるをおもひ出ばたやまとはむらやまありととりよろふあまのかくやまのほりたち國見をすれはとすしたり。里人のいへらく、

音に聞くにみの〔山の〕霍公鳥否背の渡くり返しなく

又いふ。

みちのくの門岡山の時鳥稻瀬のわたりかけて鳴なり

此ふたくさいつれをまこと、いひもさためん。歌はれいの西行にたぐふむかし和賀郡江刺郡の境をあらそふこと、し久しかりける、その頃白狐にきてをくはへて駒ヶ嶽にさりぬ。これなん稻荷の神のその筋をしへ給ふにこそあらめとあらかへるものらか中うちなこみあなかしことかたりあひ相去と鬼柳の邊まで水落をあらためさかひには二股の木を植へあるは炭を埋みたり、これなん炭塚といふ。さりければその川を稻荷の渡あるは飯形瀬といひつるを、いまはいな瀬の渡といふ。又西行上人といひはやすうた「みちのくの和賀と江刺のさかひこそ河にはいなせ山にまた森といふあり。いな瀬の渡を岩城川同名ところくといふ。

廿九日。きのふの夕つかたより雨けふのあしたに猶ふりまさりてければ出たゝす。

この日三九日とて家毎にいはい、わきてすゑの九日なれはといひて、茄子の薫ものくはさるはなし。雨はいよゝふりくれてつれゝとひとりともし火をかゝけて人の書おける冊子ともありけるを見れば、いつれのおほときならんむつきのはしめつかた、春日山に鹿の鳴たるはいかなるためしにやあらんとけいし奉るよしを、此南部十二代にあたる信行(政)のころ都におはし給ひて「春霞秋たつ霧にまかはねはおもひわすれてしかや鳴らん」となかめ給ひたるを、人ことにすしつたへてはてゝは叡聞に達し主上あさからすやめて給ひけん、松風といふ硯を信行(政)の君にたまふ。此松風の硯は、むかし本三位中將重衡受戒し給ひけるとき、法然上人にまゐらせられたるのちはうちにあたりたりけるを、こたひ信行(政)にたうはりてなかく南部のたからとはなりぬ。硯の大きいつきむきはかりにして青き石もてつくり、世にたくひなき器なりけるとなん。又いはくこの廿九代にあたり給ふ重信の君は、あやしう歌にこゝろさしふかく天和三年五月七日五月雨の晴ままち得て大樹公ものになんまうて給ふに、五位下にてしたかひ給ふに不忍池の邊に逍遙し給ふをりしも、雨一とをりふり過てけしきことよかりければ、重信やある此なかめいかゝとありしかは、

飛かねて上野の池の五月雨にみのけもうすき五位のぬれ鷺

四四

公あさからすめて給ふのあまり、その夜四品になり給ふければ、重信の君そか鳥の羽色の衣ぬきかへてたもとゆたかにかへり給ふたるなとありけるをめつらしく見つ

家の風吹もたゆます水くきのあとさへ花と匂ふ言の葉

三十日。けふも雨をやます、あるしの云、冬の末よりむつきのはしめに、此西なる後藤野といふひろ野の雪のうへに狐の館見ゆ。又七戸の三本木平といふには、きさらきの末つかた狐の柵ふるなりと、これなん山市のたちけるを後藤野にはきつねのたてといひさんぼんぎたひにはきつねのさくといふと也。こしの海の海市を狐の森といふたくひ也けり。或地市ともいひけるものか。

かなな月の一日。晴たれば黒澤尻をいづ。あるしも、いでそのあたりまでとて、ふたたび政任のうしの館あと近く送り來りてけるに、かいやる。

冬きぬと身にも時雨の露そめぬわかる、袖をしるへとはしてしはしその毫をこひてあるし。

今朝そしる手をわかつとき日のさむみ

看山

とかいていか、あらんと見せつけるに、

袖にきのふの露氷るなり

といひて別れぬれば、北上川を舟にてさし渡し行に、やなかけて鮭とる人々水の邊にゐならぶかいもさむむけに河風吹ぬ。男岡國見山を見つ、過れば橋村といふあり。

すむ人の衣手寒く立花の實さへ枝さへ霜やおくらん

寺坂を越れば門岡村なり。南部を離れ江刺郡に入て鎮岡神社をたつね、ぬさたいまつらんと鶴脚倉澤といふをへて片岡てふ處に宿かりたるあかつき、

寝られすよ枕に霜や岡の名の片しく袖の冴る冬の夜

四五

太田孝太郎校訂

このひとまきは、卯月のつきたちころ、みちのくの大原の里新山川のあたりにて初櫻
 を見、また鶴がね龜がねかまくら山などを見やり、あるは山吹の柵大さくら檢斷櫻
 を見、中尊寺の田樂祭、またさるがうまた葉室中納言の處女を達谷磨かぬすみしもの
 がたり、土御門泰邦卿のこゝろ葉の詠歌、時鳥の物語、また配志和の式社、安日の社、また
 神星社のゆゑよし、また黒介といふ郷の百歳の老妹か物語、また石手堰の式社にまう
 てしなど、水無月は小にしあれば、廿日まり九日といふ日つゞき石とて座る石神の式
 社にまゐり、阿倍比羅夫蟲磨朝臣黒磨朝臣のものがたりを聞き、かくて河邊に御祓せ
 しまて、けふに書をへたり。こはつたなきものからいまだ行見ぬ人しあらは、その分
 見ん、榊ともならむかと、こゝにしるしおきぬ。

天明八年戊申六月二十九日

菅江眞澄

はしわのわか葉

いにしやよひのころより、花まちて此大原の里に在りて、卯月の朔の日、よべより雨の
いやふりて、已^いひとつはかり晴たり。新^に山川とて、溪河あり、また砂金とるて、ふ濁川な
んとみなとよみ流れて、それにかかわたせる橋どもはみな落流れたれば、道遠くめぐ
りて人行なやみ語らひ、歩^あむきのふまては見つる室根山の残雪^{しのゆき}も、夜の間の雨にけち
はて、今朝は見えす、はや初夏のはつ天^{あま}なから、はつ花櫻のはつかにも色なき梢とも
をねたしとうち見やりて、

花の咲ころも經すしてぬぎかふるたもとは夏の名のみきぬらし

けふは此里に肆^い市^ちたちて、なにくれともものうりありくに、みちもさりあへず群れわた
る人の中におしまじりて、是を見ありくに、並ならぶ家の切垣の内に、紅梅のけふを盛
りと咲たり。

あき人の花に馴れたるよき衣もおはぬものとして今朝はかふらし

二日。近隣チカトナリの家の中垣のあなたに櫻の一本一本生るがきのふよりふりたる雨にうるほひて、下枝のみ咲初たり。

めつらしなけふは卯月のはつさくら暮れにし春の色をこそ見れ
近きあたりに行まくおもへど、けふは日ばしたなればやみぬ。

三日。人にいざなはれて、此里に遠からぬ片山里にいたれば、軒近くや、蒔出る麻苧の畠に、うすはなだ色なる麻衣着たる老の枯尾花を束ね持て、それをひしくとさしありく。そは某ナニの料にかしかせりと問へは、こは麻生に虫のおざる咒なりといふ。

山賤か短き裙の麻衣をばなの波を分る涼しさ

此畑中にさゝやかなる紫櫻の咲たり、そを一枝といへば老の折てくれたり。ある家に入りてしばしとて休らひ、湯づけくひ肘を曲マば時鳥鳴ぬ。

めつらしな折えてうれし初櫻聞えてうれしやまほとゝきす

四日。童あまた此地にいふ紙カミ鷲シウと方言ものを、この紙老子の絲曳あひひこしらふ。時ならぬ風巾カゼノフキやおもへば、雄鹿の島などは七月十三日を始とし、秋田の久保田は極ツギ月の末を初めとし、三河國の吉田は正月の末より始め、五月の五日を止ト禁ヒとし、五月五

日を紙カミ鷲シウ節句といふ。うるまの國は十月カシナツキをはとといふよし琉球誌に見えたり。河岸に大櫻の咲たる根に、此天幡アメノハタてふものゝ糸を引むすびすまひなどしてうち戯れあそぶ。また櫻に燕の囀るもいまたに春の心地す、人々花にうかれ酔ふしぬ。

うつばりのふるすわすれてつはくらの夏も岩根の花に鳴なり

ついたち頃の月あかしくとさし出て、花を照す影、水の面にうつるなど、雁の鳴たりふりあふぎ見れば、ひとつふたつ、月に横たふさま、風情ことなり。

歸る雁雲の通路分るとも霞まぬ月の色は迷はし

かくて夕月にみちもたどらで大原に來る。

五日。芳賀慶明長左衛門とが家に在れば、朝とくけふ此花折て來しとて、朝露に身をそぼちて、物ならふ童の手毎のつとにせり。あるじ此山づとをうちまもらひをりけるが筆をとりて、

〇 たが爲に咲のこりけむ櫻花露おくふかき山に隠れて
と見つゝおのれも、

浅香山にあさからしこゝろさし色香もふかし花の家つと

こは花の眞盛りにあらめいざ花見ありかむ、樗子用意せよ、ふくべに酒つめよ、火繩わするなと云ひ捨て家を出て、鶴が嶺、龜が峰、鎌倉山などいふ高根くを遠方にかぞへて、行々て八幡の神社あり。ぬさとり奉れば花あり、またなから咲たる櫻もたちならびたり。

花の枝に卯月のいみをさしそへてまた春風の匂ふ神垣
慶明。

神垣に咲そふ花をみしめ繩かけて久しく神もみそなへ

こゝに行きかしこにうつりありきて、永き日もくらゝに、歸り來つれば、小雨ふり出ぬ。

六日。よむべの雨もなごりなう晴て、花かあらぬか、山のはごとにかゝる白雲、いとふかし。松井といふ處におもしろき飛泉あり、けふはその瀧見なむ、いざたまへと、あるじ芳賀慶明のいへれば、やをらこゝを出たち、うちかたらひゆけば、山吹が柵といふあり。そが下つかたに、杉の一むら群り生ひたてる地あり。そこなむ國守吉村公誕生給ひたる御館のあとなるよしをいへり。其君そこにて、「よしや咲けとても散り行

花ならば嵐のとかになしはてゝ見ん」といふ秀歌などもこゝにおはしましての事と
なもいへる、此歌はしるしらぬ男女、野邊に草刈る童までも、花見ればすんじありきぬ。
龜峰山長泉寺といふ寺あり。山門の左右の柱に嶺上松、遑萬年、操前、溪水、長千古流こ
は梅嶺禪師とて、あが父母の國三河の寶飯郡新室といふ郷より産て、此寺の住持たり。
山門の聯も梅嶺の筆蹟、また百十五代中御門院の御世、享保元年丁酉の秋庭の菊を見
て「あさなく、おく露霜のきえやらてませに色そふ庭のしらく」とありしかば、此歌
めてたしとて、當今の御日記にとめられたるよし、都人のもはら物語にせしよし、その
ころ在りし翁の口語とて残りぬ。「かめの峰尾上も長き泉寺うき世に引ぬ清きなか
れ江」とて、いめば、櫻の枝ごとに、班鳩のひじりこきと鳴也。また紅衣着と方言と
あり、また信濃の諏訪束間のあたりにては、此嶋の簗笠着と囀ば、かならず雨ふるとい
ふ、ひじりこきとはいつこにも鳴ぬ。「いかるかよ豆うましとはたれもさそひしりこ
きとは何を鳴らん」と著聞集にも見へたり。

花鳥の色香にあかて春よりもおもひ夏野の道そたのしき

かの瀧のもとに來たる水は岩にせかれて三ツに分れて落瀧つ、巖のはさまにいと古

りたる松たてり、月出が比良といふ山の麓に寺あり、岩松山經藏寺といふ。此瀧のもとにありて、

岩かねの松のみとりも花のいろもちらてそかゝるきしのたきなみ

慶明。

峰の松松井の水にうつろひてなみもみとりに落る瀧つせ

芳賀氏此月出山をもよみねといへれば、いらへて眞澄。

あきたらすこゝに暮なは山陰を月出やまちて又花を見む

夕ぐれて歸りたり。

七日。きのふまではひむがしの山にし山八瀬大原の花の盛にこゝろひかれ、また江刺膽澤の山々に咲出る花のしら雲も心にかゝりて、此ころ花の情の淺からざりし芳賀慶明のやどを出たつ。あるじ花ちらばとく歸り來てましなどありて、

夏衣うらなく語る言の葉もいひこそこのせ今朝の別れに

返し。

いひ出ん言葉もさらに夏衣かさねてこゝにはむとおもへと

また清雄といふ人あり。此ぬしの句に「今のやうにふたゝび風の薫れとや」今しばしとて近き花のもとまで送りける。人々と別るとて、

みちのへの櫻よ花のこの葉よ花に別るゝ旅そものうき

かくて行々田の畔の路をたどる馬の毛をしのゝ長串にさしてやきくろめ、又わらを束ね切り、やいて是も串につらぬきて、田のあぜことにさしたり。そは鹿おどしといふ古歌に「あすよりは(マ)やきしめ小山田のわかわさのねを鹿もこそはめ是は焼標にこそあなれ、櫻鳥といふがいたく花に群れて遊ぶを、

むら鳥の羽風にちらん花の枝もやきしめはえよ小田のますら男

葉山権現とまをす神ます其山の麓に櫻の多かるを見つゝ行とて、

句はすは花ともえこそ白雲の夏のはやまにかゝるとや見む

澁民といふ處を経て、猿澤といふ村に來れば、あるふせるがことき軒近う花のいと、とおもしろう咲たり。こを見まくほりしてあなこうしたり、道遠き國の旅人なり、しばしは休らはせよといへば、よき事休らひてといへればいとうれしく、

つかれしをかことになしてとひそよるしらぬあるしの花を見んとて

此邑を出れば、路のかたはらに觀福寺といふさゝやかなの寺あり。其寺の傍に高き岩ども群れ立る處あり、それに虹のごとき橋を掛て觀音を安置る、其堂の前に至れば、こゝらの岩の面々に、阿羅漢尊者また佛菩薩の各號を彫しまた古詩もゑりたり。また西行法師などむかし今の世人をもゑりたり。いかなるよしにかとへば、唯うち戯れてせし事といへれども、あやしきもの也。莓むして見えねと、苔をはだくれば、苔の下にあらゆる人の面像出るといへり、昔よりせし事と見えたり。半行坂といふあり、此地は榛生の莊にして、菘生坂なるを、人みな訛りてもはら、秦生坂とはいふと。此坂の邊に、骨石またの名を絲卷石とて、筆の管の太にて、二三寸あるは四五寸ばかりにて、そのさま糸など引纏ひたる紡車の繆管のごとし。それを掘得れと全はまれ也、もとも奇品石といへり。此あたりは、東山田河津とて、紙漉産みなその業ある家ども也。誹諧祖はせをのおくの細道などいへる日記は、此東山より漉つる紙を四ツ折としてかゝれけるものにして、今はこれを刻冊としつれど、そをいにしへさまに作れり。翁もみちのく紙といふ名にめで、かゝれたるものならむかし。見渡す峰の雲籠の雲はみな櫻なり、村々の垣根は山吹の色に埋れ、夕日かげろふなど、又たぐひなき

おもしろさ、また横澤といふ處にいと大なる窟あり、それを籠山といへり、内間廣て石鐘乳といふものところゝに掛たり。遠く桃の咲残りたるなど見ぬもろこしの桃源の畫みしにひとし。こは春も見し處也、此夕爲信の家に泊る。

八日。つとめて里の童を道あないとして、きのふの路をいさゝか分て、大金といふ處の岨に、櫻の二三本たてるが、朝風に吹さそふをうち見やり、イめは、童の小河にのぞみても、のうかゝふさま、何ならんとおもへば、石斑魚の鳴なり。水におりたちころゝといふ聲をしるべにすくひ上たり。此石ふしも秋に鳴くものならずやといへば、をりとして時もさためず、鳴ものなりと方言り。なほ此花を見やりて、

汝も又をしみやすらむ櫻ちる山した水にかしか鳴なり

童をさき立て拈花山正法禪寺にまうづ。此寺の署扁は光明皇后の眞翰也。吾國の鳳來寺の額にひとし。けふは釋迦佛誕生し日とて、れいの花葺るさゝやかなの堂の内、あめつちをさして香水盤の中にたてり、大衆居ならびて一日經ならんかまたなきたまの名にや、いと細き率堵婆に書れは、この灌佛會にまゐりたるあまたの人とら、手毎にうけさゝげて歸る。いにし此寺は法相三論宗なとにや、いとゝふるき精舎也、

今曹洞にうつりて、南朝の頃開山禪師の高弟無等良雄和尚は方里小路藤房の卿なるよし、其世は世にひめて語りしといへり。此寺の庭に源頼朝公實種し給ひし榿とてあり、また大なる梅樹あり、さるよしをもて大梅捻花山ともいへり。此寺の邊に不灰木石あり、石麩あり、また黒蠟石といふもの多し。黒蠟石あるをもて此あたりを黒石莊とよべり。また山内といふ處に出たり、妙見山黒石寺とて修驗寺あり、もと太上神仙を齊りし寺にて、大同元年二月斐陀の番匠が集りて一夜の間に建し堂とていとふりし堂あり。とみなる事とて、板など敷もわたさず、残はぬ處あり。正月八日の神祭は、祇園の削殘尾張の天道の社の祭の如、夕くるゝより小夜中まで、誰れとなう互に罵詈、根もなきあた事に枝葉をつけてまがくしう、匄てうち笑ひ、堂をうち叩き火をたきたつれば、さばかり積りし大雪も、きさらぎやよひのごとく、みなけちはつる音せりといふ。雞の初こゑたつころ、其長三四尺斗の級拷の二重布の長袋の内に、蘇民將來の神符を三四寸斗の木に書て、そを千札まりも入て、袋には蠟を流し油をぬりて、武神仙の御前に備へ、山臥梭尾螺經よみのり加持して、その長袋を群集の中へ投やれば、左右に方分て素裸に出たち、犢鼻褌もつけず、その袋をわが方へ取らむ、此方に奪

ひてむと、上を下へ捻あひひこしらふ。かゝるあらそひに、むかし犢鼻褌の前垂を袋の端に持からみて、力まかせに捻合ひ曳に引ほとに、陰囊破れて死たる人あれば、犢鼻褌てふものはゆめく身にまとはずとなむ。此蘇民將來の神符を掌得たる組には、その年田畑の能く豊登といへり。夜しらくとなれば、袋を搦破また取持て、雪踏みしたきはせ出て、小河の水ふみ破り飛入て、淵に身を潜むとするを曳止めなど、世にめづらしきあらがひ祭也。此妙見山黒石寺には、慈覺圓仁大師の作の薬師佛佛形をひめおける寺なり。野道しばしへて黒石郷に出たり。路の傍に四阿めける小屋建て、その軒に貨錢二貫を長緝につらぬいて掛たるに、童老人などの居てひるさへいみじう守りぬ。此錢あやまりて盗れたらん時は、母貨に子あまた添へて、これをもてその禍を贖ふつくなひ貨也といへり。あないせし童は、此里なればものとらせて別たり。伊澤郡に渡るに、加美川の舟とくも出ず暮てのりぬ。月おもしろくつきたり、六日入村にきて、相智鈴木常雄の家に入りて

旅衣月と花にかたしきて、楽しき宿に又こよひねむ

夜もすがらあるじとともに語りぬ。

八日。けふの初午祭見に、中尊寺にいなんと六日入をたちて前澤驛^{ササキ}に出て、靈桃寺に訪ひて寺の上人をいざなひ、漆寺の前を過るに朽たる櫻の葉花^{ハナ}咲たるを、

枯れし枝も花の恵をうるし寺となふ御法のしるしならまし

うまやのはしなる大櫻見てむとていたる。大櫻の社あり、不動尊を祭るいと大なる一重の櫻あり。此さくら、人たけ立^{タケ}ところにてはかれば、三丈四五尺めぐるといふ。信濃、國市田の大櫻には勝りぬべし、こは秀衡時代花也といへり。此木あるをもて此村を大櫻とはいふ也。また遠田郡にも大櫻あるてふ、そはいかならむ。

雪をつみ雲をあつめてひともにかゝる櫻の花をこそ見れ

衣川村に來る、世に衣といふ處多し。近江の志賀の郡も衣河あり、その國々にも聞へたり、此處に檢斷櫻とて名ある櫻あり。秀衡の世に檢斷の役するもの置れたる處也。またいにしへ安倍、貞任の館ありし跡にて、義家公「ころものたてはほころひにけり」と弓に箭をはきむかひ給へば、としを経て糸の亂れの古しさに「と貞任矢つぎばやに返しまをしたりしなど語らひ、やをら其處にいたれば、

衣川みきはの櫻きて見ればたもにかゝる花の白浪

此衣川も今はむかしと大に流のさまかはりたりといふ。高館落城^{タカノ}のとき、武藏坊辨慶、衣川を渡らむとてわたりしが、をりしも洪水^{フデ}てみなぎる波を分^ワわつらひ、うちものを杖につき、中の瀬といふ處にしばし、イむほとに、きしべよりは矢ふすま作りて射かくる箭をひし、と身に射たてられて、中瀬にふし流れたり。きしに立たるうまいくさども是を見て、こと武者は流にしたがふ、いかに辨慶一人水上に流れ行事見よ見よふしぎさよと、寄手の兵等^{ヘイ}あきれたりといへり。そはいにしへは衣川の末北上川^ノ古名^コ加^カ美^ミ川^カ也^也の上の方へ落たり。今は加美川の下に落ぬ、その洪水のとき、衣川も上川もひとつになりて大海のごとなれど、辨慶はつねに見なれし中の瀬にのぼりつれど、多くの軍に射立られて、衣川水筋にしたがひて衣川の下へ流れたるを、今の世かけて辨慶は川上に流しとのみいひ傳へ、またあぶり串、さしつかね釣りおく、巻藁^{マキ}てふものを、出羽陸奥の方言^フに辨慶といふも、武藏坊が箭を簀のごとくおびたるさまを、まきわらに申さしたる姿に似たるよりいふと、なん里の翁の語りぬ。かくて中尊寺にいたれば、あるとある堂の戸みなおしひらきて、白山姫の神社の拜殿はかねてかゝる料に間廣げに作りなしたるに、白き幌^カをたれ白き帽額^カ引わたしたり。おひとつうまといひて

白き神馬獅子愛しとてほうたん手ことにもたる童子、なにくれとねりわたりはつれば、白山神の御前に幌うちまうけたる舞臺にのぼりて、そうぞきたつ田樂開口祝詞をはれば、若女の舞老女の舞などいと古風めかしきさま也。やをら衆徒集りて、さるがうはじまりぬ法師の頭に宿髪てふものして髪髻墨衣の袖をぬぎかけ、あるはまくりでにつゝみうち、笛吹囃しぬ。この田樂をとめ舞うば舞などにことかはりて今めかしけれど、舞へる装束は國の守より寄附給ふものとしてめたく奇麗をつくしたり。今朝より風たちしが、いよゝ吹つので、あまた立ならび、茂りあひたる大杉のうれもゆらく吹れ枝葉の落散れば、人みなふりあふぎ天のみ見つゝ、頭にものおほひもの見る天もなく、法師の附髪も吹やられ、かなつる扇も風しぶかれて、こゝろのまにゝさしもやられず、いざ歸らなむと立騒ぐ上に、大なる杉の枯杉の落て、頭うちぬかより血の流たりなどなかゝの騒ぎ也。經堂光堂の方へ逃ちる人もあり、また老嫗杉とていとゝ大なる空樹あり。此木としふりて香馥はなはだしければ、國守めして「みちのゝと銘給ひしといふ。その木も今は吹折れ、今はたふれなんなど人みなをしみ語らふ。此中尊寺に薄墨櫻とていとよき花のありしか枯て今はなし、そを辨慶さく

らといふ。武藏坊やうゑたりし花にや、中尊寺を出て、義經堂にのぼりて人々ぬかづく。源九郎判官の由來はこと處にもしるし、また清悅物語とはいさゝかことなれり。また此君の事をつばらかに記したる義經蝦夷軍談といふいくさの書には、泉三郎忠衡また金剛別當秀綱龜井片岡をはじめ、御家人ひとりも残りなく、みな松前に渡り、秋田、治郎尙勝兵糧を運送、此人々大に戦ひ蝦夷治りて上國といふ處にて、御臺所若君ひとゝころ誕生ありて嶋磨君と申事など見えたり。人々を別れて此平泉の相知りたる民家に泊る。

十日。けふもさるがう舞あり。こよひまた一夜などあれど風なきたれば、此あたりの花のちり残るも見まほしく、また春のころ見し達谷の窟櫻原といふ處も、名さへおもしろければ、ふたゝびとて平泉を出たつ。むかし悪路王、ひそかに都登り、葉室中納言某卿の御娘、ひとゝころおはしけるを盗とりて、此窟に隠れ住けり。都人あまた尋ね來つれど、いとせ花の盛に飲に吞て酔ふしたるに、姫君櫻原を逃出て、人にいざなはれ都に歸り給ひしよしを云ひ傳ふ。また出羽國雄勝郡にも阿具路王が窟あり、また此達谷か窟といふは、達谷磨が栖家し窟ならんかし。五串に來る、此村名は五十櫛の

こゝろもこもり秋申のよしもあらんか美麗てふ名にして山水清く飛泉のさまたぐひなう儼然しければしかいへるにや。嚴美神ませり此神の神社とてはあらねと瑞玉山の奥に舊き宮地の跡残り今はそのあたりを水山邑の山王が窟といふ。此奥に平泉野といふ地あり大日山中尊寺の址高林山法福寺の蹟栗駒山法範寺の跡尼寺の址圓位法師の庵の址あり骨寺の跡あり此あたりの寺々をむかし七十四代鳥羽院の御宇天永永久のとしならんか此平泉野より今の關山にうつし給ひしかばそこも平泉の里となれり。今の平泉に逆柴山といふ名あり是も舊平泉に在る山の名也。骨寺の事尼寺の事は選集に見えたりそはこと處につばらかに記せり。五串の瀧とて、今みなめでくつがへる飛泉にのぞめば玉の瀧またの名を小松が瀧ともいふあり。京田瀧あたり瀧大瀧童子瀧はかり瀧魚屋瀧麻一持の瀧など瀧は平飛泉ながらこゝら立するとき岩にせかれてはさまゝにしらねりかけたるがごとく白淡涌かへり日影うつろひて紫の波うち寄る岸には桃山吹柳さくらの枝さし交りて世にたとへつべうかたなし。なほあきたらず見イみて、

落瀧の水いつくしく畫ともいろとる筆のえやは及はむ

ふたゝびこゝにいたりて奥ふかくねもころにたつね見まくこたひは田面の路を來にしめ引はえたり。

水口に立てそ祈る時は來ぬ五串の小田にもゆるなはしろ

山目の驛に出て大槻清雄の家を訪へばしばらくありて清古筆をとりて、

珍しなけふに待えし時鳥聞もはつねのものかたりして返し。

此宿に聞もめつらしほとゝきすけふを初音の人のことの葉

小夜すから語らひふしぬ。

十一日。大槻のやとよりはいとゝ近き配志和神社にまうづ。杜の梢は花ちり若葉さし又た咲やらぬかた岨の木々もめづらし。鳥居の額は土御門泰邦卿の眞蹟給ひしといふ手風ことにめてたし。そもゝ此神社は齋奉りしよしを云ひ傳ふ配志和の社の内は皇孫彦火瓊々杵尊左方は木花開耶姫右方は高皇産靈尊也。また神明の神社をはしめ八幡社鎌足社安日社神星社土守社かゝるみやしろゝにぬさとりくまゝ見ありくに菅香梅とてよしある梅も青さしてこゝにも老婆杉とて千年ふ

りけむ枝のなからに、山櫻の寄生ありて花いたく咲たり。なほ木のもとにふりあふきて

いつまでもちらてや見なむ杉か枝の花もときはの色にならば、

此處に昔神の神子ひと、(こ)ろさすらへ給ひしよしを云ひ傳ふ。むかしは梅のいとく多かる地にて、亂梅山といひ蘭梅山と書ひ、また梅か嶺といひ、梅か森といふ。

泰邦卿の歌に「みちのくの梅もり山の神風も吹つたへこしわか心葉に」。此御神は文徳

天皇實錄四卷仁壽二年八月乙未次辛未陸奥伊豆佐咩神宮城郡式伊豆登奈考志神氣

郡式登奈孝志神ませり志賀理和氣神斯波郡南郡並加正五位下衣多手神氣仙郡式衣多石神桃生

式石神ませり理訓許段神氣仙郡式理訓許配志和神磐井郡式配志舞草神磐井郡式舞並授從

五位云々と見えたり、尊へき御神也。おのれ是を考おもふに、鎌足社は、いかなるよし

ありてか齋ひ奉らむ、安日社は、神日本磐余彦天皇の官軍をそむき奉りし長腿彦の兄

なる安日其御代に津輕の十三の湊に流さる。其後安倍頼時出たり貞任衣が柵にす

めり此梅森山靈地にして、おのが館もいと近ければ、上祖の安日を神と齋奉りけむも

のか、神星社はしらず。また貞任の男高星、二歳のとき、乳母がふところに抱て亂を避

て津刈の藤崎に隠れてそこにすめり。高星子あり、月星といふ。其塚ども河岸にありしかば、崩うせて水底に棺の落たるが、井桁の如に見ゆれば、そこを井戸淵といひしが、今は名のみ也。また河越某なる畠の字に、高星殿月星殿と近きまで云ひしと云へり。安倍の高星の舊蹟は、藤崎に残れり。土守社はゆゑよしあらむ、いとふるめける神號也。また津輕の妙見の社の枝神五十島の社あり、蝦夷をまつるといふ。是は齋明紀に在る問兎の蝦夷膽鹿島菟穂名といふ、其功あるをもて葬し塚に祠や建けむ伊賀志麻といふ夷名今も有なり。いかしまとは物の餘る事にて、十有某といふ詞也。蝦夷人名を付るに、其童又女童の癖を見て付れば、世にいふ醜名多し。又問菟といへるところ、同津刈の比良内夷語のヒルナキの藻浦といふ處の畠名になりて、いまそこを太夫といひ、その近きに蛇口と云ふ蝦夷住處といふ。かゝる事をおもへば恐きことから神の勳位のおましまするがごと、忠誠ある人とは神とむかしは齋たらむかし。いざ歸らなむとて出たつに、人あまた居ならひてうたうたひ酒のむを見て夫木集もろ人の岩井の里に圓居してともに千と世をふへきなりけり」と清古すんじつ、語らひ連て大槻のもとにつきたり。

十二日。桃生郡鹿股の有隣翁とて尋ねわびて、けふも又あはでむなしく歸るなと書て、

尋ねこしかひもなきさにすむ鶴のこと浦遠くこゑを聞ゆるとあるを見て、

たちあそふ方こそしらね友つるのうら珍らしきこゑのみはして

けふもこゝに語り暮て、雨はれ庭の面におそ櫻の咲たるに、月のあか／＼とさし出て軒にかけたる無窮の額の文字さへしるく庭にイみよみときて、

楽しさはいつをかきりもなからに月あり花もにほふこのやと

十三日。膽澤郡にいまた咲のこる花あらむいさ見にいなんと大槻清古とともに磐井郡山目を出て、伊澤郡衣川の橋を渡る。衣の關は卯木といふ處にいにしへ跡ありといふを聞て

時も今咲や卯の木のほと／＼きす衣か關をたち出てなけ

夕暮近く前澤をへて、六日入になりて、鈴木常雄の家に訪ふ。いにしへ此あたりはいくさのちまたにて、續紀卅三卷天宗高紹天皇光仁の帝寶龜五年云々壬戌陸奥國言海

道蝦夷忽發徒衆焚橋塞道既絶往來侵桃生城敗其西郭鎮守府之勢不能支國司量事興軍討之云々など見えまた七年二月云々庚辰發陸奥軍三千人伐膽澤賊云々など見えたる地也。むかしは夷賊のみ多く住たりけむ、此鈴木の家の中にいにしへより長者神と祭る社、いかなるよしにて祭り來るともまた長者などいふ家ありし地とも思はれぬなどいへり。是を考ふにいにしへは姓に長者あり、また日本にて男子七人もたるを長者といふと盛衰記にもいへり。また今いふ驛の本陣といふを長者といひし事も見えたり。軍書伊勢物語といふものに、在原業平など將軍にて、膽澤郡に長蛇の備へをたてられし事見え、其いくさに勝利あるをもて神といはひ、そをいましかけて長者神といへるにやなど語らひ更たり。

十四日。あるじ常雄、大槻清古などいさなひ連て水澤にいたり、しほがまの花見てむとて出たつ。やゝその處になれば、みやとこむいと／＼ひろく、いつの代ならむ鹽竈の御神をうつし齋ひて四ツの釜さへすゑまつる。花の木あまたうゑにうゑて、けふを盛りと咲たるを、人々うちながめ歌よみ詩つくるをりしも、雨いたくふりく。ぬるとも花のかけにやどらむなどすんじつ、見ありければ、雨はなほいやふりにふれば、ほ

七〇
みなう人みな歸りいぬれば我ひとり大林寺に入りて此寺の曇華上人を訪ひ、去年よりつもるなにくれと語り暮たり。

十五日。雨も餘波なう晴たり、けふもきのふのみやしろの花見んとて、あるじの上人をはしめ、此近きわたりの人々とともに、かの花のもとにいたる。きのふに引かへて、けふはけしきばかりの風もなく、その楽しさいはむかたなし。神ぬしがひろひさしに、人々圓居して歌よみて神に手酬まゐらせんとて、社頭花といふことをよめる。

うすくこき色はへたてと神垣に匂ふはおなし花の眞盛り 寛 截

あすも又手向やせまし神かきに掛てそ匂ふ花のしらゆふ 信 包

玉かきの光もそひて咲花は神の恵のたくひならまし 親 賢

ちはやふる神も恵の色そひて御垣の花やさき匂ふらむ 僧曇華

芳野山こゝにうつしてさくら花あかすや神もみそなはすらむ氏 善
おのれも人々とともによみて奉る。

神垣の花の盛りをみしめ、繩なかくもかなとかけていのらむ

たくれ近くこゝを出て、大林寺に人々うちつとひかたらふほとに、けふの花見露はか

りもしらてなどあり。

とひ寄らむこと葉もなみのへたてなく道しるべせよわかのうら人と常珍といふ人のよめる返し。

浅からすなれこしわかの浦人にこたへも波のよるもはつかし

小夜うち更るまでよめる人々の歌とも多かれどこゝに記す。

十六日。此寺の脊面の小田のあと口といふ處に、焼米をまきありく男あり。何の料にしかするにやととへば、こは稻田に蝗のゐざる呪也といへり。かくてくるれば、れいの人とら集ひ來けり。

十七日。雨ふれば花あるかきりいつまでもこゝにありてなど、曇華上人なさけしう聞え給ふ。

よしふらば雨にかさねん旅衣花にぬる夜の敷そすくなき

十八日。ある翁のいへらく近き山里に婚姻あり。片田舎にはことなる珍らしき事のみ多し。見せ申さむいざたまへといへば、此翁にいざなはれて水澤を出て、その山里に道はるゝといたりて、婦の隣の窓の内に在り、これを見つゝしをれば、七戸鏤鐵

水などをはりて、其齒黒母も來りて外に筵しき、若き女あまた來集りて、此未通女が顔に絲剪といふ事をせり。そは麻苧の線糸を左右の指にて此糸をちどりかけにとりて曳磨に顔の生毛剃りたる如にみな落ぬ、剃刀てふものは用ひざるならはし也。かくて髮結はて紅彩白粉などによそひたてば、翁さしのぞきて、はや彩色しかといふ。こは此あたりにて、物彩色事をにごむと云へば、しか戲て翁がいへる也。其婦人に縁綱とて能狂言舞の婦人の鬘布の如に額よりあて、後さまにむすび下ぬ。そは白布あり、紅布あり、麻布あり、絹布あり、福者などは此縁綱ことさらに長し、遠きは馬近きは歩行して婿の家近けば先あら男新婦を負ふ也。その負ふに肩荷布またいふ守布とて、八尺斗の布をもて負ひ、また守木とて二尺あまりの丸木勝軍木にて作る老て死たる死骨を此木を箸として拾ふを二本、紙二重に包て水引もて陰結陽結といふ事して、此守木に婦人の腰掛て負ひもていたれば、鞞の門に菅筵重敷ぬ。鞞の筵を上にに婦の筵を下に重ねべきを、若雄等婦の筵を上に布てむとあらそふ。婿の筵の下になれば、鞞の方のいみじき恥なれば、互に小刀手毎に持て大あらがひせり。老たる人出て、是を貰ひといふこととして、左右しづまれり。二ツ結のあぶら少竹筒あるは、守木のうけとりわたしに、天地和合の

掌入り手出、手などあり。鞞の袴もて出て、嫁を重ね筵におろして水を飲め、かの袴を婦人に着ぬ。そは前髪積を後へ後腰を前にあて、鞞の家の横座踏ば袴は取ぬ。此夜はゆめく蠟燭を用ひず、みなあぶら火巨松也。世に八寸臺といふものを九寸といひ、平器てふものも角といひ、その外古實風多し。かくて夜ふかく馬にて水澤に歸りつきたり。かねて一夜をやどりなどねもごる聞えたりしかば、祥尙の家を訪へば、あるじまちわびつるなどかたらひ更て、祥尙、

いひ出む言葉は露も夏の夜の庵にやとれる月の涼しさとありける返し。

ことの葉のつゆの光もなほはえて心涼しき月の小夜中

十九日。あるじ祥尙のいへらく、此あたりの人々をこゝにつとはせてくるゝまで樂しみあそばむ、こよひもこゝにありてなどいへるほどもなう、小幡、爲香のとひきて、

數ならぬ身も橘にとひよればえならず袖の匂ひこそすれ
とすればいらへて、

いつまでも人をおもはむ立花のあかぬにほひを袖にうつして

またあな久しとて邇高筆をとりて、

まちくと遠き雲井の時鳥人つてならてけふこそはきけ
とある返し。

雲井路をけふたつねすはほととぎすかゝる初音も餘所にきかまし
雨のいやふるに、白玉椿のおもしろく咲たるを見て、あるし祥尙をはしめ邇高爲香幼松
などよめる詞ありしも(も)らしつ。

二十日。朝とく大林寺とふらへば、曇華上人、庭の山吹眞盛り也、きのふの雨にことさ
ら色はえたりなどあれば、いざとてはし居すれば、から鶉とかいふさゝやかなひわさ
はに來けり。

雨はれて旭影も匂ふ山吹の露ふみこほすひわの群鳥

廿一日。あしたより雨ふる。

廿三日。けふこゝを立出て、此里の人々をわかる。曇華上人もはやくほけくし
う老たり、ふたゝひのたいめこそかたからめとて外に送り出て、

歸り行人や待らむふる里の花橋の咲匂ふころ

とあれば返し。

言の葉のにほひはかりは明日も見むあかて別る軒のたち花
氏喜の翁。

こゑのみはこゝにしのはむほととぎす遠き雲路をよし歸るとも
返し。

あすよりはつはさしほれて時鳥雲路はるかにうきねなかまし
信包。

たちかへる道は雲井となりぬともこゑなへたてそ山時鳥
返し。

鳴かはすこゑをかたみに別れては人をしのふのやまほととぎす
かく人々を別て、花見し鹽竈の神社にまうづ、いと多かる花どもなから過るまでちり
たり。

ほふりらかいはふ社にちる花もこゝろありてや朝きよみせず

社司佐々木繁智の家を訪ひ語らひ別てこゝをめてにとりて、野くれ山くれ散り残る

花見がてら徳岡の村来りぬ。村上氏のもとをとひて、去年より雪の下にまちわびし櫻の、今散行などほみなう見やりイめば、またちるも一ながめおもしろうなど人のいへり。

去年よりも雪にめなれしさくら花いまはた庭にふりつもりぬる
しかしてあるじのはらから良道とともにかたらひ暮たり。こゝに三四日あるに雨風はげし。

廿六日。内場に磨白四ツ五ツすゑて、男女曳廻しこゑをあけて唄ふを聞けば、河を隔て戀夫を持てば舟よ棹よが氣にかゝるとおし返しうち返しほうしとれり。かくてその意を、

舟なくて渡る瀬もかなおもひ川こゝろにかゝる波のよるひる
良道の云庭の盛り頃はかならす訪ひ来れとありしかは、その頃詠し誦とて書刺にさしたるをとりてみせける。

こゝろあらは盛をまちてくれなみの梅も片枝は花をのこして
とありしを見て返し。

梅か枝は青葉なからも色ふかき人の心の花とこそ見れ。

廿七日。よんべより雨いたくふりぬ。簑笠着たる人こはづくり、やをらふみもて来るを見れば、此春平泉の毛越寺の衆徒皇都に登りけるに、あが父母の國吉田のうまやなる殖田義方のもとへ文通あつらへしかば、其書の返事来るをくり返しまき返し見て、

うれしさに袖こそぬらせ事なしとむすひて送る露の玉つさ

あるし良知良道はらからの歌あり。またこと人の歌もあれどこゝにもらしぬ。

廿九日。木々のいとふかく生ひ茂りたる中に、時鳥の鳴を童の集りふりあふぎて、町さへ往たけとかと此鳥の鳴く眞似する諺あるなり。町といへるは肆市立に行事をいへり、また時鳥を五月鳥とも五月鳥子ともまた田うゑ鳥ともいふ處あり。また小鍋焼といふ郷もあり。此こなべやきといへる事は、むかし男子ふたところもたるひんぐうの君あり、太郎は亡妻の兄にて、次郎は後妻の弟也。此弟しばし兄の外に出て遊び居るをうかゝひ、なにくれとあなぐり出て、小鍋煮てふこととして物煮を、兄のゆくりなう外より来て、こは某煮かとさしのぞけば、兄に見せじとかなたこなたともて

わたり、また兄の來たらばいかゞせんと、もの蔭にかくろひて、唯一人は喰ひにくひて、あな腹くるしとふしまろび、脊中裂てくるひ死たり。其弟が靈魂霍公と化てしかあつちやとてた、こちやとてた、ぼつとさけたと叫び鳴也。そは其よしなりといへり。和訓栞に、出羽にて尾搖くしやうと見え、東海道にては、本尊懸たかと鳴といひ、また杜鵑の字もさまざま多く、また杳作りの翁といひ、名もさまざま、またくさくさなる、はかなき童物語多し。一とせの夏、尾張の國名古屋にて、五ツ六ツ斗なる男子をいざなひものにまゐりけるとて、人あまたうち群れ行くに、霍公の頻りに鳴くを此稚子の聞てうち笑ふを、人々若子はいかに聞しか某と鳴ぞと問へば、此童父へ母△といらふを聞て居ならぶ人みなをとがひをはなちてはと笑ひし事あり。其子麻疹やみて死れり。その親どもは時鳥はうべも黄泉の鳥かかの國よりははやこくと父母を呼かど、初音より血の涙を流して霍公の鳴けばあなかなしと耳をふたぎし事ありしを思出たり。

三十日。をちかへり時鳥の鳴ば、

ほととぎすこゑなをしみそ庭に咲く花の卯月も明日はちりなむ

五月朔日。あすは此家を出た、む去年より馴むつびたる人々にふたゝびのたいめいかゝなどおもふ曉、郭公の鳴けば、

時鳥涙なそへそ見る夢もこよひはかりの宿のまくらに

ほととなうしらみて、

二日になりぬ。去年よりなにくれとたのもしかりつる人々の情、さすかにけふの別れにむねうちふたかり、涙おつるを心つよくも已ひとつ斗にあゆびしてたちつれば、良知の弟良道の云。

別れては道のちさとをへたつともかきつめてとへ壺の石書

と聞えたる返し。

書かはし壺のいしふみおとつれん行みちのくはよしへたつとも

とて外に出れば、家にあるかきり門の外まで見送りせり。

おもひやれ去年よりなれて思事いはてしのぶの袖の涙を

良道聞て、

言の葉を今は記念とみちのくのしのぶの山とともに露けき

しかして人々をわかれて、村上良知は前澤の驛に在りければ、そなたにて逢むと、良知の子いまだ總角なるをみちあないとして、去年見し水文字の龍流のさま草書の水をといふ字の如く也。を見かくて前澤の郷にやゝ出たり。良知のやとれるもとに至れば、

あひなれし契りわするないつこにもおなし心の友はありとも
と、良知のいへる返し。

別るともなにかわすれん友かきのへたてぬなかのふかきころは

此夜は靈桃寺に泊る。此寺に三四日はあれなど長老聞え給ふに語らひ暮て。

五日。けふ軒に蓬菖蒲ニホキサウフふける事こと國にかはらず。陸奥は實方中將の故事ありて、五月五日はかならずかつみをふかせ、あやめはゆめくふかさるよし云ひ傳へ、また宗祇旅日記に藤原義孝が歌に「あやめ草ひく手もたゆく長き根のいかてあさかの沼に生ひけむ」とよめるをもて其處の者に尋ねしに、中將の君くだりて何のあやめもしらぬしづか軒端には、いかで都におなじかるべきとて、かつみをふかせられたるよりの事也といへり。また圓位上人熊野へまゐりける道の宿にかつみをふきけるを見「かつみふく熊野まうてのやとりをはこもくろめとそいふべかりけり著聞集に見

えたり。さりければ淺香の沼ならでも生ふる草にて、紀國にも草けるならはしにこそあらめ。なにくれかにくれといにしへ今はことなれと思ふまに。

かつみふくやとこそなけれあやめ草長き根さしの御代をためしに

軒に幡立るは男子ある家にはいづにてももはらすべき例なるを、此里にては女子持る家にて、またさらに小兒門にても、とみうどの門はことさらにものしてそのけぢめなきは出羽路もひとし。こよひさうぶうちになやゝ似たり、安平廣長がりとふらへば、こよひはこなたにあれとて、

時鳥聲さへ匂ふあやめ草かりねのやとの軒のあたりは

とある返し。

言の葉も菖蒲も薫る宿になほこゑうるはしみ鳴ほとゝきす
とて更ぬ。

六日。那須資福の牡丹カキタニけふを眞盛とて人々にいざなはれて見に行しかば、雨けしきばかりふりて晴ぬ。

ぬれてほすいろこそまされ五月雨のふるもはつかの草の數々

那須氏のもとを出て、

七日。いと近き良友の家に、けふは人々も來集ひあるじめくわざして、うまのはなむ
けをかごとになど、ねもごろにもものしければかついたれり。ひねもすさよすがら語
りて明ぬ。

八日。よべより雨ふれば、例の人々來けり。

九日。けふ此里を出たゝむといへば、あるじ良友。

衣川袖のなみたは包めとももれこそ渡れけふのわかれに
返し。

いひ出ん言葉も夏の衣川うらなくおもふ君が別に
廣長。

別れてはまた逢事もたのまれすいとゝ餘波のをしき老の身
返し。

又いつとちきりもやらて老の身の言葉の露に袖そぬれぬる
廣影。

行袖にかけてちきらむ別ても又あふくまの川波もかな
返し。

別れても又あふくまの名はあれと袖やぬらさむ波のよるひる
正保といへる琵琶法師のよめる。

行人にあふてふ事はしら河のせきの戸さしてとゝめてもかな
とある返し。

おもひあふ心は通へしら川の關のうちとによしへたつとも
靈桃寺にすめる僧蘭雲の云。

結交數月如同盟 豈計高樓此送卿 請見陌頭揚柳色 回風猶耐杜鵑鳴
とありける韻の鳴といふ字もて返し。

青柳の糸くり返しほとゝきす君に心をひかれてそ鳴く
那須資福。

したふそよ軒端つゆけき草の庵にやとりし月の今朝のわかれを
返し。

あかて見し月を残して此屋戸にいと、餘波の袖そ露けき
方長。

と、めえぬ袖の別のつらきかな衣かせきは名のみなりけり
返し。

此里にかたしき馴て夜を重ねいねし衣か關そ立うき
桃英といふ人の句に。

と、めはやせめて早苗の五寸まで

かくて人々を別れて、けふ六日入邑にいたりて鈴木常雄かり訪へば、あるじのいへら
く、黒助といふ片山里に百歳の老嫗あり、その長壽を祝て酒さかな贈る、いざたまへ久
呂太須禰へといへれば、どもに出たつ、加美河の舟渡りして江刺の郡にいたり、行道と
いふ人をいざなひ、しかして其家にいたれば、そがむまごならむ五十歳の男ふくだみ
たる袴の襷積をたゞし、こははるゝの道をな、どの酒さかな、老女の前にとりすう。
老女は麻苧の絲うみ居けるか、糸うみさして手をつきぬ。耳いととく目きよく、髪は
黒髪まじりのおもさし、齒は一齒もおちずかねくるゝと見え、年は七十、八十とやい

はむ三輪くむけぢめも見えず、もゝとせの嫗といはむには、にげなかるべし、世にかゝ
る人もありけるものか、うべも國の守よりものかづけさせ給ひしとなむ語り、此老女
に酒すゝめ、その末の杯をとて人みなとりみぐらす。此嫗十三の歳にて此宿に媳婦
となり來て、今八十翁の子あり、五十の孫あり、うからやからとこそきまで居ならび、
蓋めぐりにめぐれば、酔ひしれて此孫なるもの傘をひらき扇を持ってうたひ舞ふさま、
かのもろこしのけうの子老萊子が舞ひ戯れて倒れたるに似たりと、人々もこゑをあ
げてはやしぬ。

もゝとせの親に仕ふる楽しさに人も千とせの齡をや經ん
日くれてみちはるゝと行道のもとにつきたり。

十日。あさいして日たけて起たり、けふは此江刺郡黒石の行道の家に在りて人々歌
よみあそび、あすなん膽澤にいななどいへるに、とみなる事とてふみもて來れば、こ
を見つゝ常雄は歸り去き、よべよりこゝにめぐらほうしども來宿りたるをよひ出れ
ば、南部閉伊郡の浦人宮古の藤原といふ處といへり。語りさふらへといへば紙張の
三絃とうだし、こわつくりして、尼公物語とて佐藤庄司が家に辨慶義經、山伏となり

てやどりし事を語り、をへぬれば小盲人出て手をはたとうちてそれ物がたり語りさ
ふらふ、「黄金砂まじりの山の薯蕷七駄片馬ずつしりと曳込だるものかた
りまた「ごんが河原の猫の向面さるのむかつら」「鉈とられ物語」「しろこのもちくるこ
のもち」などかたりくれたり。

十一日。もろこしの外にも、大和國また此處にも龍門の瀧とておもしろき瀧のあり
と聞て見にいたれば木々深く落たり。

松栢高きいはねにたつの門梢にかゝる瀧の涼しさ

蕨の岡といふ處に躑躅の盛なるを見つゝしばしありて、

夏草にまじるわらびの岡のへにをりたかへてやつゝし咲なり

行道をわかれて北上川わたりて常雄のもとにつきたり。こゝに二日三日と日をふ
る、雨はれをまつに前澤の杉、目真門といへる人訪ひ來て今日二日はかりわがた
にありてよ、あまりとみにいそきたちける、いさゝといへれば、真門にいざなはれて
くらゝに前澤につく。

十九日。けふはつとめてこゝを出たゝまくよそひすれば、あるじ。

わかれ行人に餘波をおくの海の波かけ衣いつかほすべき
と真門のいへる返し。

おくの海のなみかけ衣袖ぬれてふかき情をいつわするへき

片雲禪師いましばしはありてなど聞えて、

秋風も吹來ぬ文にたちかへる人をとゞめよしら河の關

とある返し。

言の葉にさそふ秋風身にしみてこゝろそとまるしら河の關

秋房。

別れても時しあらはと行人の歸らむほとをまつしまのうら

返し。

たひ衣かさねてとはむまつしまやなこりをしまのけふのわかれ路

要寛といへる翁。

とゝめてもこゝろ止らぬ旅ころも袖の別にのこる言葉

とある返し。

ふるさとにたちかへるとも旅衣かさねてこゝにまた語らなむ

六日入に歸る路すがら蓬蘽いとく多く花咲たり。

くるゝともふみはまとはしみちのへのはちしの花のいとしろくして
かくて暮ふかく至る。

廿一日。雨の晴間加美川を見れば、ちひさき舟とものこゝかしこよりこぎ出て、あるは夏草しけりたる中を白帆ひきつゝき、田の面にはやかてうゑわたらむ料にこひぢかいならし、長やか竹綱して馬くり廻しありく、その竹綱とる女をさせごとといふ、また畔となりには早苗採り、家々にては養蠶にいとまなみ桑こきちらし、けこちゝごたかごふなごにはごなど女、童桑とりありく、また田うゝる日は上下なそへなういとく、長き萱の折節にてもものくふためしなり。田面に在りては朴のひろ葉の小豆の飯はいづこもおなじ。

廿五日。うゑわたす早苗見なんと、人々と共に畔傳ひ行けばいくはくならん菅笠白々と千町の面に見え渡り、森かげに卯木の咲たるをそれも時とて早丁女といへり。
菅笠の雪かあらぬかさなへとるたもと涼しきさとめの花

廿六日。あしたより雨いたくふりぬ。去年ことし來る躰などは、田面のをとめらに泥うたれてどろまみれになりて、身も重げにイむをはとうち笑ひてはまた祝ひすとて打かくるに、逃迷ふなどとよめきわたり、家は飯かしぐをさめ、蠶養する丁女のみにて、殖女は星をかざして田面によそひたち、ひねもす雨露にぬれそぼち、くれて螢のたもとにすがるころ、やに歸り來て、ふす間なき夏の夜に、夢もむすばぬいとなさおもひやるべし。此早苗採りかゝる日に、雨ふれば豊年也とてぬるもいとほはて、よろこびあへり。うべも古き歌に「さなへとるけふしも雨のふることは世のうるふへきしるしなりけり」

廿七日。雨のいやふりにふりて、田井も溝も水うち溢れ、千町の面はさゝ波うち渡り、北加美川の流れ込む小川などに、舟さしめぐらして鱈魚漁もあやうげなり。こなたのあげた、くほ田に早丁女むれり。

ぬれ衣ほすまも波の袖こえてさなへとる也五月雨のころ

廿八日。あさてばかりこゝを出たゝむといふを聞て、姉体といふ處にをるくすし安彦中和。

たひ衣袖のわたりの別より涙の川のせく方もなし
とある詠の返し。

なみた川身もうくはかり旅衣袖の涙にくちやはてなん
盛方のもとより、

別てもおもひそ來せ朝夕もたえす其名はわすれすの山
返し。

情ある君かその名はわすれすの山また山はへたて行くとも
祥尙のいひ贈ける。

みちのくの山路はるかにへたつともめぐりあはなんことをこそ思へ
返し。

別れてもけふを契にみちのくの山路はるかに分てとはまし

守清の翁は、八十とし高く、眞白髪は雪とつもり、髭もしらみはげながら筆をとりて、

五月雨にみかさまさりて衣川たち行人をしばしとゝめよ

また此守清翁の句に、

螢ともなりて送らむさつきやみ

此翁のこゝろざし返すゝうれしく、

衣河ふかき情に五月雨のはれまはあれと袖やぬらさむ

廿九日。常雄とともに麻生といふ處に栖家千葉道利といへる人のもとにいたれば、
山丹花の花いたく咲たるを、

風吹は露も盈れて庭もせにさゆり花さくやとぞ涼しき

例の酒進めけるに時うつりぬ。あるじ道利の翁なにくれかたりける中に、此膽澤郡
若柳莊駒形山の麓なる金入道といふ村にては、老嫗の事を「ごんご」といひ、三四十歳と
わかき女をさして「ごんこひめご」とよび、娶などは「姫子」といひ、あるじし酒宴あるとき
に小謠舞といふものあり。そは盃を左に持て右に扇をひらいて酒は諸白御酌はお
玉さしたきかたはあまたありさすべき方はたゞひとり」とて、つとなみある人の中に、
ゆくりなううちつけにさしぬ。さゝれたる人はした心はしらねど、うむじかほつく
りて、かしらかきゝ蓋とりてひとつほし、あるはかさねたうびなどして、又たちて小
唄舞をせり。かゝる小唄舞にいと、酣になりぬとなん。夏の初め檜のわか葉をと

り敷蕙の下にしきおして乾櫛として是をふところ紙として人にさかなかいのせて進せぬなど語りぬ。さすがに山里の古風見るこゝちせり。かくて道利翁がもとを暮ふかく出れば、しばし野原の路行ほど螢いとく多し。

さつきやみわけこしぬれて草のはら露も螢も袖にこぼるゝ、
更て六日入につきたり。

六月朔日。あくるやいなやまくのこるかたなう蚤舟てふものを節分の豆はやすやうに散ありく。こは羊蹄葉などいふ草の銀蕎麥をかく蒔ありけば、是を舟として蚤の海にみな歸り去ぬてふためしとなん。しかして時の間に掃き清めぬ。

ますらをか刈りてつみけむ草のみの舟こき今朝はくたる夏河

けふの朔旦を脱月立といひならはして桑の林のもとに行ば空蟬のもぬけのからのごとく魂魄とびさりて人脱のみ残り止れるとて、桑の木一本見ても恐れかしこみ、蠶の養もよべにとりてけふはものせず、秋田路のごと齒固とて氷室餅のためしはせざる也。あしたのくもりてひるはれて夕くれ近く風たちて涼し。

五日。近となりの里なる杉、目眞種といふ人のもとにいたりて餘波とて夜ひとよか

たらひ、ふすかとすれば水鶏鳴ぬ。

夢もまた残る鴨のねやのとを叩きもはてすあくる夏の夜

六日。杉目の屋戸を出るに眞種。

別れなはふみこそ絶えぬ思ひやる心は通へおもわくの橋

とありしかば返し。

わかれてはふみこそたゆめおもはくの橋はこゝろにかけてわすれし

常雄のもとに歸る。

七日。つとめてこゝを出たちなんといへば、此家に保元平治の世の亂のころより、とり傳へたる札よき小櫻威とおほしくて、としふり破れたる鎧あり。是は常雄が前祖鈴木兵庫、頭常信の甲也、鈴木常信は鎮守府將軍源朝臣義家卿の家、令にてすなはち將軍の眞筆給りし感狀あり。常信は數度の戦ひに勳功ありし武士也、世々に勇士ありしにや、義朝將軍をはしめ北畠顯家卿まで、代々の感狀五枚あり。また掌形なきいとく、小く虎の皮布たる鞍あり。唐鞍てふものにや、結鞍などのたぐひにや、いと古き物也。敵よりとり得たる鎗あり、横刀あり、また家の幟標あり、そは頸など包みしもの

とおもはれていたく血にまみれたりしあとあり。よしある家の末葉也。あるし鈴木養作と常雄のいへらく吾世まで廿四代を経たり、かく今は民家いふき家ながら此よろひは千歳近きものから身の守りともなるべし。いさゝ分贈らむ故郷の裏ツツにもていきねなどいひつゝ贈られしうれしさに庭牡丹ぼたんを見て。

千代かけてたねやまきけむよろひ草いや榮行家そ久しき
あるし常雄又かならず訪来てなどありて、

浦波はよしこゆるともちきりおく事なわすれそ末の松山
とある詩の返し。

別れ行末の松山こゆるとも波のたちみにかけてしのはむ
雨のいたくふり來けり、家の人々みなマ、みだながら此雨にいかてかなどあれば、常雄。
けふのみと人をとゝめむこゝろをや天あまにもしりて雨のふるらむ
返し。

ふる雨は菅の小笠にしのきてもなざけの露に袖やぬらさむ
あるしの舞なりける鈴木常茂の、

夢うつゝ心もとけす行人にあかぬわかれをしたひもの關
とありける返し。

うちとけぬ思ひむすひてへたて行袖は涙のしたひものせき
常茂近きわたりまてとて送りして、やゝ常茂を別れて綾織といふ處にて雨もをやみ
たれば、田つらの路にたちて、

千町田にあやをりみだれふる雨の餘波涼しき露の玉苗
やをら姉体村に來て安彦中村のもとにつきたり。あめなほ微雨あめて夕月の天ともい
はすさながらさつきやみにことならず。遠かたに炬松ツツ二ツ三ツもてありくが、木の
間に見えかくれゆくさま、火串あきのこゝちして見つゝしをれば、その影は見えず螢のみ
ぞ多かる。

とふ螢照射あきは見えず雨にさへ汝れかおもひのけつかたやなき
あるじとともに語らひ更たり。此處に四五日いとありて雨のやゝをやみぬれは。
十二日。けふは石手堰いの神にまうでまくあるし安彦中和あきを前に、北上川の岸づたひ
に行いは、嶋島雄島いなどいふこゝらの岩群いありて分いやすからぬ路也。梢いをよぢ蔓いを

たぐりてからうじてみやところにいたりぬ。そもく此御神は、式の神社にして、膽澤郡の七社の一社にて、三代實錄五卷に、貞觀三年云々、陸奥國鎮守府正六位上石手堰神並預官社云々と見え奉る御神也。こゝに忍穂耳尊を齋奉りていにしへはゆゑよしありて宮造も大やかにおましくけむものかと察れたり。今はさゝやかなる祠の神にしませば、人みなそことえ知り奉らぬはかしこき事かな。むかし此北上川を加美川といひしも、古神川にして、此河上に石手堰の御神鎮座ませるよしをもて、加美河の名に流れけむものかと考たり。御前にぬかつきて、

いはてゐの神の御前の涼しさはきしによるべの水清くして
安彦中和おなしさま奉る。

みたらしの清き流は絶えずなほめぐみも深きいはてゐの神
こゝにしばし休らふほどに、ゆくりなう雨ふればいそき歸るとて、

夕立に菅の小笠もとりあへすみのしろ衣ぬれて涼しき
中和しとゝにぬれてイて、

かきくれて外山をすくる夕立の雨のあしときあとの涼しさ

くれちかづきて安彦がもとなつきたり。

十四日。つとめてこゝを出たつに中和近きわたりまでとて送りす。妙見山黒石寺のこなたに休らへば、いと高き木のうれに、幣しらゆふ如のもの付て木のいたく茂りたる中より見えたるは山臥の栖家にや。

優婆塞か一夏こもるおこなひのしるしを峰のまふしいそしる

かくて拈花山正法寺にまうてむとて其寺に至る。けふは始祖無底禪師の齋忌日とて、僧侶あまたなみゐて、御讀經のこゑとよめかして、此おこなひもなからをへぬ。此禪師の御弟子は無等良雄和尚とて、俗生は萬路小路中納言藤房卿にて、出羽國秋田郡山内莊松原村の補陀落寺の二祖たり。開山は即無底和尚也。無等良雄西來院を建て閑居し又嶺梅院に住て後、寺を出て至る所をしらすといふ。

法の師の心の花もゑみのうちにひらけそめにし山そたふとき
しかして安彦中和を別るゝになかまさ。

今しばしひきやとゝめんつまことの緒絶の橋を過る旅人
返し。

行かてにこゝろひかれて爪琴のをたえの橋をえやは渡らむ
ふたゝび別れて夏山といふ處に来る。

さらぬたにぬれし涙の旅ころもまた夏山の露分て來ぬ

酒酤軒の胡床人あまた居て濁酒飲つゝなによけむ西根の池在る大池の郡にの鯉鮒と
鼻聲に唄ひ今ひとりのあら男、面は丹塗、二王の姿してあな世の中や、ますこし飲けれ
ど價なし、はや腰鮒腰錢をいふ、夷人賃料を鮒形に、鱗たるよしもはらひ、ナなどは考
しみながら、つかひはたせりと酔哭すれば、後なる翁いかりはらだちて聲高にのゝし
り、あのばかあさましのやつかな、わがふところに金一步あり、是とらすべし、なんぼも
飲へと投やれば、酒店の女手の前には錢すこしたうべ、かねひとときりを、なじよにすべ
いと云ひつゝ、提にくみ出たり。みなひちを曲てはなうち鳴らすぞ多かりける。

味酒にゑふれはうさもなつ山の木蔭涼しくひち枕して

此夜は田河津に出て宿かる。

十五日。けふはあまつゝみせていでたつ。此あたり野にも山にも水乞鳥いとく
多し。狭衣に水戀鳥のおもひし給ふといへるも此鳥の事也。鳴聲あはれげに聞え

たり、こゝを行々思ひつゝけたり。

雨晴れてまた袖ぬらすうすころも水こひ鳥のこゑのあはれに

此あたりは前にも見し處也、猿澤の村なる中津山忠といふ人の家に宿づく。童ども
小麥の莖を束ねて牛馬の形を作り、桃の木にて弓を造り、ひきまがなへてさゝやかな
る篠の矢をはぎ、それをその馬うしに添へ五穀の苗を負せ、また桑をつくりて是秣と
してうち群れ、手ごとに曳ありくとしごとのけふのためしといへり。日高ければ大
原寺にまゐりて葉山社の來由を問へは、寺の優婆塞いらへていひらく、神はかしこく
もなきなみ二柱の大神八幡の御神をいつきまつりていとふるき神社也。いにしへ
氣仙の郡に、菅原中納言某卿とておはしけるが、都の名處ゆかしからせ給ひて、大原小
原・八瀬・東山などをうつし給ひしころより、奥の葉山といひし處なり。猿磨太夫も此
猿澤より出生られし處とて、家居の跡さだかに残り。今そこを鶴ヶ嶺の大権現と
まをし奉りて、内には彌陀薬師觀音安直まつる。また小葉山の觀世音は、圓仁大徳の
作佛也。其菩薩堂もあはれはてしとき、此山の麓に小丁といふ翁夫婦すめり。ひね
もす此山に登りて、木の實草の實を採り草の根を掘りてくひものとして世をわたり

いつも觀世音を拜み奉る事久し。ある時山鳴り谷ひゞきて、圓仁太師の加持寒泉たちまち涌上りあやしの光かゝやふ、小丁おとろきてこれを見れば、黄金佛あらはれませり。其くがねのみほとけをおのが家にもり奉り來て、柴棚を構へてすゑ奉りて、あけくれあなかしこ我に子ひとりたまへと、いつもいもせあけくれいのれば、二人の夢に汝かせちなるこゝろさしにまかすべし、見おどろきいよゝぬかづきいのり奉れば、七十に近きいもせの中に男子ひとり産り、恐さ尊さ身にあまり名を大夢とつけたり。大夢をとなしうなりぬればかゝる尊きみほとけをかゝるきたなきおのが埴生におき奉らむ事恐しとて、此處にうつし奉りしとなむ。また七十五代崇徳院の御宇保延二年丙辰のとし、名取郡の旭の神子補陀落山の菩薩をうつしまつりし處也。今は寺のめぐりになずらへて、廿六番の札うちぬ處也。陸奥守藤原進房卿の謠とて歌人の言の葉山の名も茂りもるかたもなき誓ひうれしき名取の老女の事は、新古今集に見え、また謠曲にも作りて、世にいちじろく人知れる女也。あやしき事あり此山に鉏鋤たつれば、小蛇いくらともなう出るはいかなるよしにかさらにしれる人なし。むかしよりしかりといひ傳ふといへり。

十六日。こゝを出て大原里につきたり、此郷五月三日の夜みな灰となれど、芳賀慶明が家は河邊に在れば事なしとて訪へば、よろこほひて夜打更るまで月見語らひて、歌はいかにといへるに

おもふとちこゝろのくまも夏の夜のかたらふ袖の涼しさ

歌二ツ三ツあれどみなもらしたり。

二十日。こゝを近き日出たゝまくいへば、芳賀慶明の云、此暑にいづこへか行へし、秋の來らば松島雄島の月は往て見てまし、夏のかぎりは此川のべの家に在りて暑を避ねなど、いとねもごろに聞えけることのうれしう、こゝろおちぬ養蠶の多かるも、みなまぶしのわらにとりすがり、外には大麥刈りてはつきに取りかけて乾、この雨間なくてといとなきをうれひあへり。

廿二日。河夏穠といふことを、

みそき川つみも流にはらびては水の心にちりものこらす

廿四日。家に在りとある人々、季忌宮精進せり。けふ八幡宮に詣で、此寺に訪ひてなにくれかたらふに、住僧の云、享保のころならむか、此寺に宥映上人とておはしき、いと

く好き人にてよめる歌多かる中に露すかる鳴子の綱も長き夜の月びきこぼす小田のますら雄といふ歌は世にしられたる歌也といへるまことよしありし歌人とぞおもはれたる。

廿五日。牟婁峰山に登らむとて、芳賀慶明をはじめ人々うち群れて吹上と云ふ處に至りぬ。うべも風たちあな涼しとて、人みななめらかなる苔のむしろに圓居せり。

水無月のあつさもさらに夏衣裾ふきあけの風の涼しさといふを聞て、慶明。

分のぼる道をさかしみやすらへは風吹上のみねそ涼しき

猶のぼればむかふ方遠からず君が鼻といふ山あり。此山のさま擲石うち重ねたらんやうなりと人々見ぞむ。そを見やりてうち戯て、

いくはくの峰うち越えし雲印地勝しか君かはなの高さは

とよみしを人々笑ふ。尾越峰こえ小竹かい分てやをら御神の鎮座丹嶂にいたる。

新山本山とて神社ふたつならびてまことにかみさびたる處也。そもく此本山は「養老二年戊午九月十九日陸奥守鎮守府將軍從三位兵部卿大野朝臣東人建之」と棟札

に見えたり。室根權現とまをしぬ。内には十一面觀世音を秘まつるといへり。こは四十四代元正天皇の御即位の靈龜の元より三四年を経て天明の今年までは千歳餘年やふるらむ。また新山權現は、九十四代花園院の御世正和二年癸丑のとし、陸奥司葛西刑部太夫清信建之とあり。内には聖觀音菩薩を齋る。

幣とれば心も涼しむろね山峰より尾よりはらふ山風

芳賀慶明。

かしこしなるやひ並居て諸人のあふくも高し神の恵を

圓仁太郎護摩おこなひの跡とて、梵字彫たる石苔に埋れたり。高きに猶のぼれば、氣仙郡の浦々味二渡、金花山など雲のむらだてるなかに、見えみ見えずみ見やらるゝいはむかたなし。人は樛子竹筒ひらきて杯とりぬ、かくて山を下る、山のなからはかり小高き處あり、そこに白牛の臥る形して方解石あり、眞白なる處いとく上品石也。此歸さ麓なる山里に休らへば家の妇人こはにつかぬものからひとつめせとて蕎麥の餅とうだして進む、人みなたばむものはなにまれたうびてむとて、びたくひに喰へば、末嫁桶にしたみこのせて釀酒うち入れてかいやり、しほり漉て大ひさげに盈し

て、是またのみねとてもちつれば、打ゑみていざ一杯の濁酒を飲べくとて居ならびて飲ぬ。門田には田草とりくりにうたひ、また畔に休らひ、けふりうち吹つゝ語らふを聞けば、此田もやゝ穂に出なん、小楢の葉のはや二度耄たり。今一度開葉はいや穂に出なん、此年は秋世の中ならむ、藤矢蓼の葉桑白厚していとく多しといふを聞て、稲作良ば民家はなにのうれたき事かあらん、あや樂し飲や唄へと又手をうちてうたふに、はてしなければ、日も山に入りてくらければ、手火炬ふりて大原に歸る。

廿七日。小林といふ山里の良善院の清隆法印を訪らへば、法印はふるき器財もたる家にて、なにくれとうだし、また古佛いくはしらとをがませ、又石弩あまたありける中に、品よげなるを五六贈られ、また大なる雷斧石をもつとにせよとて贈られしが、此石半分碎しかば、

此屋戸はいく萬代になる神の斧の柄さへもくたす山里こゝを出てくらくになりて芳賀のもとに來る。

廿九日。水無月もけふをかぎりにくれ行となもいへる都都喜石神にまうでぬ。こは阿倍比羅夫、あるは虫磨朝臣などの寄附品ものもありて、むかしは榮えし處也。黒

磨の歌とて云ひ傳ふ謠あり。「よき事を萬代かけて續き石の神の恵も大原の里しかいへれど、その時世の風ともおもほえず、いにしへ貞觀のころ山城國大原野の大明神を齋奉りし處といへり。また寺を續石山大原寺といひて、開祖は圓珍大師にして、藤原清衡豊田の館より平泉へ移り來て吾館の鬼門を守護給へと誓願せしは此神社也。本地は藥師如來を齋りて圓仁大師の作也。此石神はいとく古き御神なり。さりけれど、石神といふもいとく多し。文德天皇實錄四卷に、仁壽二年八月乙未云々、辛未陸奥國云々、衣太手神石神理訓許段神配志和神舞草神並授從五位下云々と見えたり。

治れる御代いつまでもつゝき石なほうこきなく神や守らむ

良善院の清隆法印をふたゝび訪へば、さけさかなもとめあるしめければ人々語らふ。雨のいたく零り出れば、此ほどかれくなる田もありて、水ほしく思ふ處へ、よき雨かなと人みなよろこびあへり。夕くれ近うなりて雨も晴たりしかば、河邊に出て手あらひ口そゝぎて、

みそき川あめにみかさますますかゝみ秋うつしよる波の涼しさ

れいのごとくくれて芳賀のやどに歸る。

太田孝太郎校訂

(天明)
寛政八年の夏のころ、みちのおくのくに膽澤の郡をたちて、松前に行のみち行ふり也。
南部路のことのもはらあはれは、「いはての山」てふこともてこのふみの名とせり。馬門
のせき屋より筆をとむ。かくて津刈路に至りては、「そとかはまづたひ」てふ冊子に
島渡りまでつはらにかいのす。

委波底廻夜磨

わは、いつことなうさすらへありきて、道奥に至り、こは雲離れ遠きくにべにも來ける
ものか、蝦夷か千島の月のあはれはいかゝあらんと、そとかはま波こゝろにかゝりて、
蒼杜のみなとへより船出せまく、まつ善衝のみやしるにぬさとりたいまつりて、なみ
風たひらかにみそなひたまへと、かしこまりて、やませといふかせを追手に行といふ
なれは、その風のふきこんかきりは、海士のとまやにあまた夜、旅ねしつれと、さちなる
かぜのたつきもなう、見やるわたのちさとには、あら浪のたちたちて、あれにあれ渡
は、よき日のいてこなん空は、いつくにかあらんと、浦人にとへは、葉月のころは、海のを
らひとて、かゝるものにてと、ひんなう聞へたれば、すへなう、えしも島わたりせて、けに
やかうやうのことも、ふなもちやすからさるさとしを、いのりし神のみさかにて、やと
おもひめくらし、ふたゝひとこゝろにちきりて、こたひはとゝめたり。やをら、あたゝら
眞弓ひきかへし、松島やをしまの月にあくかれしほかまの浦こくふねにむやひし、宮

城野の萩のまさかり眞野のかやはらわけつくして石上ふるきところくを尋ねふたゞひ膽澤の郡にめぐり来て七のみやしるにぬさまつりて來藻川のこなた、廢弊舎波のうまやのほとりに、さゝやかの庵むすひて冬籠せり。あら玉のとしたち、春にもならば、こさふくゑその島人も見てんと、こゝろほりすれと、ことしは世のなりはひよからず行みちのわつらひやあらんと、人々のせちにとゝぬ、あるはこゝちそこなひふしくらしいて、ことしくといひもて、手を折は三とせにたれり。こや入江のあしのほるにもあらで、過にしことのくやしう、すゝろにこゝろあはたゞしう、天明八とせの夏、みな月のなから斗、かとしてせんといへは、ふたとせみとせをこゝになつさひたると、里の子ら、わらははべまで、ほろくと袖ぬらして來集り、あるは老たるわかき聲をそろへとくく、又もこゝに來ませなど、みなこととひていぬれば、わきてあさゆふとひとはれ、むつかたりせし友垣など、昔の根のねもころにうまのはなむけせんとして、圓居したるをりしも、靈桃寺の文英上人のもとより、たてふみにこめて、

見はてすもとくたちかへれみちのくのかきりしられぬ蝦夷か千島を
となんありけり。此歌の返しをす。

ゑそ舟にのりてちしまをわくるともかきりも浪のたちかへりこん

おなじ寺にすめる潜龍法師のこと葉に、

白河遠去向邊州 惜別慇懃送壯遊 常伴腰間秋水劍 復收懷裡夜光珠

青森山岳雪花亂 合浦關門紫氣流 縱是松前風物好 歸程自誤莫淹留

この末の文字を末にむすひて、

うら山のなかめありとも販り來んたつきもなみにこゝろとゝめす

と返しす。信應の歌に、

浪遠くたちわかるともつな手繩又くりかへせわかのうら人

とありける返し。

こきなれし浦をしるへに綱手なはくり返しこん和歌の友ふね

安平廣影のいはく、

境望欲極海東洲 離曲送君萬里愁 至日松前秋應近 渺茫雲路乘孤舟

といへるくしの返しす。

いましはしこきわかるともほとみなみおなしうらわによるの友ふね

俊龍のいへらく、

積水渺難極 安知澤國東 雲霞如散雨 滄浪若乘空

停撓徃看日 征帆自信風 孤舟應有興 裁比擢歌工

おなし人のことにはに、

河梁柳色幾離居 六月海風轉欲疎 雲路縱遊九洲遠 冥鴻寧忍報書虛

といふふたくさの返し。

わたつ海はいかに見はてんもろこしの鳥もつはさのつかれてやこし

よなくはかはるあるしにかたらひて長き旅路をひとりゆかまし

高橋久武、ふみてをとりて、

海山をへたて行ともたよりあらは来るはつかりにかけてつけこせ

といふ歌の返し。

そなたへと行はつ雁のたまつさをこゝろにかけて人をとほまし

盛芳のもとより、

わかれてのよすかはいかに海原やまつほとなみのたちかへれかし

とありしかは、此返しはいやる。

別れてはよすかも波の海原やしほたれころもたちかへりこん

那須資福の、

行ふねの蝦夷かちしまをめくるとも秋風ふかはこきかへれかし

とありつる返し。

さらてたにうけき秋風身にしみてとくめてりへりかこん夷のしまふね

かくわらくつさしつかみし文筆して、

すみすつる庵そ出うき柴の戸のかりそめふしも三とせへぬれは

とゆんでの壁にかいつくれは、人々見て、うちすんすれは、正保といへるひはほうしの
聞つゝ、

出うきと君かいひけんことの葉をのこすいほりにありとしのはん

とよめるもおかし。けふは大室てふ處にいきて、鈴木常雄をとひ、別れてんとていつ
れは、正保わらはをとまなひをくりし、したかひ來けり。みちいと近く、六日入のかの
おほむろに至りぬ。とみなることのありとて、正保は前澤にいにき。あるしなにく

れとかたりくらしぬ。

十六日。あるし常雄じはらくのわかれなるへし、けふはかりはと、せちにとゝめかた
らふ。ゆふつかた、資福・盛芳・久武のぬしとふらひ来て、餘波やるかたなう、ふたゝひな
とありて夜ひとよ語ぬ。

十七日。あしたの空かきくもりてやかてふりくる雨によそふらん、那須すけとみま
つとなふ。

旅衣したふたもとをいましはしたちとまれとや夕立のそら
とありし歌の返し。

たひころもしとゝにぬれて夕立のふりわかれゆく袖そのうき
あるし常雄。

わけわひん山路を遠み見るかうちにこゝろにかゝるゆふたちの雲
とそありける返し。

あすも又こゝろははれすわけわひんよしゆふたちの雲たゝすとも
たかはしひさたけ、

いかゝせん千里をすくるゆふたちのふり別れてはぬるゝたもとを
返し。

白雨は波のちさとをはるゝともこゝろはくもるうき旅のそら
高梨もりか。

いましはしわかるゝ袖に夕たちの雨もなこりの露むすふらし
この返し。

ゆふたちのよそにはれても行袖につゆの情のかゝるうれしさ
もりか、ふたゝひ、

たひ衣明日のなこりをおもふとてはれにし雨に袖そぬれぬる
とありし返し。

あまはれにかはくたもとをかたしきて明日の別にぬれてゆかまし
雨又ふり来て日はくれたり。やをら更行ころかみ河のへたならん、川長をひたよひ
によぶ聲の、雨の音にまきてほの聞へたり。

舟よはふこゑもをやますふる雨やこやわたしもりとまにぬるらし

雨のをやみし雲間ゆ、月のさしのほりて、さうし(障子)しらくと見へたるとき、けしきはかりおしあけて、あるし。

海山をへたつるとても空にすむ月にこゝろをかけて偲はんとなかめてける、返し。

うみやまをへたてしとても友に見し月のなさをえやはわすれん
久武。

よなくはおもひそいてんまとぬして月にかたらふかゝる樂しさ
返し。

うちむかふたひにしひてみちのくのそらはいつこと月にたとらん
とりのかきろと鳴はあるし。

けふも又あかすかたりて吳竹のひとよをあかせわか友とち
といへれば、人々にかはりてこの返しをす。

おもふこと語りてけふもくれ竹の夜半のふすまもしらぬたのしさ
枕とらんとすれば、とはしらみたり。

十八日。つとめて雨いたくふれり。人々よへのこうしにや、あさいして、はれたるころ起出て手あらふ。けふこのおほむろをいたゝんとしたるに、あるしの云。

歸り來て尙もかたらへほと遠き蝦夷か千島の秋のあはれを
とありける。譚の返し、

いつの日かおなしまとぬになにくれとゑそかちしまのことかたらなむ
又つね雄。

おもふそよなみちも八重のしほ風にふかれてわけんきみか行ゑを
返し。

おもひやれ八重の潮風身にしみて友なし小舟さして行衛を
かくてよそひして小笠とれば、資福。

うき旅の友とし契れこよひよりかりねの床に宿る月影
返し。

こよひより人の面影しのはなんかりねの屋戸の月にむかひて
久武。

おもひやれ名残つきせぬことの葉につゝめと餘る袖のなみたを返し。

わすれしな人のこと葉の露なみたわかるゝ袖にかゝるなさけを

やとのあけまきあるしをはしめ人々にふたゝひとへは、長き旅路をことなうなと、みなとにわかれて、水澤のうまやにつく。こゝにまつる鹽籠のみやしろにまうて、ぬさととりて、この神ぬし、さゝ木なにかしかもとにこよひはとまる。夕くれかけて、雨また零來ぬ。

十九日。あしたより雨、猶ふりて、空さためなきけしきなれば、あるし、ひとひふつかはありてと、ねもころに聞へてくれぬ。

二十日。あるしあさきよめしけるとともに、廣前にいたれば、たくみらあまた來て、けふみあらかをふきかふるとて、そぎたもてわたり、千木おきかふるなと聞へたり。こはこんふん月の十日なん血鹿の浦のみやと、おもきかんわさのあれは、こゝにいはひまつれるみやしろにも、おなし日祭してすゝしめ奉る、そのもふけとなん。
かしこまるたひにめぐみのますかゝみうつせばちかのしほかまの神

さゝ木をこゝにわかれて、みさかおりはつれば、けふたつ。市女のたよりに、ふみもて來るを、ひらきみれば、人々のことつてもいひて、久武の歌あり。

いくたひかふり返り見るたひころもたち別にし人の面影この返し。

たちわかれひとりゆくゝたひ衣なれ來し人の佛にたつ

たよりもあらはとかいて、相しりたるかもとにのこす。雨のいたくふりくれば、大林寺に入て曇華上人をとふらふ。上人老たる身は、ふたゝひのたいぬ、いかゝあらんと、おなしくにうどのよしみありて、ひたふるにとゝめたまへば、こゝに語らひて更たり。

廿一日。いさゝかのあまはれにとて出くれば、又ふり來けり。畑中なにかしのしるよしは、鎮守府八幡のみやと、ところに近く、そこにかりの栖居しければとひよりて、日はやゝくれたり。

廿二日。雨のやみてけれど、且の空うちくもりたれば、いかゝとためらふほどに、尙ふりしきりて、けふは岩谷堂といふ里まで渡らんとおもへと、水のいとふかくして、北上

川の舟いたさしなど人のいへは、すへなういかゝして江刺郡へいかんと、ひとり空のみあふかれて、ものおもふをりしも、あるし藤白華別のくしとて、

靺鞨城頭濔海流 路通魏絳論邊秋 波間織綃泣珠客 鵬際宿雲燃犀舟
雪帳風旗逢夜獵 胡琴羌笛足春遊 歸來應見名山誌 如畫煙霞是滿州
となんかい聞へてけるに、むくふ。

笛の聲ことのしらべもあら磯の浪にまきれんゑその遠州^ト

八幡の神籬にまうて、久斯美多万をも拜み奉らまく、いてそのみやしろへとおもふに、聲高う舟よはひせり。こはかみ川の行かひやあらんとくくくと人々のいへば、いそきほゐにはあらず、そのかたをよそに出たつ。しかはあれと、去年さをとゝしもぬさととり、をかみ奉りし、あめつちとともひさしくいひつけとすんして。こゝよりをかみ奉りて、あるしにわかれて、やはたを離れて川のべにいたれば、足とくあれ舟いづとて、さかまく波を棹あまたの力してつきたり。いはや堂の里に至り、相しれる大和田なにかしのもとにつけは、三とせ斗近となりになつさひたる、前澤の福地なにかし、こゝに在りて、きのふとひ来て待わびつるなとありて、ふたゝひのたいめせまくてと、

ねもころにももし聞へて、このぬしの歌あり。

わかれてはそれとよすかも夏衣たもとに露をおくのほそみち

返し。

夏衣うすきたもとに露いたくおくのほそみちひとりたたらん

このぬしのめなりける、志咩子のもとより、

別てはたへすそおもふみち遠くひとりゆくらん君か面影

つねにかく聞へしふしもあらねと、人をわかるゝをせちによめるなるべし。

草枕かりねのやとの夢ならてわかれし人をえやは見るへき

と返しす。この宿にやまうとありて、人のいて入りもうるさからんとて、あるしのゆかりのことやとにうつりいきて、こよひはこゝにねなん。かつ至れば、はらふくらかなる女ともいと多く行かひをせり。けふは子安地藏尊の祭なりければ、かくはらみとのみいづもまうてゝけるならはし也と語り、いにし十六日の夜はこの里に近き小田代といふ處の、十一面觀音ほさちのまつりありしは、世にことなること也。いかにととへは、わかき男女さはにむれまうてゝ、それらがかへさには、われよしとおもふ女

にけさうして、松のしたかけ堂のかたはらにてもまくばへり。こは男さたむるわさなればとて、一とせにひとたひのいもせむすぶの神まつりとて、まうつることを、おやぐも見ゆるしてけるならはしとなん。大原のさこねも、しかあらんとて、あるしはと笑ふ。

廿三日。きのふのことに雨ふりてければ、おなじ宿におなし友かきとものかたりして、けふもくれなんとす。

廿四日。いとよき日になりて出たつ。このかた岨に聖徳太子のみや、達摩尊者社とてあり。そのゆへは、秀衡くに、都をうつしたるものかたりありて、此あたりを、片岡ともはらとなへて、いかるかやとみの緒川のふることをもて、いにしへを祭り、ふることを残しおきけん、田の中に、家のふたつみつあるに、かはきたる鱈のかしら、鯉のかしら、あるは魚のかたを木にて作り、繩にかけ、そのかどぐに、ひきはへたるを人にとへは、伊勢まうでしたる人あれは、それか飯りくまで、そみかくだなどの物乞ひ至らさるけからはしき人の入り來ぬ料、法師をよくの門しるしといへるもおかし。○圖倉澤といふ村に出て、見ゆる高岨に、松杉の生ひましりたるは古館とて、鶴野五郎家任のい

にしへをし三のぶ三照といふ村に、名たゝるふるつかのありけるよしを聞て尋れば、坂井田といへる、鳥居のあるをしるへにと、人のをしへしまゝばるぐとそこに至れば、大日如來の堂あるに、あないをくれ來てぬかつく。みちのくのならひとてあみたほとけやくしくはんおんほさつにも、神とひとしう雞栖をたてゝあかめ祀る。この堂のほとりなるところに、つちの小高く草生ひしけりたるをさして、これかかまくらのあま將軍の御塚也とをしゆ。いかゝしてこゝにはかくしおましましてけるならんと、あないいふかしげに語る。○圖あり尼將軍の塚むかし此あたりは、みなつるはきのしめしところにてなと語りすてゝ別たり。男岡とてあたごの祠あるをめてに出來るに、人あつまりてつゝみうち笛吹すさむは、けふなん湯祭そせりける。下門岡のやかたに出て、みちしはしのほと行きて、國見山極樂寺の前を弓手に、眞木の立あら山中のみちをよぢて胎内潜とて、巖のしたをせくごまりて通る。此石の上におはして、圓仁大師のごま、みときやうし給ひし石を坐禪石といふとか。山かすかに鳥鳴て、伐木の音聞へたるとわけのほれば、老かゝまれる法師の木の根をほり、いはほをくいてけるとて、手に大鍵ついさびなといふものをとりて、ひたうちにうかちてけ

るか斧のひきと聞へたり。さる法師は、百とせに近き齡なから、眼あきらかに小石にみのりをかいてこゝに埋み塚してけるとて、いさゝか人手をもからず、ひねもすあせし、日にくろみてけるごの極樂寺の老法師なりとか。鐘の聲のいと近う、山谷にひきわたれるは、まうてし人やつきたらん。やかて洪鐘のもとにいたりかくてよ、こたふはしこにのほれば、三間を四面の堂を、そひへたる岩の上に、柱つき立て、いとたかやかに、かけ河(み)にのそんでつくりたれば、大なる松杉などの生ひ茂りたる木のうれのみふむこゝちせられて、あやうげなり。おましませる觀世音は、かしくも圓仁の作り給ふて、くにうどたふとめり。うち見やらるゝ山々嶽々、北上の河くまを見れば、水上は見へねと、むかしいふ狹布の郡、いまいふ鹿角の郡よりもおちそふるか、岩手郡ををなかれては、江刺岩井をめぐり、鹿股のほとりにてふたつにわかれて、本吉の海に入はつるまで、布たく繩などをひきはへたらんやうに見へみ見へすみめぐりめぐれり。をはしまによりたる翁、見たまへあなたのみんかしの木の中には、金福山定樂寺とて、いにしへ大寺ありて、寺てふ寺のをさたりし址なり。北は口吸森、西は三鉦か嶽男岡、女岡、午王坂はた岩脇山ともいへり。寶塔山には、八幡の社、大日の堂あり。南は高森

山にて、神明の社あり。八王寺、尖カ杜、そのひんかしに釋迦ふちの堂、その南に毘沙門天、岩入りの觀音わかれ山、屏風石とつこ水、こはみな近きさかひなり。丑の方には種貫郡、内川目村の早池峰山、藥師がてんしやう池上山、これを三の山とはいふ也。亥のあはひに見ゆるは、田茂山の姫か嶽、この山は岩手郡に所在ける。乾は斯波郡にあたり、栗谷村の南昌山、この山なんむかしは徳か杜なりしを、人もはら毒か森といひあやまれば、しかくにかみの名つけ給ふるとそ人のいへる。いはて山いま人の岩鷲山と唱ふ。しはの郡の吾妻峯、とやが森ともいふ。これなん片寄村に在り。ところの新山權現、よねか森ともいへり。眞西に仙人峠かの水澤山にては銅ほり、この千人たふげを越れば、澤内とていとひろき村里のあり。坤に三笠山、前塚見山、鞍懸山、土倉山、鳥坂山、駒か嶽、この山は南部仙臺をさかふとか、經塚、若柳横嶺、小檜山、高日山、酸川峠、高檜山、こは午未にあたり。かしこはとへは、南部路の飯豊杜にて侍る。南にはるかに見やられたるは、おとけか杜にて、栗原の三の迫に在り。この長に近きは、明神山といふ。こは抓カ木田村に在り。又躑躅が比良とて、口内邑に在り。はたまとのかに、人首ヒトカバの物見山、卯のくまには、伊手村の河原山、横瀬なる女國島おくにしまやま、小

田代山巽に見へたるは太田代山黒石山長部山獨活の森、こは舞草に在りて、いにしへ時平のをとゝを祀りたりしところにて、そのをとゝのもたまひしといふ。觀世音をおきて、いまをとゝの森とも、しかいふうとのもりとは、志かまかにみなよこなまりて、うとの觀音とはいへり。いなせの渡りはいつこ、あしこの男岡のかなたを、むかしはわたいたれど、いまは相去のうまやぢに通ふ。岩城川といふ、道奥の門岡山のほとと、きす稻瀬のわたりかけて鳴也とは圓仁上人の歌と、もはらこの國にさたせりなと、つはらにかたり聞へてけり。川○圖あり岩谷堂觀世音のみまへより北上相去のうまや見へたるのかたとあり、此なかめおしけれと、日もやゝ西にかたふけは、翁にいとま申せば、黒川郡の七森岩井の郡なる霧山絶嶺のあくろ王かすみつるあたりは、秋ならては見ゆましきに、又ものほり來ませとわかれて、樓をくたりてあないのいふ。こたひは左に落んとてさいたつ。老法師あせおしぬくひて、ことなうなと、極樂寺の軒にまくだりに、門岡村に出てあない去ぬ。

このあたりに、雀の宮といふさゝやかなる社のありと、かねて聞しかば、とひたつねてもいつことしらず。このすゝめてふ名の、しづめおかの神の御名に、いさゝか相似たり。かくいひはぶきいひあやまれるたくひいと多し。いま陣が岡に祀れとまこと

しからざるよしをいふ人あり。鎮陣こゑの似たれば、しかいふにや、もとも陣か岡も、いとふりたるところ、右大將頼朝も、そこに旅寢しおましませしことなとありきと、おもひ出たり。江刺郡の一座、鎮岡神社は、埴安の神をあかめ祀ると傳へ聞し。

かしこしなあらふるとても、ぬさとらはこゝろしつめの岡の神籬

こゝより手酬奉る、抓木田の村をさ及川胤修がもとにくれて宿つきたり。あるしの翁こゝろある人にて、一夜を語る。

廿五日。空のいとよけん、さりけれと、きのふの水いとふかく、いまた北上のふなわたりあらされば、おなし翁とひねもすかたりて、こゝにくれたり。

廿六日。あるしつふねを呼て、山路のあないにつけて、此男の行にまかせ、きりにしたかひて出たつ。村のうなひめ、夏ナツ蠶かふとて、このとゝこの中には、かねご多かるなと、桑の葉こきかくるとゝ、こは尊しといふこゝろにや、科野の路にては、たふとさまなといへり、かねごは死たるをいへり。いくほともなう、南部のさかひに入て、黒岩といへる村に入れば、家ことの門の柱の左右に、わらのかたしるを作りて、弓箭つるぎをとらせて、それがくびより、しときやうのものを、すゝのことくかけたり。風なとを、ひ

し〜と人のやめば、かゝる人のかたしろをつくり、もちだんごにても、家〜にすめる人の數ものして、人ことに身のうちを撫て、糸につらぬきかけて、門にゆひ立ておけるとか。はた里などにては、阿叫の鬼とて、紙に面のみかいて、にぬり串にさしはさみて、軒にさしてけるも、ふりことならずなど、あないのいふ。○圖あり「病の神をひやた辟病と上におなし」天鍵には石をほりうかつの具「都以差毗には「土らふまつ」あゝの鬼のか堀子などいふのたくひにや、土に穴をほり抗などをうちたつの具也」このあないにわかれて、かみ川のわたりをし、二子といふ村をへて、はいまのつかひの行かふは、うまやちになりぬ。花卷の里近うなりて、頼朝の槻の木のもとに、上箭のふたすちを射立て、これを神に奉りて、いのりし給ふたるはこゝにて、殖槻といふ、今いふ毫塚ならんか相しれる、伊藤なにかしといふくすしは、三とせのむかしもかたらひてける人なれば、こゝにうまのつゝみうつころつきて、あなひさとて、かたりてくれたり。

廿七日。あすのためよからんとて、日はしたなから、ひるよりこゝを出たつ。みち行友の云かたはあしこと手をさして、晴山とて女の乳子を負たるすかたの岩の立たる此山に、いつのほりても、午より申かけて、かならずなへふりぬ、いかなるゆへならん。われこゝろみみのほりしことふたゝひに及ふなと晴山は負、山ならん、子などをあふ

ことを負れるとはいふ也。宮の目といふ村のこなたに渡りたりしは、小瀬川又の名を瀬河といふは、戀瀬河となん。

誰れとなくふるさと遠く戀迫川おもひわたれば袖ぬれにけり。

八幡の神のおましある村をへて、久曾万留川といふを橋よりわたりぬ。たかいかにつけし名ならん、しかはあれと、ふりたる言葉のこゝろにくし、はたそのかみの歌にくそかつらなとよめり。はた葛の葉をくぞの葉といへるのたくひいと多しと、ひとりおもひて、かつ戯歌をつくる。

行水の神ともならていつの世にくそまる河の名になかれたる

此水上は、大瀬川といひ、まほなる名には、遇瀬河也けりとか。旅人ふたり、あせに沾れたるたのごひをひたし、かれひこをあらひ、水をむすひたり。

旅人のまた來ぬ秋にあふせ河あつさもなみのゆふ涼して

日くれはてゝ石鳥屋宿つきたり。(谷)

廿八日。朝戸出に見れば、軒をつらねたる屋の上に、わらをくみて月の輪のやうにつかねて、ふたつみつあけたるは、何の料にてかと人にとへは、むつきの水餅シメヂを、みな月の

朔のあした、齒固の祝にくひて、つゝみわらを、屋根になけあけて、火よけとそしけると
 なん。ゆく／＼小川あり、名をとへは、多具那河とこたふ。又河あり、とへはたくな河
 といらふ。うべ此川は、志和の稻荷の神籬のほとりをへて、こゝにてふたつにわか
 たり。しほのいなりのおましこそ、まことの、志賀理和氣の神のふるきみあとになれ
 とは、かねてきゝつ。河の流れに、人あまた足あらふを、

おなし瀬をあまのたくなはくり返しいくたひぬれてかち渡りせん

村ふたつみつ來れば、つゝみうち貝かねをならして、人さはにむれて、なにむしほふよ、
 嶽からふりくだつた、こせ虫ほふよ、こさいむしほふよ、ばら／＼にまつられて、たけの
 ほりせうものをとあまたの聲にうちはやし、小田のくろみちふみしたきありく。櫻
 町村に來て、赤石明神をふたゝひをかみ奉りて、みちしはらくへて、郡山にさし入るへ
 うあたりとおぼへて、人のかうへきりてさらされたり。こは十六文すまふとて、すま
 ひとりありきしわかものなから、寺のきぬわたなとぬすみて、きのふこの河原にてき
 られたりと見る人のかたる。人のいふ此五郎沼は、比爪の五郎俊衡、宮古濱にやきた
 る鹽をもてはこはせ、人をなみたゝせて築たる塘なり。こゝにはなちかふ牛の、たか

はきに、うるしのいたくつきて來りしを、いつこともしらすりし。はた、冠さす夕陽か
 かやくそのもとにうるしまんはいこかねおく／＼」なと平泉に聞し物語のこゝにも
 せりけり。走湯山高水寺、むかしは郡山にありたりしそのころ、稱徳天皇の建させ給
 ひしは、そのたけ一丈に高き觀世音也。伊豆の國走湯山權現を、清衡こゝにうつし祀
 られたり。そのころほひは、もとも大なる佛閣たらんかし。金堂の壁のその板、十二
 枚をはなちたる、糺明せられしかは、そのもの宇佐美の平治實政かつふねたりしなど、
 しるし残たるふみ見てもしりき。此寺は今盛岡にうつしてけるとなん。盛岡にい
 たるに、上川のふなはしかけかふるとて、はたあまりなる小舟を、ひきみたし、岸べによ
 りたるをつかりしてつなき、くろかねのつなを、きしよりきしに引延へ、駒ふみの板な
 らべたれば、ひしく／＼と人のおし渡るにましり、めしゐの男女ふたり、たつさへて行は
 ひは、ほうしならんかこの女は、盲巫女といふものなり。里の子の句に、ふなはしの板
 子夫婦や秋の風と聞しはいとおかしかりし。いたこてふことを、いかにと誰にとへ
 と、しれるはなう、此ものや神おろしをし、いのりかぢすゝのうらとひをし、あるは、なき
 たまよはひし、みさかをしらするは、神の移託てふことをやし、かいたことはいへらん

かし。けふはくもりて、岩提山の尾上斗、見へみ見へすみやをら晴たるを、見たゝすむに、よそまりの法師、ひとり、みしかき衣をまくりてに菅笠ふかくきて、ゆくりなうしりより、こや旅人、松前の島渡りしてけるよし、みちにて聞つれば、ともなひてよと、名のりしけるは、浪速なる袁邇奇治とて、わさおきやうのかたりしてける人なりとか、ひとりのみおくのなちを分いかんよりはとて、行連てこよひは檢斷の宿にとまる。

廿九日。つとめて出たつ。もはらこゝのつちけとて、夏引の糸あまたくり返しもて、つむぎしまをりをし、黄精を蒸してそ沾る宿の軒をつらねたれと、偏精やいと多く、正精やまれならんかし。この市中になかれたる、中津河を橋よりわたれば、鹿角郡へわかれたる巷ありて、西にわかるれば、猶黄精アトゴをそうるめる。黄精膏もあり、つとにせよなとよはふ。さゆりの根は、大なる人の掌ふたつにのせつへう、あまたとりつかね、鶉は名たゝるふかくさの野邊にまさりて、引聲ふくみ、こは明灰尾花袖籬ヒナなど名つけてとりこを軒のはしらごとにかけるらべて、人にもうり、あがものと聞つゝ、あきなひものしてける宿のいと多かる。こゝに近きあたゝらやまは、いま踏鞴山ともいふとかきけは、此山に、鹿シの宮といふかありと人の語る。うべあたゝらの根にふすしかのこ

ゝろあらんとおもはれたり。なへて此あたりは、狭布のせは布に、つはらにしるして、こゝにはことそきたり。岩提山の雪のいまばたけち残りたるを、うち見れば、翁ひとり、わらはへの手をと、り木のもとにたち、あのおいはしの雪といへり。嵩に鷲のすかたしたる岩の在れば、岩鷲山ガンシユサンとなへ、おいはわしといふべきを、もはら語路あしくばぶきていへり。いはては、岩手シテの文字なれば、岩鷲ガンシユのこゑに、いまし世の誰かいひたかひけん。○岩手山の圖あり人のいふ岩城判官のきんたち、津志王丸のみたまを、神とこの山にいはひ、津刈路に在る岩樹山の巔に、安壽の姫のみたまを、安珠比咩ヤシヒメと祀り、岩木山大権現とあかめ奉る。又いふ此岩鷲山のいたゞきの霧か嶽といふには、いまも鬼のすめり、はたあやしのものむかし埋しところ也。こなたさまには見へねとも、いはでの森とて、ひかさふせたらんやうなるやまありなと語りて、此翁いはて山の句やあらん、たうひてと、こゝろありけに聞へしかは、否とこたへて、たゝう紙のはしに、

こゝろにはそれとおもへとおもふことこの葉にえもいはてやまなん
とかいてとらすれば、こは歌なりけりなとて、くりかへし〜見もて去ぬ。「おもへともいはてのやまにとしをへて朽やはてなん谷の埋木」とすんして過れば、いまはた時

鳥の鳴たるを思ふこと磐手の杜の霍公鳥終には聲も色に出にけり」といにしへ人のこゝろはへも、かつあらはれたるはおかしかりけり。ゆくゆく片唄の梢より、あら鷹のつはさをならしてとふに、林の鳥は、うちひそみたり。けにや、このあたりには、鳥渡りの鷹ありて、すかたもいとよげ也。其むかし、みちのくいはての郡よりたてまつれる御鷹世になくかしこければ、になうおほして、御手鷹にし給ふてけり。名をは、いはてとなんつけ給へりけるを、それをみちにこゝろありて、あつかりつかふまつり給ける大納言にあつけ給はりける。夜るひるこれをあつかりて、とりかひ給ふほとにいかゝし給ひけん、そらし給ふてけり」と大和物語にも見へたりとそ、おもひ出られたる。

むら鳥の聲うちたへてならし羽にいはてのたかの行をそしる

このくれつかた、濫民の村につくこゝをむかしは、枯杉とかいひしと、麻の葉をきりにきりてもとすんして、

いくはくの旅にしつもるうきことをけふのみそきにいさはらはなん

ふん月の朔。つとめて、霧こめたるはかり、め秋田本霧こ小雨そほふりてやをらは

れゆけは、

ゆくゆくは身にこそしまめ涼しさよ薄きたもとに通ふはつ風

巻堀のやかたなる、金勢明神のほくらは、むかしもぬさとりしあたり、芋田川口などの村をくれは、むさしよりくに見めくらせ給ふのえたち、日あらず至り給ふとのゝしり、そのもふけにとて、石ほりくさ刈り、木こり枝うち、路造りけるあらをらず、き、鉄かつさび、手ごとにとりゑぶといふものに、土かいいて、ひきありくを見れば、それらがぬかにしなゝの文字をかいて、人あらためゆるしとせりけるも、あせになかれていよゝつらぐるにあつけなり。「吾君のあまねき御代の道作りくほめる身をも哀とは見よ」といふ。信實のなかめ給ひしをふとおもひ出られたり。沼久内(宮)かいら(マ)げ(マ)が(マ)ね。御堂村になりて、日はくれて、御堂もりのうはそく、正覺院の宿に一夜をとこひいねたり。よんべより、かやりたかねば、ましてこのあたりは、蚊帳なとたへてあらじ、かゝる山里めけるほとりなとは、科野路の山里にひとしう、柱とてそきたをさゝやかにし、あるはいたとりの太く生ひかれたるをくたいて、ちいさき箱に入て、かはやのくまにつりて、これをくぞまることにもものしてけるは、もろこし人のふりにひとし、その名を

籌木といひ化巾とそいふめる、いにしへふりや残たらんかし。かゝる御堂のゆへあれと、けふのせばの、日記にしたれはかいもらしぬ。

二日。朝たつ空のくもりたり。雨ならんといひもて、中山村に來にけり。ここにすむくゞつやうのもの、小蝶の飛來るをとりて、このわらし、かつかべちごめるそといひてやる、わらはあやまちてはなちやりて、なきのゝしりけるを、母ならん來て、こぼうほるやつかな、いつこへもいなくなれゝといひつゝ入ぬ。姨のさしのそき、あのめらし、かつかべとりてやれと、聲いとあらゝかにいへは、女聞てどす、おほばが、又くうるうとて、猶蝶をひゆく。かつかべは蝶をいひ、ちごめるは、あづけおきたのむ也。こぼうほるは、童のなきいさちたるをいひ、どすとは癩の病をいひ、くうるうとはつくるとも、じらをいふともいひて、はらぐろにいひのゝしるをいひ、はたじぼるこころも聞へたりとなん。火行ヒキチ小繫ヒキチ笹目子ヒキチに至れば、さとふりたる雨も、午はかりならんはれたり。

むら雨の零ほともなくたひ人のさゝめこみのゝひるま來にけり

山鳴り谷とよむまで、たぎち流る水の音に、暑もしらてわく。ときもいま、小麥ふとむぎはつきよりおろし、まとりとて、またふりしてうちたゝく女あり。學生に麻刈る

男は、科あめる前だれとて、むねより腰に、みのゝことくまとひ雪袴を着て、かしらは布につゝみて、笠着たるも、沓ふみたるも、まれにいとなつ見へたり。小鳥谷といふ村に、ものくひひるねしてくれは、故將堂といふあり。ことゝころにも聞へたれと、こゝには、秀衡を祀たるとか。猪の袋、女鹿メカ口、白子坂、關屋洲輪の村に來り、母屋山鳥越山など遠かたに見つゝ、たゞずめはぬまくないのこなたに、ひとつ屋のあり。そこは、馬羽松ウマハシといへり。いにしへ義家のきみ、こゝにおもむき給ふの頃、はたごうまの料にとて糠もたまへるがながちにくちはてゝ、つゆ馬のくはざれば、その名を馬はまずともいひし。その糠捨たる處を、腐糠クヌカとなんいひきなと、きかれかたる友のあり。かくて、磐手を放て、一戸の里になれはなへて二戸郡とよべり。わけゆかは、波うち峠の坂中に日やくれなんといへは、こゝに宿る。

三日。一戸をたつ。つちはきのふにあきて、朝戸出いと涼しく、浪うち坂になりぬ。盛岡に松か坂といふ處あり。そこを本の松、きのふ過來し中山は、なかの松にて、こゝなん末の松山といふか、うへなりと人のもはらいへり。宮城の郡に在りしとはいづら、「波に移るいろにや秋の越ぬらん宮城か原の末の松山」といふ俊成女の歌ありけ

り。むかしみしところなからいとおかしう、をのかつま浪越しつとや恨らん末の松山をしか鳴也とすんしやすらひて

わけ來ればあつさも波のこゆといふすゑの松やま秋風そふく

峠になれはれいの山よりいづる筆具松の皮具はまかづらなどのくたけたるを、人々ひろひもてつとにそしける。うへ波のうちよりしあとあり、ざりければ、山坂の名におへり。はた末の松とは、もはらにはいはしなと、語つれて村松といふ處におり來て、福岡にそなりぬ。吞香稻荷といふ額の雞栖あり。此みやところのほとりは、天正のころ、九戸政實のほろひたる館の址ありけり。なへて此あたりを、九戸郡といへり。南部路の十郡といふは、喜多郡、二戸郡、三戸郡、九戸郡、鹿角郡、閉伊郡、岩手郡、志和郡、稗貫郡、和賀郡とそ聞へける。いにしへみちのくの郡たりしとは、いまはいさゝかことなれり。此あたりの人のくちくせとて、かきねかいだまといふことをいへは、そのころ、みやこちよりも軍いたして、人さばに入來るをりしも、里の翁かしかかきねかい玉といひたるを聞て、このいくさのはとうち笑ふを、翁兵ともいうちむかひいかにそきたちは、珠の巢におく籬根かいたまてふ歌ありともしらすりけりなと、都人をわらひ返

したる物語あり。こゝに、撫綱の塚とてありと聞て、尋てもしれさりけるは、いつこならんか。八戸の海におつといふ、白鳥川の橋に立てゆんでをのぞめは、龍巖寺に行に、かけはしありて、巖をほりうがちて、みほとけをすへて、こうしさせり。松島の雄島に見しにひとし。めてにも橋ありて、これにも觀世音の堂を、岩のうつほに作りて、いとおかしきところなれば、行かふ旅人は、まつとまり、あせのこひて休らひ、なかめやるところ也。山ひとつ越れば、長澤といふ處の橋落たりとて、ことところなる土橋の大なるを渡りて、前澤村にかゝりて過る。このあたりの山岨みなはたけにて、粟稗のみを作りて、あげ田くぼ田はひとしろもなく、うるしの梢しけりあひて、みちも畑もいとくらし。まとりふりもて、うちたゞく、麥秋に女うたひ、あるは男女集ひて、斧ふりあげてむき穂うつ里もあり。そのあたりを遠う見やれば、夕日のさしかげろひ光りて、いなつまにことならず。金田市一といふ里に、金田山長壽寺あり。小野川口釜の澤をくれば、杉のむらたてるあり。田村將軍のこゝに、月よみのみことをいはひ祀り給ふのいはれ、大同の物語あり。かくて此くれつかた、三戸といふ處に宿かる。

四日。夜や明なんとの鳴つるころ、雨のいたくふれり。きのふ聞しなる神は、かゞ

る雨もよにてなと、相やとりのたひ人の語れは、やのあるしも寝さめして、はたけのくさくさに、又なきくすりの雨や、ありかたのなもあみたぶと、なへ、あくひうちせり、はや女の起出て、麻機をる音のしたり。「かけて織る賤か麻はたあさましやまとをにたにも君か來まさぬ」とすんして、この宿をたちて、黄金橋をうちわたる。むかし長者とのといふかありて、こかねあまたもてかけしかは、しか名におへり、その末いまでもありとか。三戸を放れて、浅水のうまやなり。遠きむかしは、家二三ありて、よへ宿しつる旅人をうむすといひ、人しらずころして、その人をあさ見ざる名なりなといへれば、こゝと所にも、浅水の橋なといふ名ところも聞へたり。過來つる村は、いくつならんと、古町・小向・清浄寺・宮澤この浅水にて待ると人のいらふ。前なる水の細くなかれたるを、

里の子か汲ほすはかりあさ水のなかれつきせぬものにそありける

五戸に來けり。八幡坂のしたより西に別れて、種原村(つね)にかゝりて、十和田山に行の路あり。一本松・傳法寺村・藤島に來て、以地川といふに、木の皮の綱をひきはへて、くり舟の渡りしたり。この水上は十灣のぬまとて、いと大なる湖のありて、盛岡なる奈良崎といへる鹿の、永福寺の僧侶、南層といふが彌勤ふちのいてませるを見奉らまくほり

して、ふかくいのりて夢のをしへにまかせて、たうばりたるわら杓さしふんで、此やりたらんところをもとめありくに、十曲の水海にいたりて、杓のやりはて、ければ、こはわかねかひこゝにいたれりと、あめにむかひ、つちにふしてそよろこほひこゝにすみつる、八郎太郎といふみつちをおひやらひて、われあるしとなりしといふ物語をせり。しかはあれといつの世のことならん、みかしほの播摩かた、書寫の山かけに、難藏といへるすけありて、あけくれほくゑきやうをとなへ、うちには、經典をすんして、露のいとなう、外には権現をいのことのおこたらすしてさうしんのとこあり、みすきやうのいさおし、つもりくゝて、三千部にみち、神まうての日數、三千度になりぬ。しかるに、難藏おもへらく、わかいのち世になかくいきたらましかは、猶みすきやうし、彌勤のほとけをもろかみたいまつりてんと、熊野にみとせはかり山こもりして、ひたふるにいのり、浦のはまゆふも、重に日數のかさなりて、すてに千日にあたれるの夜半うち過るのころ、夢となううつゝにもあらて、みあらかのうちより、白髮の翁のいておはして、いかにいましか願のいとかたけれと、あかいふについてあつまにくたりて、陸奥の國と、出羽の國とのさかひに、言兩といふ山のあるなり、そこに、わけ入りてすまば、みろく

ほとけのいてらんその曉にもいたらんとみさかありつることのうれしう、いでとて旅たち、はるくといたり八重山遠くわけ入て見れば、大なる池のほとりにたてるとしふる松のもとに窟のあるをたよりに、草ひきむすび、木の葉をとりくひ、水をむすびて、みときやうのみして、やま人にことならず。かゝるに、かほかたちきよげなる女の、いつこよりか来て、みのりをきくこと、日久しかりき。難藏あやしみながら、さらにことなう、猶ほくゑきやうをよみてけるに、この女の云、われ希有に得かたき妙典にあひ奉りて、五障の雲みのりの風にたちまちに晴て、心の月いとすくしくすめり。あふき願はくは、あか棲に来て、みときやうして群類をも化導し給ひてよ、難藏われ神の告によてこそ、かゝる山おくに入たれ、女かもとにいたらんこと、かなふましきよしをいへれば、女わかすめるかたとて遠からじ、この池のこゝろなりといふ、難藏かおもふ、これも神のおしへにて、千佛の世に値ふのたつきならんか、女のふたゝひわれといもとせのかたらひをして、なかくこゝにましませ、難藏わか此女におちて、菩提心のうしなひて、なとか悪趣の底にしつまんゆめくとおもへれとはたこれも神のみちひき給ふことならん、かくて慈尊のたまはる世に會ふことの山口にやと女のいふに、ついでい

さなはれて、はかりもしらぬ太池の面に、うち入ぬとそ。そのをりしも、女かの僧にむかひていふ、此の山の西に、奴可の嶺とて、いと高き山の麓に、又池あり、このことわけの嶺より、みちはつか三里はかり、かの池に八頭の大蛇ありて、吾れを妻として、月ことの上の十日あまり五日は、ぬかの池にすみ、月のなからより下は、このことわけの池に來りてすめり、いますてに來らん、こゝろへたまへお僧といふ、難藏さらに怖れたるいろなう、八まきのきやうをかうへにふりかさせは、かしら九のたつとくゑしたり。とく風ふき、雨のふりしきりて、八かしらの龍の、さと飛來りて、このふたつの龍、七日くひあふといきの音は、なる神のことくなりひかり、雨かせいよゝはけしう、つゐに八龍のくはれおはれて、もとの池に販りいなんとせしかと、大松の生ひ出たるにへたてられて、しほ海のかたへにけうせてける、といふもの語りは、三國傳記にも見へたれと、此ふみにはみちのくと、ひたちとをかあやまれり。かゝる物語は、みちのおく出羽にてまぢく、にいへり。言兩は十曲の湖にてやあらん。奴可は糠部など、郡の名にむかしこのあたりをいひしかは、いまいふ八ツ耕田の嶽をやいふらん。此たけのなからに大なる湖のあり、春雪氷たるを通路として、そのたけのそかひのかたにあるいて湯浴

に、此あたりよりも津刈郡よりもきさらきやよひには人あまた行といへり。かくゆきゆきて、相坂といふさゝやかなの村に泊りてとゆきすりに人のいへは、その名たよりに、霧にこめて、屋根のみはつかはかりみゆるをしるへにたとる。河にそひたるこなたかなたは、みな六戸の郡なりけりとか。川霧に猶くらくその村にいたる。

里遠みそこもしらぬ霧のうちにみちとひまとふ夕くれの空

せんたびつやうのものを、おひ行翁あり。かゝる五七の戸の山里のあたりに、嫁入のとき、かく木置てふものを、女のなにくれと調度入とし、その女の身まかれれば、この木置にむくろををさぬわかへのそのに埋むとなん。

五日。つとめて相坂をたち、三本木平といふひろ野に出て、こしかた行末のはるくく見やられて、ひんかしは、さめしろかね、いま河ある根井三澤など、南は三戸のやまくつらなり、遠きたけく、のさかひは、雲と霧とにへたてられてしらす。こはわかくにものとのゝはらしなのちのさちかうかはら、遠つあふみのみかたかはらなとにたとへつへう、行かふ人もまれに朝つゆふかくわけ来るにつふねつれたる法師、けふりうちくゆらせて、休らひてよとて語る。一故郷の人の佛月に見て露わけあかす眞野の登

原となかめたるは、此野良也とてたち別ぬ。しかこのあたりの人のもはらいへれと、尋ね見たりし、牡鹿郡石巻の港べなる、零羊崎のかん籬のほとりに在りける、舎郡山長谷寺といふ寺の池の面に、片葉の葦とてありけるは、むかしのしるべはかり残りたる處とは、いつれをいつれとも、えおもひわいためす。

いつこともおもひまとひてしら菅のまのゝかやはらわきてさためん

七戸といふ里にいたる。西にいなきあり、その名を榊木といふ。そのしりなる鶴の子平といふところありて、きさらき斗のこんの雪のやゝ氷たるをふみて、山に雪舟ひき春木こるとてわけ行、そのかへさは、そりひき捨て、もゝあまりの人むれ立休らふに、春風いさゝかもなう、長閑なれば、夕日さしかけるふをりしも、三本樹平のあたりに、人のたけよりはいと高う、ふたつらに立て、幡ある鉾などの見へたることもあり、これを狐の柵をふるといふ。きつねは、人のかけをかりて、かく戯れ遊ぶ。ことしも、五度見きなど里人の語るは、山市てふものにや和賀の郡の後後野のあたりにて、師走よりむつきに至るまで、山市あり。これをきつねの館といふ、越の海に海市あり、狐の森といふにひとし。はた枯杉よりはこなたならん、影沼平といふところありて、春雪うち霞

たるを、遠う見やれば行かふ人引かふ駒などの、波をかいわくるかと迷ふも、盛氣樓氣見城のたくひにこそあらめ。かくて馬やとひのりて、中野を行てひんかしに、沼の見へたり。むかし都のはらからの女、いかゝしたりけん、しつみたりけるとなん。あねかこがら、いもとかこがらといふ、又の名を小荒沼といふ。坪といふ邑に来る。つほ河かちわたりして、石ふみやいつこにかと、へば、石文村へいきてたつねよといふ、さらはとて馬を野はらに引やらせて至れば、家二、おちくほなるところにありてけるに、とひ入てとへと、碑ありたるはいつことも、そのありつる址たにしらすとて笠縫ぬ。日もやゝかたふくころ、千曳明神のおましませる、尾山とかいふにわけ入は、千曳大明神の雞栖の額は、盛岡の東阜文眞といふ人の手也とか。ひろ前に至て、ぬさとり奉る、この社の下に、千曳の石は、千重のあらこもにつゝみて、ふかく埋て神とはいはひ奉る、その千引の石や、壺の碑ならんと、人のいへり。○圖あり「千曳社壺村、つぼかはら、石文村、尾上の麓を尾上頭といふ村あり」云々

宮城郡浮島邑のさかひにたてるいしふみは、多賀城の碑にて、この坪村にか、石文村に

まことの碑やありつらんかし。ふもひこそ千島の奥をへたつともえそかよはさぬ

壺のいしふみ「碑やけふのせはのゝはつゝに逢見ても猶あかぬ君かな」「いしふみや津輕の遠にありときくえそ世の中をおもひはなれぬ」顯昭・仲實・清輔などのなかめ給ひしをおもへば、蝦夷かちしまも、毛布の郡も、津刈郡も近くよみ聞へたり。もとも名所なとは、遠きさかひも、おもひあはせてよみつべけれと、壺のいしふみ外かはま風なとみな近となりのみなかめたる歌のいと多し。さりけれと碑のすかた見されば、何をもて家つとゝ見ぬ友かきに語らん。

水くきのあとかきたへてそこしもよみとかれえぬつほのいしふみ

と馬の上にてくちすさみふたゝひこゝに來てひねもすつはらに尋ねてんと、あしとくをはせくれは、日ははや烏帽子山におちかゝり、清水目久田などをへて、みちもさりあへす、牛にもつけて追來るかみなときはなちて野かひをせり。遠う釜臥か嶽の雲の中にあらはれ、横濱のやかたにかゝりて、田名部のあかたにゆくといふすちのありと、馬ひきのいふ。

ゆふ月のかけもほのかにみちのくのおくのうらく浪の遠しま

霜松川とかいふを渡て、野邊地の港になれは、うまさくれの水に、馬のすねがらふかく

ふみこみたり。おりてよといふ。數ならぬ身にしられぬる駒さくりさのみやおなし
 あとをふみゝんといふころはへもありし。又「みちのくの賤か繩手のこまさくり
 あやしの月の宿りところや」といふころに猶かなへりとおかしう宿つきたり。こ
 こをも十符の浦と人のいへは「見し人は十符の浦風音せぬにつれなくすめる秋の夜
 の月むへさへけらしとふのすかこもとふして砧の聞へたるを、

浪のよる十府のうら風身にそしむ三府にねもせてころもうつこゑ

六日。朝たちつる宿のあるしに、をふちの牧やいつこならんととへとさはしらて、左
 井の港のこなたに、大馬の浦、奥戸の浦とて、大牧ふたつあり。そのあたりにや、此牧の
 二とせのあら駒を、葉月ころとりてけるなと語れり。此南部路には、九牧十二野とい
 へり。九牧とは、三戸の住谷の牧、同相内の牧、五戸の木崎のまき、同又重のまき、野邊地
 なる有戸のまき、野田の北野のまき、同御崎のまき、田名部の大馬、同奥戸のまき、十二野
 とは、この九まきに、七戸たちの里馬、八戸のまき、遠野のまきをあはして、十あまり二の
 うまきとはなれりとつたへかたらふ。津輕郡にありといふは、枯木平、入内、母谷、瀧の
 澤、津輕坂かしたへて五牧なりけり。ある人のいふむかしありたりし尾坂の牧は、こ

ののへちよりもいと近き、泊の浦のほとりにあらんと、はた梶原の、りし磨墨は、住谷
 のまきにたち、佐々木ののりたりし生、暖は、七戸よりいで、熊谷がのれる權太栗毛は、一
 戸の里うまのうちたりし「みちのくのあら野のまきの駒たにも見るはみられてなれ
 行ものを」あら野は、小荒沼のきしべより木崎牧といふそこにやあらん、秋きりの立の
 牧とよみしは、つかろなる瀧の澤てふところと、人のいへり。立野てふ名は、武藏に
 もしか聞へたり。「吾妻路の奥の牧なるあら駒をなつくるものは春のわかくさ」と
 よめるは、こゝらの牧をやおしなへてもいへらんかし。秀衡のほとけのしろにひか
 れしといふ、糟部の駿馬とかいへたるはあやまれり。糠の部の郡にていまの五七の
 戸のあたりをさしていひけんことゝこそおもほゆれ。かくて濱つたひしてくれは、
 老たるわかき女むたりなり、馬門なるいて湯に行たり。近き明前の浦に販ると
 て、いたく酔て、「わかいたときやア、岨も大地とあゆみたか、いまはだいちもひらと見る」と
 うたへば、又うたひつぎて、「しづく」と清水もたひらに井戸をほれば、水はわかねで、
 こがね涌くと足のほうし、手のほうしをとりて、はとわらひ、あぐり子よにがつれてこ、
 乳のませんにと、科野路などにて、も、女子あまたもてば、末の子をあぐり女郎、おあぐり

と名づく。さりければかならず男の子生れくとて、もはらありき、こゝにても、うめるもくゝみな女子なれば、女子にこそあきたれとて、阿栗子とはつくといへり。安久利は、飽たるこゝろにや、ものゝ盈るをもあくるといへり。あふれたるこゝろならん、爾賀は五十日子^{イカ}てふことにてやあらん、女子文字つけていふならひ、いにしへぶりの残たり。馬門のせきのあら垣に入て、野邊地にとり來りけるせき手いたして、越へてつかろちになりぬ。

太田孝太郎校訂

寛政四のとし、かなな月のはしめ、ちしまのなこりより書つきて、おく野の牧を見めぐり、宇曾利山にのほり、田鍋の市に冬籠して、此縣にとしくるゝまでを記して、はへなきことの葉の見ところなれば、まきの冬かれと名づく。

よきの冬かれ

追手の風日ことにふけとおもふかたにゆくへきよしかね契たる舟をさ世わたるわ
さにのみなにくれとたつさはりあまのたく繩なかき日敷を心ひかれてまたこの嶋
に在れはさちなることよなかつきの月の餘波もともに見なんあはれおかしきむし
ろになと人々のかたらひになくさみ山路の菊のかんはしきみちを高によちのほり
岡邊の薄のうちまねく夕くれはいと、歸らん空もおほへす露けき袖をしほり野原
の鹿のあとを尋ねてはしらぬ林にまよひくれみねの梶の千入はつしほそめましり
たる梢にむかへはあかぬにしきとたちさらんこゝちもおほへす。おしめともみし
かきひかけのくれやすく日敷あまたにかき積て袖吹きなつさひたる秋風もきのふ
にさそひてけふはこからしの名にふきかへて梢さひしきかんな月のはつ空けふは
朔にそなりぬ。あさ坪によき風吹てまつまへなにかしの君ふなよそひして出たち
おはしまし給ふ。ふな子ともろほうしとりさゝら浪かいならしてきさらきやんま

の楠木をふねにつくりて今おろす、柱しろかねせみこかねあやゝにしきの帆をあけて、と聲のかきりうたふか、潮路はるゝと聞へわたり、おほんふなしるしの澳津風にしふかれて、ほとなう遠さかり行を見送り奉る。貴きいやしき磯へたにみちて、人ことによるこほひてさりき、沖の方にむかひて、此君をほき奉る。

吹風も浪路やすけれ君かゆく沖にみふねのかちのしつけさ

二日。やまかたつききたる館に行くとして、小河のあるに、橋よりけしめ、木葉ちりつもり、うかひなかるゝに、

冬來ぬといはまの水の行なやみおち葉に音のよとむ山河

三日。夕附行ころ、時雨ふりはれたるに、

むらしくれよそになり行雲間より仄にもれて三日の月かけ

四日。あした雨ふるに、ゑみしひとり衰きたるか、そほぬれて行を、

夷人も物おもふらしうちしくれ熊のかは衣濡てきにけり

北川時房の翁とをつ蝦夷の居るくに、まかりて、いままた歸り侍らざるをまちて

神な月残る山路の菊か枝を折てかへさのつとにまたなん

五日。あさ戸明れは、つゝゐにうすらひのゐて、空さへ渡り、小雪ふりきけり、こは初雪なめりとめつれば晴たり。

みちのくの夷かちしまの神な月きのふの時雨今朝のはつ雪

六日。あしたのま雨ふりひる晴たり。この頃もはら人の語りてけるは、きの國のふな人あまた、卯のとしはかりに浪にはなたれ風にふかれて、十とせのほと、海たゝよひありきて、加武左都柯といふあらゑみしのをつ洲につきたるか、あるは死うせあるばやまうとゝなりて、ふし残りたるをはいさなひて、こたひ可無散都加の人、四十あまりして、ひんかし蝦夷のくに、積爲太都婦とかいふところに来りて、くにかみに、みつき物奉るとやらん、うたへ奉ることありとなん聞へたり。むかしよりかゝるためしおほへさることなれば、よきことにやあらん、又あしかりけることにやなと人のいふに、可武左都加と句の頭におきて、

かしこしとむくつけきくにのさかひまでつきせぬ御代をかくあふくらし

よき日なりとて、ふなをさの告來れば、寛政四とせの冬、かなな月の七日、松前ふく山のひんかし、泊川のいそやかたさゝ木信英かやの軒近く、ふねつなきたるにのりなんと

ほりしたるにあるしのふひて。

杉の葉に霜おくけさのわかれかな

かゝる句をとなへけるに、

猶袖寒きおくのはまかせ

と付つかゝあらんか季豊のぬしあゆみとうする馬にむちして波よるきしへにひかへてふたゝひなとねもころに聞へたまひてたゝう紙に、

ともつなを引とゝめえぬ別かな餘波もなみにいそぐ舟出は

名残さへ浪路へたてゝ出ふねをおもひのきつな引もとゝめす

かくなんかいつけて見せ給ふに返し。

いつまでとむやひし舟のともつなの心ひかれてこき離れうき

波遠くこきはいつれと友舟に思ひのきつな尙ひかれぬる

つちだ直躬の云、

人めあれはなみたかくせといか斗もれて袂の濡もこそしれ

かへし。

情ある人のこと葉の嬉しさもなみたも袖につゝみかねつる

ふねこき出なんとともつなときはなては人々よき日かな浪いさゝかもうこかす、こゝろやすらになといふに、

追手ふくしつけき浪のふな出にも別行身のしつ心なき

菅子陸子をさなき心のせちにやあらん沖ゆくまてまめやかにめたこしたり。遠さかるほとに加夜邊のたけをはしめ秀たるたかねはなへてましろに雪のふれゝは渚に在よりまほに見やられて、

おもふとちすみかはそことしら雪のふり捨てたく思こそやれ

行まゝによし岡の山度宇遍智のまつ山なと遠く見離れては崎くよこたはりて出こしかたもいつことはしらすして、鳥數氣志のみは、わにのうき出たるかと、うなのうへに、いとちかうたゆたふ。こゝらのしほみちもしゝまなれは舟の中こそりて、としことに松前の島わたりすること、いくそたひならんか。かゝることに、浪たひらに汐いさゝかもおこらさる洋は又あらしかし、あなたのしのめうたへと、ふなはたをうち叩てさはにはやし、蓋とりばなこゑになりて、かたるまに、南部路ちかうなりてやまや

まの木すゑまであらはに見るく行は、をくらく、日は遠方の波にかけおちて、月たかうさしのほりたれば、猶此光をしるへにふねおふといふに、

日は西に入としみれば弓はりのつきぬ恵そあま照します

奥戸といふ浦に寄て、こよひは小谷といふなる、磯やのあるしかもとに泊る。

八日。近き邊に、箭根杜のかんやしろとて、八幡の神おましますにまうて奉らんとつとめて磯をつたひ、山かけを行に、おほくの馬むれありくは、牧の近きにやあらん、山くろ田つらに、柴垣たかくゆひめくらしたる中にたすみ、かれ生ふみしたき、高き嶋山の嶺麓たちならし、ありとある小笹木の根をほりはんて、いな鳴に、乎胡遍といふ名を朝風の身にさむからんうちむれてをこへ峯越駒そいはへる

かゝる牧は、十三野ありけるといふそのふたつなりとなん。奥のまき野とりの馬のかたなつけともすれば又ある、君かなと聞へ給ひたるも、此あたりをやいふらん尾駁の牧は七戸の邊に、尾貴津といへるところあり。こゝをいふかといへは、をぶつに牧あらねとなへて其あたりに牧あればいふにや、昔ありしにやといらふ。赤石といふ邑は、磯邊の石ことにあかければなり。こゝにいたる、山かけにも馬いと多し。こ

の邊も牧にやとへはいなさも侍らし。うめる野馬みなとりはて、秋の末より木戸口おし明捨てければ、この村さかひをおかしてあさりありき、枯残る木葉づゝらなとくらひ、雪ふりては稜つきて、磯によるにきめ、なりのたぐひをくひものとせり。海にのそんたる岡に、ちいさき神のほくらあるめぐりを材木石とて、細き柱のとき石をつみかさねてそみつ垣とせりける。まつる神は、とせのむかししほかまこゝに在りしかは、今そのあたりを、神にあかめ奉る。このとしは浦々のこりなふ病したれと此神のおん恵にあひて、ある宿はしめみなことなかりけりと牛くらつくらふ翁のけふりふきくかたるを聞て此社に奉る。

しほかまの神の恵はみちのくの奥の浦人猶あふくらし

山ひとつ越て、さえもくといふ處の宮居あるしたつかたをはしめ、立いはうちわかてはみな柱のやうにそなりける。こをになひ出舟につみ、あるはねり(練麻葛)そかつらの綱を付て、みや木なと曳やうにして、それくにつかひけり。しかるゆへにやかて村の名におへり。小坂の路行ほと寒ければ、

こやさゆる山かけならしひるさへもくさのはつかに残るあさしも

原田なといふ處をへて、左井にいつ。こなたを小左井といひ、みなとを大佐井といふ。渚に嶋あり、いかめしきみやつくりの見へたるは、辨財天の御座也。神明のみやしる拜み奉れは、慈眼山清水寺といふ、ほそくの寺あり、あるしを自性院といふ、八幡の神にも此うはそくの仕へ奉れり。川ひとつ渡れば、矢の根森にのほるこの神垣のうちとあるは、近きさかひのこもり、磯輪に石弩あれば、かゝる杜をやのねもりとはいひき。あべのいくさほろほし給はんとて、むかはせ給ひしころ、頼義の君、いはし水をこゝにうつし祭り玉ひむさしの國鈴ヶ森の八幡の神を本宮とさためられたりけるとか。なかむかしのころは、たへて神かきもなうおのかし、草木茂りあひて、しるしも見へされは、鈴森のはふり、森田信辰といふ人、此ほとりに至りて、うちなけいてよめる。

太麻たへて神のかゝみも朽にけり祭る人なき松のあらしや

寛永元年のころ、自性院法印賢教といへるけんさの夢に見へ奉れは、おとろきそのおしへのまゝに、土をほりてもとめ奉れは、ちいさき鏡のうらに、ほんたのみことを鑄奉りたるをえき。賢教なみたをなかしよろこほひて、衣の袖につゝみ奉り家に歸りぬ。かつきいやし奉りて、延寶二年甲寅のふん月にふたゝみやしるを清らかにつくり

かへ奉り、そのときのけんさ、大昌院すゝが森に此ことつけやりしかは、かん司來りて鈴ひきぬさたいまつりてよめりけるとなむ。

たへたるも又引おこすみしめ繩ちよ榮行神のまに

大左井によこたはり、さし出たるを矢越といふ、頼義のきみひきめありたりけるゆへ、今も崎の名によふ。其箭磯なみにたゝよひ寄り來るとて、磯矢といふところあり、西は長後、福浦、牛瀧なと行に、佛か宇多といふ處ありけるは、石の形卒堵婆に似たり。このわたりのさへもく石、ことに長やかにて五尺七尺に及ひたり。こは源九郎判官此磯より松前の島に、橋わたし給ひてんと、こゝらのさへもくを牛につけてひかせ給ふるうしたふれふしたればとて、牛瀧の名あり。その材木も、みな石とくゑしたると、うしひくあけまきのかたりぬ。ひろまへにまうて奉れは、蝦夷人の弓矢に、以南乎奉りたるは、あらしきゑひすのこゝろもなやかに、神のおんめくみにひかれなひきたるあまりにやあらん。ぬさとりかしこまりて、みちのおくやのね杜といふことを、杳と冠とにおきて、四のときのこゝろをよみてたてまつるうた、

みね籠わけ來る人にこととはん御垣の花は咲やさかす夜

ちゝの日にみしめ引とも(ア、)のことはりを見せて恵も茂き夏の
のべ近き梢の露の玉垣に夕はいとゞしけき虫のね

おとこ山みねの梢も白妙にやたひおくらん神葉のしも

くもりなき御代の光をいはし水うつすは神のかゝみなりけり

おなしすちをかへる。此左井の浦人竹内善右衛門とやらんいふもの赤人といふ島
になかれつきて、いまそか洲に入ましりて、そのむまこあるが此とし可武左都加人に
いさなはれて來けるなと行かふ人の物語にしたり夕近く奥戸に歸り來て、夕月のか
けあかければ松前のかたを見やりていへり。

おもふとちかけてもいまやしのふらん月も夜渡る天のうきはし

九日。神なり雨ふれはえいてたゞす。ひるの空はれて、海つらくらく、松前のやまや
ま猶くもりて、墨かきにひとし。

ときのまにこなたは晴て海越の山にしくるゝ色をこそみれ

十日。馬にておこへを出たつ、大川目小河目とて、やま河ふたつあるか、みな氷ゐてい
や寒ければ、

のる駒の渡る小河の朝氷ふけ行音の身に冴るなり

大畑に行に、山越といふ路あり中山こへといふみちあり、大間の濱路あり、われはなか
山越をせり。小奥戸とてむかしの里ありし處に出たり。なへて柵ゆひめくらした
る牧の中路を行は、七郎臺といふたかねの麓のひろ野に至りて、見めくらせは海へた
よりやまのおくまでも、ひしゝとませひきわたしたるか虹のことく見へたり。わ
け行まゝに、大間の牧のらちに入ぬ。この頃は、木戸はなちたれば、へたてなう入まし
りあそひ居れるおこべのうまは、右の耳をきり、おほまの馬は、左の耳をさきたれば、是
をしろしにこそ春はとり入るならぬ。ひとつの牧の内にも、あまりの母駄馬ある
に、雄馬ひとつをおいて、みそよその子をうめりとなん、そか父馬は、冬になれはとりて、
近き里に引やりかふとそいふめる。左賀森とて、磯の高岡をいふ、そのあたりの笹原
ふみ分て、行かた霜の眞白に冴へたり、又かた岨のとけたるに、

あさ日影匂ふ方よりとけそめて霜おく山に露むすふなり

磯邊に大間の家居見へたり。五倫田のくゞり岩なとくれは、山田あり。こは稻てふ
ものうゝるにはあらず。田稗とて、ひえかりたるくち根のみ残りぬるに、霜ふかくさ

むし。かまやの浦にいつまことの名は、蛇浦といへと求食するわさに、へひてふ虫は
いむことあれば、なへていはさるとそ。異國間といふは、いにしへこまうとのほなた
れ來りしよりいふとも人のいへり、此浦に夷人すみて其末今もありとそ。ほとな
う日かけ山と云處になりて、

くれ安き冬の日かけの山のはにかたふくまゝに袖冴也

杉尻桑端ソウヘン焼山の麓を分るに、作馬臺といふあり、枝折崎といふ處のひたりは海、右はし
け山なれば、

わけまよひ山路行身も舟人もこゝをかへさのしをりとや見ん

長濱とて、はまちはるくくと過て、下風呂のいてゆに、大湯新湯とて、温泉二ある里はつ
れのいはむらの海岸にのそんたるあやうき路を、岩つらに袖ふれて行に、おかしき瀧
のおちくるにいたくぬれたり。

行袖にやかて氷やむすふらん身に冴かゝる瀧のしら糸

甲崎は、其かたちかふとに露たかふ處なし。赤川といふ里は山河の水あかし、いにし
へ頼義のきみ、ちりりのいはやにこもり七里谷の鬼射たまひきりふさせ給ひてした

かひ奉りたる兵等が、血をあやなしたる太刀をあらひしより、血川といふめる、今は赤
川といへと、そのしるしまそのことく朱なりといへり、水澁の深きなかれなれば也。
木野部といふも鬼の府と書しをと、年たかき翁のおしへたり。七曲とやらんいふ九
折をくれ近く行に、柴おふものあり、いさとくしたまへ、日くれはてなんとさいたちて
過ることのねたければ、

柴人よいさしるへせよくれ行は月をもともに峯のかよひち

釣屋濱ユヅ由ユヅ阪ウヅに暮はて、くたれば川あり、舟にて渡り、おほはたにつき、堺なにかしか家
に宿つきたり。

十一日。圓祥山大安寺禪林といふ山寺にまうてんとて、あるしのあないにまかせて行、

田つらに立るかまつかの實を、

刈あけし田面淋しき冬かれにかまつかのみそ朽残りける

十二日。義光山寶國寺といふ、なもあみたふちとなふみてらにすめる、深阿上人をと
ふらへは、

あし曳の山より高く音信てけふ聞初る木からしの風

となん聞へ給ひしかは返し、

たへていま音こそたてねやま高みふきもよはぬ風のかせ

十三日。雪のおもしろうふるに池田包幸なるやより、

しら雪のふりにし方をとひ來ませ軒もたはゝに冬枯の宿

かゝるうたの返し。

冬かれの宿の木々ともしら雪のつもるを花といさとひてみん

又深阿みたふちのもとよりと聞へて、

まつ人の來ぬもつらしな初雪のふりしく庭をよそに見なして

とそありける返し。

君やこんわれやとはんとあかすたゝあと付わふるけさのはつ雪

十四日の夜。月のあかりければ、

ふりそふる雪としみれは小夜ふかき一重は月のかけにそありける

十五日。雨夜の圓居に池田道賢。

いかはかり積おもひや増るらんふる里しのふ雪のやとりにかくなんありける返し。

なくさめと雪も思ひもいか斗身にふりつもるうき旅の空

十六日。未のときならんなへふりてより雪いよゝふりまさりたり。ある琴ひく女

にかはりて人のいへり。

松風を友と聞ぬる柴の戸にけふ音つるゝ人そ喜しき

となんがい出たるうたの返し。

まつ風のしらへを友とつねにきくたのしき宿をけふこそはとへ

ふたゝひ慶政といふ人

世をうしとおもひしまゝにとひもこん人めかれにし山本の里

このかへしをせり。

よをいとふ身にしあらねと月雪のたよりにそとふ山もとのさと

又、邦政のいへり。

たつきなき山の小笹をふみ分てまれにも人の間そうれしき

かへし。

ことの葉の花をしるへに山ふかくけふ此宿を尋來にけり

十七日。雪猶ふり来りぬ。

身につみて旅のあはれをしら雪のうちけぬへくもおもひこそやれ
かくなん包幸のかいおくりしかは返し。

いとふかき情ありともしら雪のふる郷遠き旅の宿りに

十八日。雪けち行はかり雨ふりぬ。此ほと音つれせさるはいかになと聞へて、
これやそも吉野の奥に入ぬらんわけこしみちのあとしなければ
とそ。深阿上人給りけるうたの返し。

あとたへてきのふもけふもふる雪にへたつ思ひやみよしの奥
十九日。高喜の翁。

時雨ふる波路を分て旅衣かゝるいふせき里に來にけり
返し。

雨に濡れ霜にぬれたる旅衣いさ此里の宿にほさまし

二十日。寶國寺に在て、渡舟といふことを人々ともによめる。
うちとけてぬるまも浪の渡もり呼ふに岸邊の聲のをやまぬ

岸遠きほともしられてわたしもり呼ふにこたふる聲仄なる

廿一日。あかすむ國に在と見て、あしたになりぬれば、

霜牙る草の枕もふる里をおもふはかれす夢むすふらし

父母にまみへ奉るとおもへは、夢さめたるに、

ちゝふ山柞の雪やいかならん身にとし月のつもるおもひは

廿二日。鵜剪山うそり山といひにのほらまくほりして日ころ此里に在れとやまく
雪ふかくつもり、劍の山やせり山といふめる名たゝるところのいはむらのほらんことかた
からんとびたにいひ、田名部よりまうつるはまほなれば、みちひろうわけやすからん
といふまゝげふ其里にとこゝろさして出たつに、深阿上人。

たか山の名におそれや降る雪も麓の里はいまた浅きを

こはいかゝなと聞へ給ふにこたへて、

雪ふかみ分のほるへき山の名のおそりてこゝに日をふりにけり

此里のをさむら林鬼工といふ人。

雪ふりて山より谷にしろければいつ白河の關やこへなん

とある返し。

野路山路つもるは雪にたとらなんいさ白河の關はいつこと

又おなしく、鴛鴦螺といふもの三ふるさと此もていきねなといひてその包紙に、

海川をわたせる人のなきときは鮪の舟にもりて行らん

といふ戯うたをかいつけたるにかへしぬ。

かへるさのつとにするかのそれならて田子の舟をもさしてたのまん

ふたゝひといひて、いつ西にいとちかう見へたる、朝日向山、佐土か臺とて、此ふたつの

山海へたいやたかうして、松前よりのそむゝめにしるく見へたるたかねなりけり。

さどかたいの麓に、日曜大権現とて、たふとき神の祠あり。はた小目名邑といふをへ

て、冠岩とて大なるおかしき巖あり。又羽邑とて、まきのあら山のありて、宮木あまた

伐いたしぬ。むかしこの山五万五千兩こかねいたして材木にかへたるといふ物語

あるにて、山のひろさたかさおもひはかるへし。そかやまの麓にも、はいろの神とて、

三くさのかんたからをまつりたるみやしろありと聞けと、雪ふかければえまうて奉

りす。遠かたにあふきて、

かしこしと聞こそ渡れ水鳥のかもの羽色の神おはしとは

過來し霜風呂の海に、札石とて何ならん書付てける石ありて、汐の引しそきたるをま

ちて、まれに見ることありと人のいひ、血散濱いにしへ鬼のからへきりてあやなのい

はやおもしろきも、みちたかひて見侍らさると人のいふこともねたし。里さくれ

は、迺胡呂といふところを出て、はまちをくれは、正津河といふ邑に小川あり。此みな

かみは、鶴翦山の湖より出る流にて、ふるき名は、三途川といひて、慈覺大師の作給ふ優

婆の像あるを水にいさなはれてなかれ出ませるを、其まゝ、此村に堂たてゝあかめた

り。みなはさかまくたかきしに、木をならへて三尋はかりの橋をわたしたるかなか

ははかたふき柱よろほひくちたてるをからきこゝちして、

つみふかきこゝろにたれもみつせ河こゆるは、無とおもひ渡らん

ほとなう、烏澤といふ小邑のそはかけに見へたりけるに、みつよつとりも鳴たるに、

なれも今ねくらにたとる群からすさはなくかたに宿やとはまし

川代カダイなといふ村を右に近う見やりて、關根邑に至りぬ。こはおそり山の麓にいとち

かくむかしはこゝより分のほりしかと、今は村々しけうたちならひてければ、そむい

て田名陪の市路を麓にしてまうつるとなん。この行ぬかりたるみちに、遠さいくはくもしらす木をしきならへたれば、梯の上をわたるかことくに、わつらひなし、こはこ
と國に見ぬ路のふるまひ也。行人くにかみのおほん恵をひたにおもふへし。糝
山かばの木いと多かりしよりいふ名な邑を過るに、山ふたつあるを越るしたつかた
を、鶴澤といふ。

霜のつる澤邊にたちて子をしたふ聲や雲井のよそに聞へん

この澤のへ近う、汐みち來りしところなから今は遠くあせて、鯁つり澤の名のみ残け
ると、馬ひくおとこのいへり。女館といふ村あり、いにしへ蝦夷のめのこともたむろ
したりといふもの語あり。栗山といふ村そかひに見へて、田名部の里近からん入逢
のかねとともに、夕時雨吹さそひくる山かせに、雨つゝみとうたすひまにいたく濡た
り。ほとなう、その里につきしかば、ニホイ新相たれとかいふ旅やかたに宿つけは、やの童集
てほたさしくへてけるかたはらに在て、

廿三日。川嶋恒方のやにとふらふあるしを、はしめ、尙方中嶋公世のまどめに更たり。

廿四日。恒方の云。けふのうらくと長閑さは、いはゆる春なめりと聞へたる、ある
しのうた。

神無月ひかけに山の雪とけて谷の小川の水や増らんとよめるを聞つゝ、おなしことに、

いとはやもつもりし山の雪はけふけなん名におふ春の長閑さ

廿五日。松前の嶋わたりする舟のたよりに、ふみたくふとて、かいはるすゑにこめて、
埋火のもとに集ひてなにくれとかたらひし夜をおもひこそやれ

(次韻)

廿六日。あるし尙方の、何かしの寺にあそひて作てけるしゐんに、松杉蕭寺晚といふ
句ありけるを見つゝ、

しけりあひて寺こそ見へね松杉の梢にひく入相のかね

廿七日。きのふけふの雨晴て、はた雪となれば、人々も歌よめるに、橋上雪といふこと
を得き。

きのふけふ雪に小橋の埋れてあらぬ方ふむ谷の柴人

廿八日。夜くたち行まで、公世の家にかたらひて、

ふるさとは袖さむからん夜あらしの更るもしらぬ埋火のもと

廿九日。雪は日にそひて、けふもいやふりてければ、此里のならひとて、ひさしひろく作りて、軒端のみ行かひすれは市人やすけにありく。

三十日。けふ山の湯乎曾禮山をやまにゆきてんとて、あげまきをあないにて、己の尅はかり家を出て、里の西より山路をさし、ゆきかい分て行みちは、材木をならべてところどころに柱を立て、ものかいてしるべとせり。二股川をへて、長阪を行は、おほぶなといひて、その木のかれたるもとに、太雪ふみしたきた、すみて、尻屋の崎大畑の浦見やるに、蝦夷國の湯山に離れて、右の方の遠沖に、しろくくと泡のたよふかことき山、仄に見もしらぬたけみゆるを、いかなる山にて、何とかいへる夷の居る島ねならん。あさな夕なかめやりてしりたることもやと、樵夫おほく來るにとへは、こは雪のかゝりたれは見へ侍らん、つねはあを海原に、露見もならはぬ方にこそあなれとてさりぬ。

浪の上になよふ泡のそれならて消み消へすみみゆる遠しま

南は釜臥の嶽麓より残なく、芦崎安渡の入江につき、野邊地の浦く見やられたり。なへて此あたりをさして、那多郡といひ、階上郡ともさたかならねと、いまはもはら北

郡田名陪の庄といひならはせり。いにしへは此わたりの海邊みな卒堵かはまにやありなん。ちかき世につかるちにのみにこそいふならめ。いまし世はところくにあかたをさため給へは、ふるき名たゝるところもうつりかはり、おかしきふしは、誰もあか國にあらまく、其名に似たる處の露はかりもあれは、こはあしこはまことならぬ。こなたはたゝしとあらかひ草紙ともにも、ことくにかいのせたるすちいと多し。阿倍のいくさ起りたるころ、此みちのおくの氣仙郡司金爲時、下毛野與重等、與の兵を集めけるに、安倍の富忠といふものはしめくまにさすらへあるものゝふ、鈍屋仁土呂志、宇會利の輩、その勢はせ集て二千騎になりぬとそかい聞へたりける。いま金屋村あるはかんなやならん。仁土呂志は肥泥邑、宇會利は宇會利河邑にやあらん、その村々いまもたちならひたりと人のいへり。かくて檜のみいやしけりたてる、槓のあら山のみちをわけて、矢立の地藏といふなるは、柚山賤の斧うちそめて、そかもてる矢といふものたてたるよりいひ初し名にて、弓箭にたつさはりたることあらしとなん。冷水といへる清水のかけひ氷り、湯阪も雪にかくろひてふかくからくして、ふみわけたとるく埋残したる鶏栖のもとを雪たかければ左に出る。昔はこゝま

て牛馬ひきかい至れと、今は三途川を限けるとそ。大なる湖の汀に出て、遠近を見やれはいふべうもあらぬおもしろささし出たる雪の岡邊風情ことにあれと、鬼石とやらん、こゝしき巖のそひへたるあたりより、なかれ出る湯の色は、山藍をこきなかしたることくその匂ひえたへしのひもあへねは、しはしたにたちもとゝまらで丸木ならへたる小橋を渡らんとせしかは、あないの云、罪深からんものこゝになれは、此橋糸なとを引かけたるかとおほへ、鬼石はいけるまほの姿してにらまひ、岸邊の檜もはたひろのたつとくゑして、おそろしきふるまひをなしてければ、わたらんことかたう、かゝる三途の橋より、みな歸り待るとそ。そのためし、紀のたかの山にひとし見たまへなる畜生地獄の流あなくさとて、袖もて鼻おしふたきてとく過る、湖の高岸のひんかしはたかき岡にて、檜石楠花の生ひましり雪淺きかたには、つげゆづる葉、高野つゝじ松島夷山にあ真辟葛しげう生ひ茂りたり、渚を見れば水鳥むれり。
冬かれぬ木々の梢のほかに又鴨の青羽の色をこそ見れ
水海の面に、夕日かけろひて、たかねの雲はなたいろに、うすくかゝりてやをらくれ行に、

いかてかは岸ともしらん夕まくれ雲と雪との色そわかれぬ

けいしうつ音ほのかに聞へて、みてらになれは門のとより音信たるを聞て、まつの火さゝけて、たそならんといふに、しかくといらへて入は、腰なゝめなる老ほうし、この雪みちをわけて能こそほりおはしたれ、さそ寒くや侍らん、かゝる山寺のもてなしにはとて柱のごときたき木をいくらもつかね、さしくへさせてければ、たちまち火は高くもへて、牙へ行小夜中ともおほへず、軒端の雪やしたとけぬらん、玉水の音聞へたり。ほうしの火近く寄てとひたにいへれと、此火のあつさに遠くしそきてものくひやをらふしたるころものゝうめく聲聞へたるを、こはいかなるものにかとしのひやかにひとりこちたるを、枕かみにあるしの老ほうしふしたるか、耳とく聞て、いつも冬になれば、鼯、鵲鼠のたくひとより入來て、鼠追めぐりとくふ、それにやあらんとしはふきましりに寐物語あれは戯歌、

夜とともにいねみいねすみおりるたち落るともなき鼯のこゑ

ほうしましたとはくらきにおき出て、みすきやうありけるに、そのあたりならん、鼯の聲鳴もをやまねは、

法の師のみのりとなふる窓ちかく曉おつるむさゝひの聲

霜月朔の日。あさとくおき出て、鶏頭山を見やり、軒はに近き湯泉を汲て手あらふ袖に霜牙へたり。

いつるゆの末や氷のむすふらん朝戸出寒く霜さやくなり

さはかりふかき雪なからみてるのほとりはいと浅く温泉の涌出るあたりはたへてつもらす、本堂にまうててあふけは釜臥山菩提寺といふふたつの額は、もろこしの僧侶悦山のめてたうかいなし給ふにこそ。

鳥ならてあとなき雪の山ふかく分ればこゝにみねのふる寺

山奥より木を削て泉をとること遙にめぐり来て、軒近くとくくと落くるをくみてみてらにはこふ。

はるくとめくる掛樋のたへくになかはは氷る冬の山寺

あまたの御堂残なうとさしあるは芦のすたれもてめぐりをかこひて、みほとけもみな冬籠し給ふなれは、いともの淋しう、しかはあれと湯ふねのわきかへりなかるゝ聲、石のあふりのもへ出る音は山谷にひきわたたりぬ。観音の御堂にまうて、伽羅陀山

にたくへし山の麓かゝる御堂に入はほうし蹲りて、かねうちならし、しはかれたる聲をうちあけて、そもく此みやまは、慈覺圓仁大師のひらき給ひて、本尊の地藏ぼさちを作給ひ、一字一石のほくゑ経をかいてつかにこめ給ひしとて、今に在り。はた、恵心の佛も、なかころの圓空のつくりたるふちほさちもある也。凡越の立山にひとしうもゝみそち六のおそろしきちこくありたりしかと、つみのかきりはてゝうかひぬれは、今し世は其數もすくなう佛のおほん恵にあへり。たふときことは、此日の本に二のお山とあふき奉る也。佛法僧の鳥は、卯月の八日の夜をはしめに、葉月のもちの夜まで、ももかあまりを鳴こと今にたへす。三の御法をさへづりぬと、山のとこをいひて、やかててるたへのきぬのみとはりをあけてければ、伽羅陀せんほさちなりとて、くろくすゝつけるならさかのみかたしろに、黒き麻衣着給ふか、もすそのやれ行たるを、ひとつのふしきとゆひもてをしへたり。右にくろきほさちの斧作のまゝにおましますおほん前をはしめ、大なるふみものをわらにてつくりて奉れり。いつのころにや、すきやうしや此山にこもり居てすへものゝ佛を作りぬ、これ千鉢佛とてわつかに残りぬ。硫黄のもゆるをさしてなまこの地獄箸塚、修羅道、かねほりちこくな

と雪の下に埋れたるに、新地こくといふなるは、ほのを高くもへあかる音は、なる神に
ひとし。左に九陪くわいちこくといふあり、こはいにしへ左近とのと聞へたるか、國のかみ
をおかし奉らんとて、ごにおち入給ふ也。見たまへ長刀のあと、そか馬の蹄のあと
あり、これなん宇多邑作兵衛かちこくとあやしくもいへり。たいないくゞりの窟も
雪ふかし、又雪なきときも今は行人なしとあないかたる。五智佛の掌大抗オホツクシナ内、小つく
しなひ屏風山とてをしへたり。湖のへたをめぐりて、ほくゑちこくこくらくはま獵
師ちこく塞河原百姓ちこく血の池はちまんちこくさかや糞や見めぐりてける中に
鹽やきちこくといふなるは、石の上に霜のおきたるかとおもふは、こゝらしほの積た
る也、これを人ことになめて、口の薬とせり。小つるきの山あり、圓仁の坐禪石、舍利濱、
經塚、そめものしこなべやき、みたま石しはすみそかのタなき人にそなふるをみたま
石まめしといへるに似たるとしてしか名にせり柏
石なと雪のふかくふれは見へす、しらほねを納るつかそとは納るつか冷の湯ふる瀧
の湯やくしの湯、山かけに行は、花染の湯とて、うすきくちなし色にわき出はたしん瀧
といふ湯のねも、奥山にありとかゆあみ人のかりやあまたたてならへかはやしとす
るところも、細きなかれのうへに造かけたれは、こゝかしこにやはいと多くさゝやか

なからならひたり。雪ふかく眞白の山のそかひより雲のほるかこくとく、いしのあ
ふらのもへ出るけふり湯のけふりたちましり、あさ風にふかれたり。

釜ふしの麓の出湯わきかへり嶺に煙の立のほるなり

いさかへりてんとてきのふのすちをたとるにちくしやうちこくの匂ひ、しのひかた
くとくしそく。此山に湯あみに至らん人は、煙草の葉もてこかね、わきさしのたくひ、
かなものはみな包たり。かくせされはくち葉の色にこくとくさびのかゝれは、そ
れを辟る料にこそあらめ。水海のそこよりふちくと湯は涌出れといをもすみう
すらひもゐたり。鹿猪熊狼など、山おくに在らん、うさきましらちかう出ありくな
らん。さるけものゝふみしたき過たるあとみちくとつてつたり。劍の山を左に近
う行に、

其秋の霜はものかはきるはかり冴るつるきの山の下路

ふしたる木の雪拂ひて、しはしやすらひて、いと大なるくち木のたてるに、かいつけた
り。

かけのほる麓よりまつ山の名のおそれみふしみいやあふく也

いつのころならんつのかのあき人此山にのほりてたはれうたよみたりがまふせてたかねとあつきみのりの湯からだせんじてやまひいゆ也といふことの侍りきなと、あないかたる。やかて多那邊になれは、けふは月に三たひの市とて、なにくれの物うる子ら多くつとひ、かれこれとよはひ渡る中に、三丈斗の木をおしたてり、これを市神といふ。此末の枝にはたれのつもりたるを、

あき人の手向とやみん市姫の神のみかきの雪のしらゆふ

二日。公世の家に圓居したる夜歌ひとつふたつかいつけて、あるしに見せたりけるを見きとて、成章てふ人のもとよりとあり。

よしあしの浪速しらねと玉かつらかゝる言の葉聞もめつらし

とよんできんつくの館よりあか居る旅館までをくられけるを見て、返しせりけるをきんつくのもとまでかいやる。

おもはすよ人のこと葉の玉かつらかゝるかしこきひかりみんとは

三日。あしたよりふきしまきして空はれす暮たり。

四日。夕になりて集ふ。炭竈煙をよめる。

つとにこり夕にやきていとなみのけふりも細き嶺の炭かま

遠村雪といふことを、

山本の梢も雪に埋れてけふりのみたつ遠の一むら

五日。己の尅はかりいかつちなりて晴ぬ。夕さりつかた、不退山常念寺土淨なる、巖益上人をとふらふに、上絃のかけいと高き冬枯の柳の中に、鈎などのやうに見へたり。

月のかけ雪の光に軒近き柳の糸のよるとしもなし

六日。やまもと保列のもとより、

みちのくの末の松山打こゆるなみくならぬ名こそたかけれ

かくよみて贈られたる返し。

しるへありと越れば人をみちのくのすゑの松山わけしかひとて

七日。野寒草。見増戀。

女郎花尾花葛はな手折にし野原は霜の盛也けり

磯の波かくともしらし海士のかるみるめ斗に増るおもひを

八日。吉田懷貞といふくすしの、やとをとふらひしかは、あるしふてをとりて、

旅人のとふも恥かしおくの海夷か窟に近きすみかを

となんありけり。こは奥の海夷かいはやのけふりたにおもへはなびく風やふくらんと聞へたるところも志理彌とて北海のはてなるへたに、今鬼か窟といひてむかし蝦夷のこもりたれば、かくはよめる。あるしに返し。

いはやとのけふりはたへてにきはへる里のしるへを尋てそとふ

九日。木浪といふはまよりとり來りしとてちゝの色なるいしなこを人のくれたりけるに、

これも又よむとも盡しさゝれ石よせてきなみのはまにひろはん

十日。吉祥山圓通寺菩提寺の本寺なり禪林也けり。にとふらひあるしの冠古上人とかたらひて、かへる夕くれ。

この寺のいふへは袖の色なから雪に眞白の衣けさ山

十一日。あさ河わたる、八十の老のしはしたちやすらひてあか佛のうつれる見たるを人の見せけるに此かたに、

そのそこにしらぬ翁と水かゝみ老の浪よるおのかすかたを

十二日。恒方の云過し夕はしめてとふらひおはしたるときかくよみ侍りしかとひめおきつるなと聞へて、

夜とともにいさかたらなんまれ人の雪の扉を叩うれしさ

ありけるに返し。

けふこゝに雪のとほそをたゝかすはいかてかしらんふかき情を

十三日。あかなにくれと記したる隨筆てふふみを見きとて秋濱武憲といふ人のもとより、

そこふかき心の海と水くきのふてにしたかふ人の言の葉

とそ聞へたりけるかへし。

水くきの浅き心をいとふかくあはれをそふる人のことは

十四日。この日風ふき雪猶ふるに、爪籠ツメカゴわらくつとて雪みちをわけん料につくりたるこのふみものをうるますらお門ことにたちゝよはふを人の見ていてかひてむ、こはきやうの子の遠き村里よりこゝにもて來けるといふをきゝつゝ、

浅からぬ心なるらしつかへますおやのためとてつまこうるみは

十五日。寒夜千鳥。

鴉の海牙る夜ふかくきしなみの氷るか鶯の遠さかる聲

めくらしふみもてありくを、サンゴウ參語といひよねもらひにありくを、道万といへり。サンゴウとは、檢斷所より何くれと公の仰ことをしもさまのかたまたふれありく役に、ことくに、はありきといひ、小走なといふめる。はた、かたるゑとりの長を此郷にてハドウマンといふ也。

十六日。菊地成章のもとよりといふを見れば、過こし七日の夜、人々の圓居に野寒草見増戀といへるふたつの題よみたるを聞て、これになすらへて、

見よや人おくの、牧の冬かれを駒もすさめぬ草のあはれを

なれば猶思ひ増らん涙河見し水くきにこひ渡ぬる

といふふたくさの歌、おくりてける。これにたくへて返し侍る。

霜はいまおくの、まきのめつらしなかなて茂ることの葉くさは

おもひやれなみたかはかぬ旅衣袖の渡に濡てきぬるを

十七日。そりはしのうへにたゝすみて、西の河邊を見やれば、かまふしの籠ちかう杉

の一むら茂りたるあり。そか中に、海祥山慈眼寺とて、ふる寺のあとあるを、万人堂とて庵ありといへと人ありけにも見へさめれば、

世をよそに杉の下いほたれ住て跡なく大雪ふりまさる也

十八日。蕎麥かひもちぬ、うすゝみやうのものに、小豆いれたるを、ハットフといひ、これをみそしるにしてくふ。此名を、センゾウハウといふを、たうひたり、誰かいか付たるにや。

十九日。吉田晴美（べし）の家に在りて、岡雪。

かきたへて跡こそみへね水くきの岡のやかたにつもるしら雪

舟中雪。

うなの上の浪もひとつに降雪のつもるや浦の小ふねなるらん

寄雪戀。

しら雪のしらすかほなる人になとつもるおもひのいや増らん

はちの木の五葉の、さゝやかなるに、歌よみてとあるしのいへり。

嫩よりいつ葉の松のいつまでかさかゆく宿のしるしをそしる

二十日。七十あまりのほうし、しら麻の袋をおひて、聲高く聞しらぬことをいひほけ
しきさまに何をくるふやと見おれはひさこの水を空にうちやり、なにならんと
なふ。此山ふしは、いつこに生れてそことさためて居るすみかもなう、いかまほしき
ところに行人のいきしにはだなこゝろのやうにさし家にくれは、せによねを人のと
らせけれと多かりければ返しなとせりける。けうのそみかくだ也けり。名をあり
まさく、とよへは、

人はいふ此翁こそ世中にありまさしけれことのうらひに

廿一日。この日松前の舟來ける。そかふな人にたくへて、ある人のもとより、そのく
にの寒さいかならん。此衣着てなとねもころにせうそこして、わたあつく、と入た
るを贈ければ、此きぬを着て夜更行まゝにおもひつゝけたり。

いかはかり訝る夜半ともしらぬひのつくしの綿を身に重きて

おなし島の磯やかたなる花子かとしは十あまりいまひとつふたつにやあらん。そ
の乙女の手して、ふみかい入たる。

雪ふれは次第に寒くなりけりところへ行てもおひへなさんな

となんありける。歌もをさなう賤しけれとまめなるこゝろさしはこと人のえまね
つへうもあらされは、返しせり。

うなひ子のあはれかくなる水くきのふかき情に袖は濡けり

廿二日。めのわらはあまた集ひて、みちさまたけに、いやかたまれる雪をとりて、雪な
けといふことをして、打あひたる中を、ほくゑきやうよむ法師のかしらにさへいたく
投かけたるさま、うちまきかけられたる、遍照寺の僧にひとしかりなん。これに不老
不少のためしをおもひ出て、

たらちねはまた老なくにをとめ子かよそふは雪のかさし也けり

廿三日。垣のとの柳の南にさしたる枝を、ためらひ折かへるは、此夕たいしのはしや
うしにみもとを奉るとかなにかしのうはそくはたかにけんたいといひてしりくへ
繩のやうなるものを、腰斗に引まはし、氷ふみわり、水に入てこりし、經よみありき、山か
けの八幡にまうてたいまつれりくるれば、かなつゝみうちねんふつをとなへ、つゝみ
うちては妙法蓮華をとなへありく、これをおしなへて、寒念佛といふ。こよひをはし
めにせり。